

川柳塔

平成十年八月一日發行（毎月一日發行）
創刊大正十三年 通卷八五五号



日川協加盟

No. 855

八月号

第4回 川柳塔まつり

<平成10年度同人総会>

と き 10月7日(水) 午前10時から

ところ ホテル・アウリーナ大阪(なにわ会館)

(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車)

議 事 平成9年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成10年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

<各賞表彰式>

路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇
賞の表彰式を同日午後1時から行います。

<記念句会>

各賞表彰式に続いて開会。午後4時終了予定

おはなし

弓削川柳社

濱野奇童氏

兼 題 「にんげん」

(香川) 木村あきら 選

「千 円」

(青森) 高瀬霜石 選

「飾 る」

(京都) 都倉求芽 選

「からだ」

(鳥取) 小西雄々 選

「強 い」

(大阪) 河内天笑 選

「進 む」

(事前投句)

橘高 薫風 選

◎各題2句 出句締切午後1時

会 費 1000円(当日いただきます)

<懇親宴>

と き 同日午後5時—7時 同会場で開催

懇親宴会費 8000円(会席料理)

宿 泊 アウリーナ大阪 8000円(朝食付)

◎事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌最終ページの
申込用紙に明記の上、9月10日(木)までに本社事務所あ
てお願いいたします。

懇親宴・宿泊の御送金(句会費をのぞく)は同封の払込用
紙でお願いします。

主 催 川 柳 塔 社

サッカー観戦記

橘高 薫風

この冬長野で開催されたオリンピックサッカー大会では、数々の名勝負と日本選手の活躍に大きい感動を得たが、夏は夏でサッカーのW杯がフランス各地に展開され、岡田ジャパンの敢闘ぶりに興奮を覚えた。

アジア地区から先行する韓国、イラン、サウジアラビアの各チームが予選リーグでもまだ一勝もしていない事実から、日本とて初出場でいきなり勝てるはずはないと思うのが先ずは常識であろう。

岡田監督は、その立場から予選リーグ一勝一敗一引分けて決勝トーナメントへの進出の目標を立てた。そして目標達成への策を立て、手順を練習に打ち込んだ。それは守り第一主義であった。三戦とも主義信念を通したことは良い。

選考に上がった中の中田選手を見て「茶髪の目立ちがりの子が一人いる」

と妻が言った。私は答えた。

「あの選手は攻めや守りの司令塔のような役割なので、中田はここに居るぞと常に他の選手に分かることが必要なので、そのための目立ちがり屋になっているのや。果たして一行がフランスへ発つ時は、まずまずの金きらに染めていた。

開会式の翌日、予選リーグの第一戦はブラジルとスコットランドであった。キックオフ五分後、早々とゴールをへディング（肩でか）で決めた選手がいた。

ブラジルのサンパイオである。ブラジルから出稼ぎのJリーグ横浜フリューゲルの所属でもある。出稼ぎという言葉が悪いなら助っ人だ。Jリーグ並みの選手と思っていたのが本場に出ていきなり力を発揮する。相手により、場所により相応に大きくなれる器量は何処かが違う。

予選リーグが終り、トーナメントが進むにつれ、その差は基礎の違いだと感じるようになった。ドリブルとパスとシュートの基礎を、個性的専門的技術にどれだけ伸ばすことが出来ているかにある。フランスとイタリアの対決で強く感じたことだが、両チームの攻撃への波と、

防禦へと引くりズムの美しさである。前後半九十分の熱闘、延長戦の前後半の計三十分の死闘の間も、このリズムは崩れずに立派だった。名勝負だと思った。

川柳とサッカーは何一つ関連付けるものはないが、一つの道として、基礎の大切さ、作句や選句が個性的で専門的であらまほしいこと、リズムの有無が内容を如何に生かしたまた損うかを知り、共通したものを実感した。

岡田ジャパンの戦果は三試合ともに一点差の敗退であった。差は一点だが実力には格段の相違を感じた。

世界の舞台で貴重な体験をした選手たちが、口惜しさとハングリー精神をもち、研鑽を積んで二〇〇二年の日本開催にまで飛躍成長をすればよい。大いにたのませて貰ったことに私は満足している。

悼 吉本善風君

雨降らぬ梅雨も寂しや君逝けり
男一匹目刺一尾見つめ合い
髭だけで女に勝てるはずがない
男なら生まれ変わって見せましよう
閻王の前に立つ時に男



座右の句

亡母の闇この世は雨が降っています

(薫風)

私の句

母と子のいつか二つになる流れ

山本 希久子

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 サッカー観戦記……………	橘高薫風 ……(1)
カンボジアで会った子供達……………	西出楓 楽 ……(2)
川柳塔(同人吟)……………	橘高薫風 選 ……(4)
自選集……………	……………(51)
私の句 特集(1)……………	……………(54)
川柳の群像 田中好啓……………	東野 大八 ……(58)
古川柳歳時記 『孟蘭盆』……………	清 博美 ……(60)
水煙抄……………	西田柳宏子 選 ……(64)
大空のころろ(91)……………	橘高薫風 ……(83)
秀句鑑賞 「同人吟」……………	西口い わゑ ……(62)
水煙抄……………	三宅 保州 ……(87)

「カンボジアで 会った子供達」

西出 楓 楽



タイのバンコク経由で、世界遺産の一つであるカンボジアの、アンコール・ワットへ五月末こわごわ旅発つた。と言うのは内乱が続

き、地雷があちこちに埋めてある国と聞いていたからである。行ってみれば、地雷撤去に出る軍隊のトラックに一度出会ったが、観光地ではそんな心配は無用とのことであった。観光の基地となるシエムリアップの町の、日本より数倍ゆっくり時が流れているような心安らぐ風景。いにしへのクメール王国の栄華をしのばせるアンコール・トム、アンコール・ワットや、バイヨン寺院壁面の、その努力を思うと気が遠くなる精巧な石の彫刻。トンレサップ湖の、カフェ・オ・レ色の水で漁業をし、食物の調理、排泄など全てをまかなう、水上生活者達の大きな街。それらの印象もさることながら、何より心に残ったのは、子供達の姿であった。

脳ミンが沸騰しそうな暑さの中、遺跡見学にバスをおりるたび、素足に粗末なものをま

澎湖抄……………	八木千代選……………	(84)
茴香の花……………	宮西弥生選……………	(88)
「うっかり」……………	堀畑靖子選……………	(90)
一路集「席」……………	山本三郎選……………	(90)
「墓」……………	古川喜美子選……………	(91)
初歩教室「筋」……………	吐田公一……………	(92)
アンコールワット世界遺産紀行……………	田中正坊・山本義子……………	(94)
エッセー 川柳と私……………	結城君子……………	(96)
笠原吸江さんを偲ぶ……………	吉岡美房……………	(97)
七月本社句会……………		(98)
各地柳壇(佳句地十選/佐治千加子)……………		(102)
柳界展望……………		(118)
八月各地句会案内……………		(119)
■編集後記……………		(120)

座右の句

風の糸のばして風にさからわず
私の句

(茗人)

子の叫び千里先でも母は聞く

倉益一瑤

とつた子供達が物売りに寄ってくる。みんな小学校低学年以下で、幼児を抱いたものもいる。夕陽を眺めるため登ったアノン・パケン山の遺跡へは、子供達がぞろぞろついてきて、私達の手を半ば強制的に引く。そして、山をおりたところで一ドルをねだる。

日の出を見に行つたアンコール・ワットには、ここでも同じように五時すぎだと言うのに、もう子供が大勢来ていて、絵ハガキ、木綿のスカート、竹の笛やカウベルなどを売りつける。みんな抜け目なく高い値をふっかけ、相手の反応をみてだんだんに安くする。

ガイドの説明では、この辺りの農家は月十五アメリカドル程度で、一家が暮せるとのこと。たぶんその収入を親はあてにしているのだらう。これがこの国の子供の全ての姿ではないが、同じ年頃の孫の暮し振りと比べ、胸を衝かれる思いであった。

一方、日本の子供の多くは、受験戦争を勝ち抜くために、小さい頃から塾や色々な稽古ごとに追われている。もちろん押し売り、たかりまがいの行為がよいはずはない。しかしカンボジアで会つた子供達は、家計を助けたい弟妹のお守りをし、家族の一員としてたくましく生きている。日本の子供達よりはるかに、生き甲斐を持つているかも知れない。さて、どっちが幸せなのだらうかと、つくづく考えさせられた旅であった。



橘 高 薫 風 選

砂川市 大橋政良

ほんとうの孤独 柩を閉じてから
破れ傘どう回しても顔が出る

酒呑みの相手は猫も飽きてくる

叩きそこねた蠅が仇を取りにくる

ネクタイの曲り動かぬ棒グラフ

野火走るわたしも走るデカダンス

竹原市 小島蘭幸

うれしい時にうれしい顔をしているか

なつかしいものに友達のいびき

記念日とする萩焼きをひとつ買う

ななが起きてでも不思議ではない雨の音

師よ父よ友よと蓮の華ひらく

同級生が母になったという十九

鳥取県 土橋 螢

やがて夕暮れ善人は悪人に

お疑い召さるなお茶を飲んだだけ

人畜無害 体温三十六度五分

紺碧に澄む潮時を待っている

底抜けの穴に嵌った夢だった

ストッキング履くはかないはご自由に

広島県 藤解静風

逆光の棚田が描く万華鏡

その刹那神も仏もただ黙る

少年が病む先生が病む国が病む

投げ返す言葉には火もつき易し

花も咲かせた奈落にも落ちた

カルチャーへ白い眉毛は抜いてゆく

生駒市 麻生アト

ガリ勉の結果人生ふみはずし

出るあても無いのに予報きいている

玉葱のまろき光を抱きしめる

四字熟語並べて煙にまくつもり

オブラート着せて物言う癖がつき

眠れない夜にふさわしいニニロツソ

豊中市

田中正坊

年一回健康チェックとなるツアー

須弥山のごとく祠堂がそそり立つ

レリーフに偲ぶクメールの栄光

端麗なデバターの胸ゆたかなり

四面の観世音像ほほ笑めり

ガジュマルに抱かれて遺跡天に伸び

弘前市

中山雅城

二度あることは三度砂漠も地獄

四海波孫の船出に贈る詩

五目から始めて囲碁の名人位

六根清浄もう直ぐ山は冬になる

七転びしてから強い達磨さん

八起き目の相手になって火傷する

大阪市

西出楓楽

傘一本ふんばつ梅雨を待っている

ハーブティー小指をツンと立てて飲む

スーパードは空腹で行くものでなし

気がつけば世に未亡人多いこと

ノーヒットノーラン続く昨日今日

逸らされた話へ染みる梅雨の冷え

豊中市 安藤 寿美子

空想のとおりになったからこわい

てきぱきと掃除始めていやがられ

老残の身をやさしさにつつまれる

校歌斉唱まだまだ声が出ますがな

サッカーを見てない人から電話くる(ワ杯)

イヤリング外して今日の夢終る

寝屋川市 江口 度

田周率橋の長さに驚かぬ

うららちゃん終ると電話鳴り出した

稲の苗短くなつたなと思う

古里も墮落 温泉湧いてから

うぐいすのお経で拜む磨崖仏

自慢話のように失敗談はずむ

出雲市 竹治 ちかし

白無垢が似合う娘のお年頃

子育てのうちだけ我が子かも知れず

子の幸を願って親の見栄は捨て

娘の好きな彼が昔の我に似る

判一つ押して他人の姓になり

嫁ぐ娘に昔の若い妻を見る

守口市 森川 まさお

海見えるバスの終点暑いとこ

常夜灯魚釣舟がみな帰る

蟻の列どこにも陰のない日向
遊びではないぞ子子(ほうふら)浮き沈み

先客の団扇が残っている座敷

宣徳の火鉢をタバコ盆にして

島根県 堀江芳子

恩賜の時計と八十七歳すこやかに
藤色の菖蒲は京に似て和む

ゲンマンを守ってじいの顔が立ち

ピカピカに磨いて心なぐトイレ

明日は明日ごらんよ美しい夕陽

ほろ酔うて八十七のいい寝顔

梅雨の雨ちよつと詩人にさせてくる

鳥取市 美田旋風

煩惱の変化ほんとの僕を見る

都会地で男女が見分けにくくなる

アジサイを色づかせてる愛の雨

風邪引いた場所を喋れば角が立つ

親子高齢みんなばけたらどうしよう

米子市 白根ふみ

霧があけまるでおときの池になる

水鏡この世のものと思われぬ

喧騒を知らない湖で梅雨もよし

あそびごろにかあるく白をまぜている

相槌を打たぬとはなし治まらぬ

吠えるのは淋しいからと思うけど

竹原市 岩本笑子

ミスマッチ熱帯魚さえ夢を見る

二番打者僕の後ろに妻がいる

ひらりひらり生き抜くための蝶の舞い

もう五分この差は朝を抜く時間

それは祈りか消えるまで虹見ていたな

何か言っつてほしい渋茶を入れ変える

米子市 澤田千春

箱の中不思議な種が一つある

一番星に僕の進路を問うてみる

封切れば五線紙に舞う白い蝶

悲しみをのり越えて立つ暮れの塔

野すみれの種が選んだ父の墓

待っているそのときめきをふとこころに
堺市 近藤豊子

子ら巣立ちわすれたうたを思いだす

かえり道なじみのねこと雨やどり

でっぷりと肥った猫のふしあわせ

尾ひれもてば海のおもさの初かつお

つゆ晴れまポンポンダリヤの影をふむ

噴水も小鳥も空へあこがれる

豊中市 吉田あずき

古いものに愛着わいて来る不況

母と歳重ねて詫びることばかり

笑い話にするまで負けてなるものか

ざっくりと切れば大根未練なし
梅雨晴間ゆく先々に用がある

たそがれの雨にツバメがよく似合う

和歌山市 垂井 千寿子

たとう紙に溜息入れて夏終る

虚飾して真実の友見うしない

紫陽花の一生夢が多すぎる

先頭を見失つてる蟻の列

ライバルに軽く逆立ちして見せる

正座して大和撫子ここにあり

豊中市 井上 直次

古い二人忘れることに笑い合い

猫を見て分かる飼主令夫人

プライドをはずすと猫が膝に来る

世渡りに嘘を除いてきしみ出す

立志伝ロマンも毒も織り交せて

エリートが札の魔力に沈みゆく

豊中市 湯浅 馬洗

余命表ゼロに驚く喜寿の夏(平均寿命77歳)

同窓会互いの老いに活を入れ

叙勲辞退自問自答の八月の空

趣味の欄読書散歩は面はゆい

眼を病んで鑑真像に今いちど

異国の丘祈る歌声譜は不滅(吉田正追悼)

最終便言葉いくつも宙に舞う

無愛想な猫ひよいと越す水たまり

春ですよ腹ばいで見るタンポポの顔

みんな過去ひとりゆたかに飲むコーヒー

地獄極楽裏に表にある泪

弘前市 浅田 隆樹

冷蔵庫ビール二本の幸福感

消費税取らぬ漁村のスルメイカ

春の陽にみな許されて花開く

くつ下を脱いで浮き世のうさも捨て

何よりの元氣みそ汁ひとすすり

弘前市 斉藤 効

梅雨空を突き農高のVトライ

りんごの実親指越えて曼陀羅忌

ねぶた笛吹くと津軽の子に返る

この石も我が家に根付き苔をつけ

一粒の汗一粒の米になる

弘前市 小枝 ふさる

修正はしないと決めた老いの道

ひと言で用事が足りる古女房

散骨はしない先祖の墓がある

子離れが出来ずに今朝も受話器持つ

倦怠期妻の笑顔も気にかかる

町名が変わる歴史を置き去りに
弘前市 高橋岳水

園児等の袖口濡らす放生会

定退の視野から消えた雲の峰

少年兵たりし終戦忌が巡る

胸中を読まれてからの後手続き

弘前市 高瀬霜石

冷凍庫返せぬ恩を入れておく

原石を磨くわたしも磨かれる

墓碑銘に加害者の名は刻まれぬ

ライバルの寝息をひとり聴いている

達人が達人を知る花鋏

弘前市 蒔苗果林

ほかむりお地藏様に見てもらう

水を呑む男大きく見せる梅雨

梅雨入りは老いに三度の飯せわし

鍋の蓋みがけば丸にまるばかり

老いの絵の葉が一枚も葉に見えず

弘前市 小寺花峯

お隣の愚痴に耳貸す暖簾酒

ためらいの傷口癒やす雨の音

青春を借りてビールの一気飲み

ぶつかった壁にお辞儀をしてしまふ

無農薬百まで生きてやるつもり

献体の前に献血ならの僕

雑用のひとつひとつにある絆

汗あせの無学で編んだ立志伝

減反の次は更地になる米価

好きだけで続いた僕の一行詩 (二十年)

弘前市 櫻庭順風

見てびっくり聞いてびっくり斜塔ピサ

真つ直ぐと傾き喉で絡み合い

傾いて傾けてなお傾ける

真つ直ぐになるなど祈る町興し

タイムカプセル セピアのピサが疼き出す

弘前市 一戸ツネ

三太郎も徳利さげてる河童村

満月に哭いた河童の裏表紙

酒とろり河童もとろり鎮魂歌

自画自賛野心は消さぬ老河童

弥陀の声河童の仏性がきたてる

弘前市 須郷井蛙

戦争に勝つはずだった杉林

携帯電赤字社長には見えぬ

特売を冷凍室に貯金する

日曜日首輪もとれてよく眠り

往復をバスで出掛ける遠足か

弘前市 今 生恵子

少年期のらくろ読んで塾知らぬ
S・Fをむさぼった夢まだ覚めず

男一匹盛られた毒も肥料にす

ルノワールの裸体にいまもときめいて

ミニトマト夜は鬼火に化身する

黒石市 相馬 一花

どことなく馬に似てくる繊維食

握手するだけでホルモン分泌す

猿山のボスよりひどい亭主像

ヨトウムシよりは雑食するヒト科

有難い法話に悩む膝頭

十和田市 阿部 進

親切も恩を着せると逆効果

愛想いい窓口選び預金する

子の非行親がおろおろするばかり

小手先の景気対策効果ゼロ

悔し涙我が人生の糧にする

仙台市 川村 映輝

老いすすむ偶には女房にお世辞言う

血圧正常晩覚えぬほど眠る

思索する側で女房テレビ見る

CMは臨時ニュースに優先す
細工した川に民話が生まれぬ

町田市 竹内紫 靖

どうでした 写真ができてから話す

道問えば街路樹 距離と技師つばい

礼装の輪が遊び場にアマ楽団

政治家へ恐縮しつつ専門語

辞典練りキー打つ仕草 翻訳屋

横浜市 菱田 満秋

晴れの日へ鯛も化粧をさせられる

返ってきたこだまに勇気づけられる

リング剝く時は凶器と想えない

愛してる分を嫉妬へまわされる

湯めぐりの下駄で城崎起される(城崎温泉)

横浜市 清水 潮華

飴なめて庭の見積り思案する

思い出の大樹を残す庭プラン

エレベーター不審な人と乗り合わす

一瞬の慚愧流しに米流す

幸せの切符に途中下車はない

横浜市 後藤 早智

柿の花ポトリポトリと自我を捨て

縁側にふるさとの四季手繰り寄せ

花暦亡母に繋がることばかり

来世でも花咲ばあさん続けます
寝言にも答えてくれる夫と居る

横浜市 菊地政勝

オフサイド目に余るから核を持ち

出港のテープに愛が託される

思い出し笑いに猫が席はずす

まわりでは古い話を愚痴と聞き

いろいろな御蔭を貰い今がある

静岡県 蘭田 猿 杏

畦道で立ち読みをする子の便り

世事遠くはしり梅雨なる厚い雲

灰皿の山盛り五月のざんざ降り

生き物のように横断紙風船

ほどほどを忘れた鍋が煮こぼれる

富山市 舟渡 杏花

別れてもずっとひとりできて欲しい

囀って囀っています山里で

不死鳥とまごう女が離れない

十三回忌 衣桁へ吊るす母いち枚

ペットシヨップにも適齢期あるらしい

富山市 酒井 輝

花に声かけてね鉢を盗った方

百歳の薬になっているタバコ

倒産と決まり己れの貌になる

スキューバが好きで地球が二つある

縄文の血が涸れ果てたピルの墓

富山市 島 ひかる

ワイン一杯しあわせが満ちて来る

埴輪の目いっぱいことば溜めている

少年の自負は視線を逸らさない

角砂糖溶けてほのぼの佳い返事

会者定離 輝く月も欠けてくる

犬山市 早川 盛夫

奔流を二つに分ける石がある

美しくなつてからではもう遅い

酒呑むといつも油断してしまう

どこというではないが今絶不調

髪を切る娘に何があったのか

可児市 板山 まみ子

軒かく愛していると言った人

リハビリに痛まぬ舌はよく動く

馬籠にはどこまで青い恵那の山

仏陀なら何とおおせか核実験

何事もなくて今夜の月明かり

京都市 山海 友 照

泣きごとを言わぬとなりは青蓮院

恋うひとへ祇園囃子が遠ざかる

大文字亡夫が好きな位置にいる

鴨川の流れに過去が遠くなり

夏の日の一輪挿しにある孤独

京都市 都倉求芽

天気予報何度聞いても明日は雨

梅雨だから早めに仏飯さげます

くちなしが背中合わせの路地に満つ

足音もしのばせ山御陵青葉雨

流石国技横綱昇進四字熟語

京都府 稲葉冬葉

帽子パラソル日焼け薬に夏が来た

欠食に挑戦したいわんこそば

矢田寺のお地藏さんに会いに行く

風鈴もわたしも年を積み重ね

蛇口全開したように出るお金

奈良市 天正千梢

宇治川の流れば早し茶のかおり

三室戸の十六羅漢の庭すがし

無人売り大根一本残ってる

五勺の酒たのしい夢を見せてくれ

水掛不動緑の苔が重たそう

奈良市 米田恭昌

平城京展長屋王（平城京展 二句）のグルメぶり

木簡に見る酷税の庸と調

どう視点変えても金の要る話

サーカスと聞けばおふくろ涙ぐむ

妻入院 僕せめてもの煙草断ち

大和郡山市 坊農柳弘

つま先の動きなんとも阿波踊り

円安の煽りでハワイが沖繩に

森林浴貴船の里の流し麵

夏休み家計助ける里帰り

片思い失恋したことありません

大和郡山市 榊原慧心

なりゆきに任すと決めてよく眠る

休講を損と思わぬ脛かじり

しみりと身の上聞いて騙される

賑やかな法事の隅のひとり酒

ハッキリとノーと言うのも思いやり

大和高田市 岸本豊平次

痒い背も頼めぬ孫の反抗期

武者飾り刀は孫のおもちや箱

ひとり娘をもらえば息子取られそう

万歩計土と対話が出来だした

老鶯の奈良奥山に澄んだ声

生駒市 北山悟郎

夏山に挑む男が待ちこがれ

梅雨空に心の芯がゆるんでる

老人会老いを必死で泳いでる

生涯を危なく続く綱渡り

金婚も過ぎ妻の杖有難し

大阪市 榎本 露児

歩きます私自身を確かめに

時々空を紡いでいる私

幸せになれそな帽子買ってくる

ちよつとちよつと帽子ばかりが目立ちます

河童伝説きつと私のご先祖だ

大阪市 川原 章久

良い夢の記憶を辿る紙おむつ

ウチの娘は虫もつかずに嫁き遅れ

風鈴に我が社の終り告げる風

首筋に白髪が増えた更衣

気晴らしに花月覗いて笑うてこう

大阪市 川久保 睦子

亡姑さんの乳房にたどりつけたらか

マウスツウマウス最後の口づけ忘れない

酔うた日に書いた日記の本音見る

線香よりたばこの煙ほしかりに

窓の鍵かけずに待って眠ります

大阪市 井上 白峰

老いてなお背伸びしている影法師

辛酸を舐めて広げた老いの視野

老骨に鞭打ち趣味の道を行く

振り返ることを忘れて崖に立つ

欲一つ持って病苦に耐えている

大阪市 板東 倫子

残月と対話している観覧車

堅忍不拔誓う国技の殉教者

福の神複合不況に匙投げる

ノンポリをきめて流れているのに流れ弾

反発はせぬが疑問符つけておく

大阪市 河井 庸佑

背伸びした愚かな心自省する

善い悪いはつきり分る子に育て

こだわりを捨てて大きくなった視野

程々の距離で上手なお付き合ひ

ひと言をぐつと堪えて和を保つ

大阪市 福岡 雅楓

忘れて春を歩けば春の草

猫の付く言葉は暗いものばかり

新時代キティ明るくチャーミング

寝転んで必死の選手見てゴメン

毬のよに走るヒヨコと遊んだ日

大阪市 中田 あい子

お出かけの姑の和服はハイセンス

大粒は上の一列苺箱

夕立にぬれてはしゃぐ子べそかく子

ぬれている菖蒲見たくて雨を待つ

末っ子に流れる母の内緒金

大阪市 本間 満津子

目が優しきつと幸せな人なんだ
短い手紙思いつぱい籠めて書く
社会と私狂うているのはどちらかな
堪忍袋昔誰でも持っていた
それなりに皆懸命に生きてはる

大阪市 川内 呷笑

年金の算段してる妻と娘が
現実に目覚めよ変えよこの政治
喜びは大きい程に顔に出る
不景気はバブルを叱る天の声
この駅は里の歴史の見張り番

大阪市 川端 一步

風が鳴る笛吹き童子いるらしい
雑草は夏バテ知らず無口なり
脇役をばかりするのも肩がこり
表札を作家気どりで見て歩く
死語になる言葉惜しくて捨てられず

大阪市 北 勝美

栗忌や高野の楨は淡緑
栗忌や色紙に生きる酒禅一味
大正の美德 平成に馬鹿にされ
道草が心とます春の風
駄句もよし介護疲れが休まれば

大阪市 津守 柳伸

佟さんゴメン散髪する憂き目
紫陽花を配り当分留守になる
朝顔に貰う活力こぼれ種
旅プラン船頭さんが増えてくる
ダイエット下着ルックに細い眉

大阪市 渡部 さと美

国道へ蝶がひらひら昼の神
わたくしの天気予報もはずれがち
鉢の土なすの方かてけんめいよ
花鉢の盗られて水をもろてるか
はすの葉の水滴連に恋をした

大阪市 田中 節子

エルニーニョ翻弄される気象台
自由の風調節ボタン狂い出す
過去形で不倫のわだち明かす友
覚えなき疑惑の視線せつせつと
夫婦の句見たくないのに目に入る

大阪市 小糸 昭子

風風いだ隙に急いで老い仕度
葱坊主忘れられても元気者
地蔵様内緒話に参加する
変化球投げて帰りを待っている
地震から逃れられない小さき国

大阪市 小林トメ子

震度七地震あちこち試してる
若者が減って遊び場ふえており
だれもかも二十一世紀不安がり
一言が頭の芯で渦を巻き
のら猫の三代目はや青春期

大阪市 清水絹子

散歩道言わぬときめたガン告知
ペアルックなのに夫の速い足
快復の膳に色かえ品を替え
障子張替え心機一転風みどり
スピッツのまたあの人の置土産

大阪市 神夏磯典子

正直に生きてあんさん阿呆かいな
よろこびを隠す芸当持っていない
幸せなポストたくさん友を持つ
にこにこことしないお店で買うつもり
特価品詰めて忙しい冷蔵庫

大阪市 小林周信

財産は妻だと蔭で言うておく
メモするとすぐに忘れる癖がある
万馬券数多の負けは忘れてる
少年の頃 異国の丘と帰り船
活入れてエイと起きだす朝がある

大阪市 奥田良子

夫の忌をおえて一人の居待月
思い出の坂ある街を今一人
たこ壺でもうのんびりと生きられぬ
あざやかに変身してる老いの宴
手鏡に息ふきかけて忍一字

大阪市 大塚節子

古希すぎて早いと思う誕生日
貴方にはからくり箱はあけられぬ
私まで四代手垢の書簡箱
出来るまで道路予定地茄子の花
とれるかなとれるぞと言う欲の皮

大阪市 町田達子

壺阪の緑に触れる小半日
死んだ振りするゴキブリがユーモラス
突然にアラームが鳴るミステリー
パリ沸騰うちの茶の間も沸いている
父の日へ孫の相談おもしろい

堺市 桑原道夫

仮に想うことの重さよ陽炎よ
自転車を抱きかかえるも愛欲か
縞馬の縞 昭和ほどなつかしき
雑草の雑をほんやり見えています
人思う故に人死ぬ畳かな

堺市 宮本 かりん

背をシャンと伸ばしなさいと影ぼうし

やさしさの裏は考えないことに

思い当って心の中を覗きこむ

賛成へ双手批判のまなざし

重い荷をおろしてからの長い道

堺市 神原 文

平安の雅に酔うてジンファイズ

もう八十まだ八十と羅漢ども

浜木綿よ素直に僕を見ておくれ

十字星探す子の目は綺羅星よ

粗探すのに姑は眼鏡拭き

堺市 志田 千代

正論を吐いているのはペンネーム

太郎冠者地団駄踏んで幕となる

抜き足さし足で追いぬいていった

立ち読みも許してくれたおじさんも

お医者さんが小声になった病気で

堺市 楊井 二南

結論はデスク叩いて主張する

深夜でも見たいテレビにある未練

神妙な顔意らぬ神詣で

居眠りの仕草で席を譲らない

底力気随気ままに発揮する

堺市 柿花 紀美女

夫唱婦随素直に受ける老夫婦

真ん中で裏も表もない暮し

米を研ぐ男淋しい音がする

ひっそりと傘二本干す老夫婦

目を覆うニュース映像慣らされる

堺市 山本 半銭

プレゼント亡夫に見せる独り言

ホワイトニング心のくすみ消して欲し

仲よしごっこ嫁と姑はまだ序曲

睨めっこして豆の芽を待っている

繋いだ手気付けば花火終ってる

高石市 浅野 房子

結果論だけなら私でも言える

張り合いのない人うまいともまずいとも

冷奴食べて年金つましく

まだまだと思ひまだかとわが命

妥協せぬ訳にはいかぬ多数決
箕面市 岩津 ようじ

買おうかと妻に相談わらび餅

ひよっとして長生きしたら困るなあ

長袖を半袖に替え僕も初夏

地球儀をまわして探すパキスタン

飲んべえの亡父にワインを供えけり

豊中市 滝北博史

仁王さんは兄弟だったのだろうか

米作りやめて山田を菖蒲園

中学の同期半減しているぞ

紫陽花の陰から友の万歩計

昔話 禁煙の餡なめながら

豊中市 江口明光

はみだした線が本命かも知れぬ

不器用で振れない尻尾ごと老いる

ぬるま湯に明日の命をたくわえる

胃袋が満ちると良心起きてくる

サングラス斜陽の夏をひたかくす

池田市 栗田久子

玉音を聞いた耳から老いてくる

花の寺雨の季節はひとしおに

はにかんでふくらむ薔薇の寺

学者の眼遺構の声も聞いている

ハンドルを離せば元の女の目

吹田市 古川喜美子

折りからの雨も手紙に書き添える

目の可愛い猫にうつされた欠伸

遠い記憶に猫がしょっちゅう膝に居た

月の下唯我独尊恋の猫

野良猫に言いわけしてるベルシャ猫

吹田市 野下之男

噴水のコイン涼しい眠りかな

仁王様呆れ顔してこの世見る

情熱を忘れちゃ困る日本人

猫なりに猫好きな人知っており

父の日は当てにしないが心待ち

吹田市 瀬戸まさよ

どう違うキレルキレない普通の子

爪を切るパチンパチンとところよい

殻を脱ぐ勇気持てない男たち

個性をば自己中心と読み違え

故郷の盆へ静かなニュータウン

吹田市 石原靖巳

無位無官こんな気楽なことはない

ガーデニング浮気な趣味がまた一つ

お隣はいいな夫婦で散歩する

素うどんの愚痴をしつかり聞いておく

ワールドカップまた眠れない夜が続く

吹田市 栗谷春子

核実験火に入る虫のつきつきと

地図を見て空みて何を思うやら

方便の自作のうたに涙する

六月の扇子売場がなつかしい

アゲージヨがスケルツォにうつる月

吹田市 茂見よ志子

枚方市 森本節子

遠き地の友へ文書く嘘もませ

傷ついた由緒ありそな地藏さま

戸惑いをかくし揃える客の靴

お茶漬に泉州水茄子納得す

文楽の五世襲名冴える棹

衣替え犬の病気も快方に

幸せは友の誘いに乗る余力

斜め書き九十二歳の義姉の文

散歩好き夫に嫌がる帽子きせ

ルリ揚羽食べた山椒に舞い戻る

守口市 結城君子

東大阪市 森下愛論

献立を変えてシヨート・シヨート読み

スケッチの子の目に藤の揺れもまた

わたくしを尊敬しない影法師

水撒いてまいて真夏の暮れやらず

つまずくとみんな吹つとぶ予定表

胸二つ背中も二つ聴診器

入梅や痛む話はしないこと

カンバンへ睨み返してもう一本

初月給の孫から思わぬおこづかい

気がかりは何にもおへんうまい酒

交野市 山川日出子

東大阪市 安永暁子

旅に出て命の洗濯おばあさん

よそ行きのボデイスーツはDカット

お守りと共に筏師五十年

キャンパスを通り抜けする散歩道

京の町パチリお駕籠と人力車

鉢植のなす重そうにぶら下がる

初夏の風ピアノの音に指揮をする

ありがたいと素直に言えぬ腹の虫

ドレミファソ戦争中はハニホヘト

でかいこと言っても裏がすぐ解る

枚方市 海老池洋

東大阪市 谷口義

日本にも国歌があつた金メダル

ぶらぶらと散歩できない性分である

削除キーぼんと忘れてみたいこと

冷凍した過去がだんだんとけてくる

時どきは追い焚きも要る妻と旅

争って取ったものならまた取られ

猫だてら堀から落ちた恋一途

きついことやさしい声で言いました

涙をあげる涙をもらういい仲間

ほっとしたところにあつた落し穴

高槻市 川島 諷云児

人生の土俵に待ったなんかない
人がどう言おうと川柳馬鹿でよい
てにをはを見直してみる折り返し
歩で終わるわが人生に悔いはなし
他人より冷たいことを妻が言う

高槻市 井上 照子

暑い中蟻にも年寄り居るだろう
金の成る木茂って金は出るばかり
健康食食べて煩惱抑えてる
気候不順蟬は出ようか思案中
独りでも兎に角生きる米洗う

茨木市 堀 良江

ゆずられて席の温味が倍になる
下積みを励まし合った友が病む
似合う年亡母の好んだ鮫小紋
お客より仲間あふれる手づくり展
細い目が笑いかけてる丸めがね

茨木市 藤井 正雄

ご尊父は達者かゴマをする上司
間欠泉次の出を待つカメラアイ
携帯電話カレーが匂うキャンプ場
駅一つ梅干し取りに行く実家
前も闇後ろも闇の猫の恋

寝屋川市 富山 ルイ子

暗黙の了解何時か消えている
片腕をもぎとられたよう友の死
杖をつく親娘二人で一人分
不器用な生き方親娘かたつむり
疲れたらしい尖った声になっている

寝屋川市 北岡 波留吉

好きやねんと言ったかいなと金婚日
名案を空振りさせた多数決
僕が選り悪妻などと言えませぬ
濡れぬよう互いに庇う夫婦傘
先生が好きで登校拒否はせぬ

寝屋川市 岸野 あやめ

気の薬口紅一本買いました
手鏡の袋を母の布で縫う
贈られてうさんくささの匂う箱
温泉に来て野球のテレビ観る
酸欠の金魚のような私です

寝屋川市 後藤 黎之助

国内で見せぬ笑顔の我が総理
定年で付けがきかなくなりました
一〇〇年の味を支えるご常連
新入りの茶パツピアスが五月病
子の卒業手から離れてゆく予感

寢屋川市 平松 かすみ

兄上の元氣御先祖よろこばれ

お祭りの好きと付き合う二泊なり(御柱祭)

うっとりときたり水引細工の手

居酒屋の主人に船頭早変わり(天竜川)

乳房 乳房 乳房はどれでしょう(夢科美術館)

寢屋川市 堀江 光子

この時刻立ち読みの彼に逢えそうなの

春の街口紅を選る出来心

哀しみに負けない紅を今日も塗る

留守三日ばらは開いてわれを待つ

シルクハットとれば手品師髪白し

寢屋川市 籠島 恵子

一人暮しの聞いて切ないハブニング

一人暮しの息子と台所の話

給料はもらったはずなのに手ぶら

法律が変りましたと風呂の事

電話する度に邪魔くさそうにされ

寢屋川市 妻谷 重三

律儀にも十日遅れで旬のもの

案じるな料理のうまいひとと居る

仏壇にゴキブリ逃げて持久戦

男物エプロン買った本買った

明日オペ念入れ洗う足の裏

寢屋川市 太田 とし子

間違ってもボケタで罷り通るなり

憧れた都会で作るミニトマト

此の名刺使った頃は辛かった

一周忌の母に供える花作り

花と散った何と淋しい碑のトンボ

寢屋川市 酒井 勇太郎

リストラを覚悟してから下克上

核廃絶叫べど弱い被爆国

カズ処遇あれこれ言える第三者

癌告知覚悟できてるふり悲し

孫がいて離婚する子が許せない

寢屋川市 柴田 英壬子

ため息をもみ消している深呼吸

出来合いの言葉書かない旅日より

うしろ姿でも言う女の長い髪

六月に生まれバラの涙の日

恋蜜おろかな水に誘われぬ

藤井寺市 吉岡 美房

遅しく生きよとくれた太い指

じっと見る何が出来たかこの十指

待ちかねて梅雨の晴れ間の立話

上に流れ下に流れし恋ぼたる

虫籠に螢一匹居る重さ

藤井寺市 中島志洋

口開けて昼寝している京美人
夏の恋育ててくれた海の砂
突然にスターになった訳でない
珍しく男勝りの愚痴を聞く
三次会そろそろ浮ぶ妻の顔

藤井寺市 高田美代子

賽銭箱も不況の風を受けている
世紀末ロングヘアーで着る浴衣
謙遜も自慢のうちと知っている
日傘くるくる気楽に夏をやりすごす
ドクダミの花が笑ったように見え

藤井寺市 鴨谷瑠美子

猫からは甘える喉を借りてくる
物干に素足でのぼる里帰り
差し向いいいえ横に座る恋
煮くずれて元にもどれぬ恋最中
柘榴咲く恋う人魅入る如く見る

藤井寺市 福元みのる

紅白戦得てして赤の女性勝つ
ルージュひく頃から女らしい声
紅をさす孫も次第に疎遠勝ち
いつ見てもここの交番留守ばかり
危急存亡今はわが身の上のこと

羽曳野市 榎本吐来

遺言は不要妻より先に逝く
文芸という名へ余生凭りかかり
断りの無い留守妻の自己主張
アルコールの程弁えて腕時計
父母の遺影に今日を支えられ

羽曳野市 福田満州

一年の早さしみじみあじさい忌
そない早よ走らんといでのぞみ号
実生した樟二本お引越越し
つゆ寒やレッグウォーマー手離せず
気短に効くお薬を飲みたいが

羽曳野市 酒井一壺

定年後一つの顔で足りてます
髭をつけ顔のバランス変えてみる
会費出し顔は一度も出してない
散歩にも財布はいつも持って出る
万歩計つけて散歩のリズミカル

羽曳野市 吉川寿美

米櫃を満たして母の小宇宙
風と契って戻れぬ橋を渡っている
時代屋で逆さ回りの刻を買う
辛口の便りをくれる友がいる
くどくどと急所外れて妻の愚痴

羽曳野市 三好専平

うらおもてあまり変わらぬ顔になり

子の未来保険に託す共稼ぎ

醜聞を最後の賭けにした女優

残しても見る人ないが日記つけ

なるほどいつも知らないふりをする

松原市 玉置重人

老犬のペースに合わず万歩計

南無阿弥陀一期一会の湯が溢れ

サミットではつきり負けた背くらべ

マグカップ僕のが割れた寒い朝

こだわりを持った男の吟醸酒

松原市 小池しげお

燃えつきる時ロウソクは音を立て

輪廻転生ガンジス河に水がない

訪れるお客はみんな西瓜好き

気配りがとるところに置いてある

見詰めると母の話をする金魚

八尾市 内海幸生

菖蒲園一本だけを撰れという

香典の袋を糸で通す役

葬列に弱味を見せぬ硬い笑み

もう何も言わぬと宣言したはずが

満腹で通るデパートの食品街

八尾市 宮西弥生

悩みもつ分だけ花と会話する

金持ちと一緒に花を育ててる

梅雨冷えを晴らすみどりの精とい

ぎりぎりまで遊んでコンビニたべている

髪切って福祉に炎える夢づくり

八尾市 宮崎シマ子

青丹よし人馴れし鹿ついてくる

藍の香をほのかに撒いて踊りの娘

飲める婿がいいなと思う一人酒

故郷の村の土橋に恩がある

古箏笛母の一生つまってる

八尾市 神原まさと

孫の守りゆるんだポルト締め直し

いい男に育って嫁を貰わない

ステテコが好きでチャイムに出られない

サッカーが核の不安をまぎらせる

ひまわりが小さくなつて床の間に

八尾市 高杉千歩

補聴器や人工人間に近くなる

ネクタイの特価にゆれる小さな愛

FAXに漢字がふえる三年生

個人消費マイナス我が家はマイペース

画布一ぱいねぶた響かせ去年おもう

八尾市 長谷川 春蘭

八十路坂悲喜のり越えて若葉徑

足袋脱げば指生きており初夏の宵

菊根分けこの手生涯働く手

五階まで落葉届けてくれた風

花曇り八十歳が眼鏡買う

八尾市 高橋 夕花

青葉かげ友の遺句集しずくする

紫陽花のひと群れ語る一周忌

淋しくて雨のとびらを開けてみる

テープルのりんごも梨も味方にする

横町の花屋にいつも借りがあ

八尾市 村上 剛治

苦勞したことは言わない母の背な

また来ると笑って友が行ったまま

こころの隅で妻がしきりに旗を振る

吊橋もあなたとならば渡れます

命なり花強かに水を吸う

八尾市 村上 ミツ子

健康にいいよいいよと野菜攻め

名も知らぬ草だがぐんと伸びてくる

横向いてごもつともですごもつとも

味付けに度胸があると知りました

おばあちゃんと呼ばれることに慣れてくる

八尾市 大内 朝子

ラーメン屋みつけてホツとするハワイ(ハワイにて 二句)

郷愁へハワイの月とワンカップ

もう一度翔ぶ還暦の句読点

プライドがでしゃばるたびに逃がす恋

自分史のどこを開けても精一杯

河内長野市 井上 喜醉

全快のスタート禁酒が笑いかけ

頂上は天狗ばかりで騒がしい

愛が消え欲が消え天国が見え

目標を捨てると時計淋しがり

無気力が楽で人生の先が読め

河内長野市 植村 喜代

ほめられて高い所で泳ぐ鯉

親馬鹿を上手に使う娘達

長い旅している娘だと嫁に出し

お菓はきっちりお酒は守られず

杖落しまたやまたやと言う夫

河内長野市 加島 由一

姉嫁ぐピアスをひとつ隠す思慕

薔薇贈る薔薇に思いを語るせる

腕時計見ると嫌がる人と逢う

これも愛肉より野菜すすめられ

力不足詫びるつもりの花贈る

富田林市 藤田泰子

生き延びてオリンピックを大阪で

叱られていた頃華のまつ盛り

おむすびの梅から聞こえる母の声

やさしさに融けそうになる臘人形

逃げないでぶつかることにした苦手

富田林市 片岡智恵子

世界遺跡見たと自負する目の奥に(アンコールワットの旅 二句)

タプロム寺院破壊のすすむ石を撫で

くり返す日々に飽きたら負けだろう

ものが見えやがては人が見えてくる

軽々と挙手する群れにいし我が

富田林市 松本今日子

一駅じゃ名残りの惜しい人に会う

結婚式広島弁や京都弁

さわがしい世間に私もさわいでる

仏花サルビアの赤 赤すぎる

これだけは妥協は出来ぬナスの紺

貝塚市 池田寿美子

イエスノーと言える老後に捻子を巻く

無為徒食お子さまランチ旗かくす

色褪せぬ名曲を聴く雨の午後

三Kを揃えて旅の虹画く

遠出してやつと螢に出逢う里

和泉市 岡井やすお

核実験山の向こうは大地震

核ボタン猫が踏んだらどうしよう

核はなしタイオキシンを射とうかな

チームカラー駿馬を駄馬にするおそれ

赤ちゃんがよく育ち若乃花

和泉市 西岡洛醉

どん底のあの日が恋し古希の唄

鍵穴の合った夫婦の五十年

孤独なる余生へ表けたたまし

万歩計花も嵐も踏み越えて

野仏に月は自愛を語りかけ

岸和田市 岩佐ダン吉

千枚田消す減反という嵐

九条を声大に読む敗戦忌

譲られて自問自答をする座席

核の数競う平和を口にして

自分史を飾るゴールに母の章

岸和田市 高須賀金太

配列はもう一つです僕の顔

顔色で僕を判断せんといて

無表情乗せて電車の延着す

不況でもニッポン人はおとなしい

下着ルックで何考えてんねん

岸和田市 芳地狸村

百態の武将が生きる兵馬備(西安 五句)

七層の仏塔凄い大雁塔

わからずにつまむ料理に味がない

あとさきがてんやわんやの朝食事

鳥籠をになう老夫の目が温い

岸和田市 古野ひで

朝鏡ひとり暮しの背中を押す

梅雨晴間むさぼるように洗濯機

背信へ何も言うなと天の声

信じたら心が温うなつて来る

サッカー熱ルールも知らず舞い上がり

岸和田市 井齋一齋

子や孫で大変ですと嬉しそう

買い控え更に控えた産み控え

上手な嘘当選圏を確保する

マンションと知つてか吠えぬ犬になり

課長より大きな判を捺す代理

岸和田市 長谷川 呂万

言葉なく妻は感謝の手を握る

お見合いの断り星座役立てる

燕の巢今年は留守になつたまま

赤字債を特例債という欺まん

わがままの意見を通し自己嫌悪

岸和田市 原 さよ子

朗報へ唯うろろうと若いパパ

もの言わぬ鏡が決める外出着

カセットを先生にして外国語

お守りを入れて外遊荷をまとも

シヤネル買うお金は別に持つている

岸和田市 田中文時

加害者が被害者よりも自己主張

負けて堪るか貧しいけれど核を持つ

誰ひとり名刺を持たぬ過疎の里

老い進むもう縮まらぬ射程距離

検査値に鯨飲馬食のツケが出る

大阪府 榎山隆盛

ヒロシマのまぶしさ地獄の閃光

おかあさんゆっくり一度山の湯に

三食にわたしの欲が生きている

八つ当り猫がいちばん馬鹿をみた

酌み交わす誓いは一つ盃二つ

大阪府 八十田 洞庵

母の眼へ昨日の嘘は言い出せぬ

ひとつ知りひとつ忘れる昨日今日

キリキリと愛が匂うて夏最中

闘病の鏡に映る衣替え

計算がうまくて人が寄りつかぬ

和歌山市 川上大輪

上手い字だ告別式と書いてある
立入禁止楽しい事がありそうだ
僕の居るここが真ん中だと思つ
無味無臭それでも役に立っている
現実と夢の狭間で鬼になる

和歌山市 川上富湖

踏んばつてみても所詮は心太
弁護人席には犬を座らせる
気休めの言葉台詞のように言つ
無気力な私と夏のキリギリス
限界だ私のプレーカー降りる

和歌山市 山根めぐみ

一番星凜とゆるがぬ器量もつ
俄雨わたしにカツを入れるとき
気遣いがすぎて疑心と呼んでいる
細い首だけど伊達にはうなずかぬ
一寸そこまで少し気取つてみたくなる

和歌山市 牛尾緑良

ご仏前これが最後の便りです
逆立ちのついでにながめてる遺影
生きてゆく芸に疲れたコマの芯
結論を出すのは早いミルクティー
時々はお休みなさい力瘤

和歌山市 桜井千秀

終盤へ気合いは抜かぬペンの先
郵便さんおおきに一日雨の中
中折れ帽わたしやっぱり父親似
見解の相違尺取虫に聞く
踏み絵から逃げてブランコ漕いでいる

和歌山市 木本朱夏

花しょうぶ旅の終りの雨もよし
余所見しているまにかわる万華鏡
アスパラの青よ少年老い易し
秒針に追いつめられて微熱する
勾玉のかたちの眠りから醒める

和歌山市 古久保和子

丸テーブル愛想笑いに飽きた花
観覧車地球を抜ける策を練る
蜜蜂の羽音はきつと労働歌
ケイタイ電話犬には鎖付けてある
土偶の瞳地球はもつと蒼かった

和歌山市 堀端三男

勝ち組でない人生もまた楽し
筋の通つた挑戦ならば受けて立つ
美しい盛り付け先ずは目で食べる
居酒屋で不況肴に飲んでいる
眨さずに味のある字と言つておく

和歌山市 青枝鉄治

口封じだろう今宵のおごり酒

短所しか見えぬメガネを持つ上司

真実をより遠くする多数決

ほんとうの友の苦言が温かい

夕餉には夫も居ます不況風

和歌山市 福井桂香

生きている欲び連山に叫ぶ

ムーンフェースそれもよからう御愛嬌

銀の匙 時の流れに身をまかせ

少年に読んで聞かせる白桜忌

画伯逝く紀伊連山に霞立ち(稲垣伯堂画伯逝去)

和歌山市 田中みね

奥歯治療もはや女を忘れたり

お前に電話それも男と旦那様

世話になる孫でないのに尽くし切る

終焉は花咲くころと決めている

今鳴いた鳥が笑い立ち直る

和歌山市 池永正甫

肩書で受付嬢の眼が変る

ほっとしてこの一杯の生ビール

星雲の億光年の静けさよ

金婚式忍の一字が蔭にある

郷愁へ山の向こうの瞬く灯

和歌山市 宮口克子

泣きに行くくの字の母のその胸に

楽しいな恋の工程楽しいな

迷路から逃げてばかりの意気地なし

一張羅お見合い用の一張羅

長老と張り合うことのおろかしさ

和歌山市 細川稚代

美しく老いたし鏡買い替える

母さんによく似た彼女つれてくる

ひとときの至福コーヒー店の隅

折角のお誘い外は土砂降りだ

声上げて泣けるアンタが羨し

和歌山市 堀畑靖子

貯えて老後老後と蟻の列

魚野菜いただき今日は支出ゼロ

森へ行く自然渴望症になり

スピーカーの音楽も夏梅雨明ける

海の子に山の子になれ夏休み

和歌山市 木村初子

意のままにならぬ浮世のやじろべえ

人生の転機に薄く紅を引く

人生設計砂の器を固めつつ

風は気ままにすぐ新しい夢を追う

しがらみを捨てて青葉の風に乗る

和歌山市 山口 三千子

少し距離置けと遮断機降りてくる
石橋を渡っていても蹴躓く

雑念を払い余生はマイペース

終着へ亡母が残した道しるべ

面影が彷彿とするあじさい忌

海南市 三宅 保州

海が割れる珍島の月あがめられ(韓国有情 五句)

話しかけてみようアンニョンハシムニカ

一衣帯水さもありなんとと思う貌

ワガハイと言う老人の日本語

読めないがハングル文字の温かさ

神戸市 中村 ゆきをを

星の河ネオン育ちに見せてやり

星祭お袋連れ出す車椅子

区役所の年金相談友と会い

塾通い善意の席でマンガ読み

落ち着けと床柱から声のして

神戸市 山口 美穂

二〇〇〇年の空気を老母に吸わせたい

青い目の親戚わが家も国際化

みんな逝くところと老母の語が重い

死生観老母淡々として哀し

紫陽花が明るい梅雨を演出し

神戸市 池田 善守

本当の妻との暮らし定年後

専門医まさか自分がその病

定年後仕事の虫は一苦労

竹馬に乗ってるような靴をはき

七十になれば七十まだ若い

神戸市 木村 貴代子

振り袖をえらぶ娘が遠くなる

もぎたての莢豆甘い五月逝く

先行きは灰色なのに買え使え

新しい制服これがうちの子か

邪馬台国謎をロマンと呼びかえて

芦屋市 黒田 能子

忘れものまだありそうな旅仕度

忘れものまだしていない一年生

子を守る猛女となりぬ母の愛

味にうるさく厨房に男子入る

紫陽花の抜け出た闇の白い雨

芦屋市 水田 民平

穴開いた心は母の風を待つ

謎めいた話聞き耳立てている

はしご酒誘う友の背叩きよい

下積みを重ねて生きて勤が枯れ

定年がはればれとして椅子を拭く

尼崎市 長浜澄子

雨二日バイオリズムに出る乱れ

グレンミラーが脳裏をよぎる外は雨

六月の雨は身の内深く降る

古い殻脱ぎしなやかに翔び立とう

思いきりバンザイしたい碧い空

尼崎市 春城 武庫坊

矢車の音を今年はずかず過ぎ

エルニーニョ花の歳時記狂わせる

夏が来るから何をしようか考える

歩道橋登ると夏が待っている

今生きる運命を語る戦友会

尼崎市 春城 年代

苦労ばなしはそれぞれ違うかたちして

悲しみにわたくしだけの手を合わす

季のめぐることで傷口また新た

噛みくだく飴にうらみのあるごとく

喉の渴きはこころの渴き自戒せよ

西宮市 門谷 たず子

イントロが長くてきつしよ見失う

結局はわたしを残す消去法

親不孝せめて初物仏壇に

座り直して母に近づく経を読む

七十路まだファッションも恋もある

西宮市 山本義子

エイとばかり覚悟していくカンボジア

搭乗機日本語ばかりで拍子抜け

他国で見る朝日夕陽をかみしめる

アンコールワット二度と来れまいよくぞ来た

中流のわが家がいいな旅がえり

西宮市 西口 いわゑ

もの思う彩であじさい雨に濡れ

ばっさりと切りたいことが胸にある

半月と道行きの如急ぎ足

茜雲少女は亡母と見えています

美しい箱から鳩は出なかつた

西宮市 奥田 みつ子

友の葉書 字までニコニコ笑ってる

後悔もプラス志向にして楽し

まだともう上手に使うのも六十路

鉛筆の芯とがらせているばかり

銀の雨遣書とも思う細い文字

西宮市 亀岡 哲子

亡父の里尋ね城址に竹刀の音

嫁賞められ孫賞められて鯉幟

漕ぎ出すプランコ藤の波揺れる

空っぽの瓶に五色の飴詰める

大根も土地も切り売り致さねば

不況風面目もない招き猫

西宮市 井上松煙

借り忘れ貸し忘れずに老いてゆく

老いるほど懇意の医者がふえてくる

散歩道気分で選ぶ七通り

階段を数えておりの老いの足

西宮市 刈田泰司

妻の留守ガウン着て立つ台所

留守番を素直に引受ける句帳

スピーチを一句で締める披露宴

口紅で花という字を書いてみる

かわいらしい仏像一つ撮って来た

伊丹市 山崎君子

島見えて友の小さな手も見える

鯉のぼり来世は孫を持ちましよう

あじさいは今年も沙羅の庭に咲く

朝ドラの行方楽しむアメリカン

手ぬき食花は沢山飾ります

宝塚市 嵯峨根保子

憑きものがすとんと落ちて聖子読了

チーズタバスコ テーブルに無い爪楊枝

守るもの無いのに鍵はかけて寝る

ラーメンに象牙の箸が面映ゆい

反撃がありそう妻が箸を置く

人生は第二も有れば第三も

走り梅雨軒の燕は思案顔

言うまいと収めた胸が痛み出し

不景気を横目に売れるキャミソール

しっかりの割にうっかり増えてきた

川西市 松本ただし

一張羅きばることないカジユアルデー

紫に染まって夕陽落ちた山

星の無い街に突っ立つ摩天楼

スタミナはあるが脳波がついてこず

賢くはないけど利巧になった鼻

相生市 中塚礎石

各論へ先手の船をねぶらせる

このままで落ちたくはない竹とんぼ

筆箱にナイフを入れたのは昔

年金へまだ死にきれぬ市長印

お隣で卵一個を借りてくる

姫路市 古川奮水

ウエディング孫に着せたい切り仕付け

妻病んでようやく慣れた炊飯器

真珠婚女房のまねの味出ない

城北の菖蒲へ杖がともをする

練習のテニス都会の壁を打つ

兵庫県 大谷 幸次郎

OB会見憶えのある服に会う
切り捨てた男励ます送別会

手に握る切符を探す老いの旅
お名前が記憶の箱から引き出せぬ
穏やかな顔で媪が梅を干す

鳥取市 岸 本 孝 子

リハビリへ手足半分夫にあげ
うっかりと旅に誘った雨女

恋いくつほのぼの想う歳となり

三姉妹揃うと亡母が風となる

大物が座ると風が凧いでくる

鳥取市 岩 原 喬 水

盃を持つと無口が喋りだす

児は産まず犬にコロコロ子を産ます

頼られて男火中の栗拾う

老木も春を忘れず花咲かす

新緑が脳細胞を刺戟する

鳥取市 福 田 登 美

好奇心老いに若さを取り戻す

ぶつかって見て人間の味を知る

仲間だと自分勝手に思い込み

風鈴の古い音色に亡母偲ぶ

描いてる希望の色に近づけぬ

鳥取市 武 田 帆 雀

ああでもないこうでもないと言うビール
物差しで計ったように竹輪切る

先頭の蟻は湯舟に浸ってる

たてがみを靡かせ喇叭吹いている

解ったような解らぬことに妥協した

鳥取市 倉 益 一 瑤

親ばなれ毬はコロコロよく転ぶ
ボタン園女王様になるわたし

椿ポトリ木には戻れぬ恋でした

どくだみの花が責めてる嘘ひとつ

投げられた球の重さに戸惑いぬ

鳥取市 岸 本 宏 章

雪国の誇り豊かな水が湧く

それぞれの癖で歯みがき絞られる

カルテには野菜不足と書いてある

歩で生きた男に休む暇はない

白黒をつけて味方も敵も増え

鳥取市 杉 本 孝 男

親の目にまだまだ青いリングだよ

辛いことラップかぶせて生き延びる

満開の桜の色が人さらう

評論家揃いで会議空回り

同情がふくらむ先は恋となり

鳥取市 坂田 和歌子

紫陽花を手折って拾うかたつむり

お寺からワープロ叩く音がする

浜っ子のルーツは嘘を付かぬこと

梅雨さなか辞書がずっしり重い夜

お隣へ家出かわい妻でした

鳥取市 植田 一京

熟女まだ翔ばねばならぬへアーダイ

遠い日の人と会釈ですれ違ひ

古傷をようやく語る年になり

手の内を何時も見せては損をする

ふる里の絵はだんだんに鮮やかに

鳥取市 両川 洋々

核実験イエスもきつと気が重い

汗拭いて土の香を読む一行詩

続編で逢つてはならぬ人に逢ひ

悪筆であなたへ明日の夢をかく

善人よ狂え狂えと銭が舞う

鳥取市 近藤 佳子

最後にはやっぱり母の底力

一步退くそれが出来ない野武士の血

親友に心の真水送らねば

ひと呼吸おいてじつくり絞る

淋しいね捨て石だったやせ蛙

米子市 永井 三津子

ああ春夢幾度呼べども亡夫は亡夫

年長ける度 亡夫がふくらむ胸の中

結婚は諦めたよな高軒

一本の電話が僕に春告げる

私だけ愛してくれる彼探す

米子市 林 瑞枝

飛び魚のダンス始まる夏の海

魚たちのエデンの園か珊瑚礁

三世代いつも垣根のない暮らし

水琴窟の美学天女が舞うている

想い出の下駄干してある蔵の前

米子市 青戸 田鶴

灯が消えぬように毎日本水を呑む

バスがくるまでに考えまともよう

六月の花嫁だったのは昔

大輪のあじさい亡友にささげよう

芒ゆれて生きる哀しみなど想う

米子市 木村 富美子

これからの夢を語った去年今日

手の届く所にいつもあった肩

後悔の思いばかりが背をたたく

窓を行く雲のかたちに胸が風ぐ

十指みなまだ悲しみのかたちして

米子市 光井玲子

思い出が切ない八月の空よ

雑学で生きてとつても強くなる

沖が風いでもめさんの天国だ

沖の夕陽が五臓六腑に落ちる

ここからの望み元気で生きること

米子市 茂理高代

み仏が身内に見えて来たおぼろ

み仏に裏切りとなる邪心もち

世は乱れ紫陽花だけは花盛り

この白髪苦労かけたと言ってくれ

ささやかなたのしみ花の咲く家で

米子市 野坂なみ

一年かけて孫の振り袖縫いあげる

ぼんやりと生きる支えを外す時

待つ君にすまぬ長生きしそうです

服のままで泳ぐ稽古もおこう

終列車進路はすでに決めている

米子市 中井ゆき

ハマナスも私も沖に恋をした

背泳ぎでアカリ宇宙と二人きり

人間のエゴで這うもの嫌いぬく

地を這って虫はせつない恋をする

梟のグズに森の風を恋う

倉吉市 山本玲子

後先も見ずに乗っちゃう悪い癖

地味といい姉がゆずってくれた服

ほろ酔いのパパ満点と子等は言う

二の足が煽てに乗ってヒョイと出た

たんぼぼの綿毛に魔法使い乗る

倉吉市 米田幸子

枯野から向こうの岸は花ざかり

国宝にしたい我が家のポンコツ車

男なら有るだけパワー出しなはれ

物好きな野次馬どもが十重二十重

賃金に見合う仕事で精が出る

倉吉市 山中康子

花あやめ笑って誘う東郷湖

温顔で亡兄安らかに長い旅

傷心になんと空気が重すぎる

もしかして抽選日までじゃんぼくじ

明日生きるくりや私を光らせる

倉吉市 淡路ゆり子

枯れそうな葦にもあつた根の力

惚けまいと胡桃からから艶やかに

人生のハードル楽に越えられず

セールスに勇気を出してベルを押し

白無垢に未来を包む娘の門出

倉吉市 野口節子
煽られてちよつと弾んだ秋帽子
踊り好きな老人会の中に居る

月に帰った後が知りたいかぐや姫
童謡を一ぱい詰めた祖母の箱

コーヒーがさめる別離の時が来た

倉吉市 最上和枝
あつさりと水に流して素手になる
頂点に立つと奢りが顔を出す

ペレー帽八十路も若い風を切る
輪の中のおこぜがちくり針を刺す

白旗を上げたハートが勝っていた

倉吉市 松本よしえ
草いきれ野に少年の声がする
母の手をあつさり抜けた手毬うた

振り出しはトッパだったと言っけれど
いい便り郵便さんに礼を言う

税務署の通知びくびく封を切る

鳥取県 田村きみ子
笑わねば我慢袋が破れそう
手の鳴る方へ転ぶ女の片えくぼ

初給料で孫に貰ったスニーカー
人間の奢りを笑う蟻の列

上品な友で美人で手が組めぬ

鳥取県 上田俊路
遺産分け欲が父の樹切り倒し
つり橋の民話残して川は涸れ

全身が耳になつて異動時期
記者会見涙で会社救えない

ここは目をつぶれと天の声がする

鳥取県 乾隆風
貧乏人ばかりたかるな此の蛇奴
子育てのように回診するトマト

間抜け顔見せて無手勝流となる
極楽も地続きなるぞ如是我聞

柔軟に生きて柳の木になろう

鳥取県 石谷美恵子
コロコロと変るおんなを量り兼ね
熱冷めて見れば何とも言えぬ悔い

逃げこめる野菜畠が少しある
転んだのは誰にも言わぬことにする

傷心を新茶の香り和ませる

鳥取県 土橋睦子
お釈迦さまの甘茶貰いに孫連れて
逃げ道に梯子はちゃんと置いてあり

世の動きどうあれ田植やつと終え
徒花を覚悟で生きた自負がある

研ぎすます本音が意表ついてくる

鳥取県 土橋 はるお

ちっぼけな夢でよかつたなと思ふ
箱庭でサッカーボール蹴っている
遊んでいても儲かる夢は見るんだが
からっぽの金庫の番を頼まれて
夏に強い空気を自転車に入れる

鳥取県 谷口 次男

富士山が美形を保ち安堵する
顔だけはびっくりしないことにする
おだてたり世辞を言ったりして平和
形式にこだわる人で肩が凝る
迷惑を守る人権なる魔物

鳥取県 新家 完司

木も草も無口でベストフレンドだ
哀しみを紛らす空が広過ぎる
パスポート確かに僕は日本人
さよならのかわり「ぼちぼち行きましょう」
空を見る時間が足らぬ子供たち

鳥取県 西川 和子

失言のコピーが風に舞っている
私のコピー大事に育て上げ
頭上注意燕の糞が落ちて来る
年金へにこにこだけじゃ生きられぬ
にこにことしてゐる方へ足が向く

鳥取県 黒田 くに子

愛は無添加 親子の絆ゆるがない
潮満ちておんなの湾も風いでくる
さまざまに子等が個性をひらめかす
ダイエツト魔法のように効いて来ぬ
おみくじの凶を飾りにして置こう

鳥取県 原 みさを

男一匹買うといわれてうろたえる
まっすぐに天までとどけ声がわり
へその緒でつながっている宝物
他人の目という土砂降りをあびている
山頭火きょうもわけ入る青い山

鳥取県 国森 武子

本音など滅多にいわぬ卑怯者
本音言う大人は信じてよいね
本音言う強さがほしい親心
年とって少しはお茶がわかります
茶をたてて一人くつろぐ安らかさ

鳥取県 西原 艶子

春愁や各駅停車好きで乗る
楽器より風の音楽聴いている
お隣のおばちゃん焼香して送る
葬式の日の虫どうも叩けない
人はみなお遍路この世通り過ぎ

鳥取県 石尾 かつ乃

こだわりを捨てて未来図画している
ひっそりと野末に咲いて人を恋う
菖蒲湯に浸って今日も無事でした
こぼれ種うぬぼれだけは持っている
荒れた手をごしごし研ぐ明日は旅

鳥取県 山本 正光

逝った妻金の心配ばかりして
うだるよな花火の夜から三回忌
捨てられぬ止った亡妻の腕時計
休肝日らしいそわそわばかりして
翔びたくて背広と靴も買うつもり

鳥取県 羽津川 公乃

豊作の兆しきらめく柿若葉
小休止毛虫はまるく死んだふり
無口でも譲れぬ主義はひとつ持つ
孫からの土産ちやっかり値札つき
消しゴムを使ったあとの薄汚れ

鳥取県 さえき やえ

杏子の実うれると記憶もどる町
子にゆずる畑へみごとな山つばき
逝きしものみな美しき遠花火
仏の好きな花植えてまた季が巡る
傷癒えて花の余生に掌を合す

鳥取県 津村 八重子

欲得も忘れて趣味に生きる日々
黒ぬりの下駄もうかれた踊りの夜
栄えし世の名残とどめる祭笛
吟詠の一時 無我の境に入る
漁火の燃えて明日の港生き

鳥取県 橋本 多哥由

逆立ちになった人形すばらしい
人生はマラソンレースかも知れぬ
悪口で袋だたきにされ逃げる
大の字になってみている昼の月
輪の中でタンポポ孤独我を通す

鳥取県 鈴木 公弘

健やかなひとの心に止まりたい
そよ風のワルツに乗った燕の子
連作の馬鈴薯掘ってみてごらん
ふわりふんわり窓際の宇宙船
干涸びてゆく人間に雨よ降れ

鳥取県 幸家 單車

神様がある日我が家に宿頼む
金庫にはびっくり箱を入れておく
はらはらと流す涙に騙される
ある日見た夢をヒントに組立てる
菓子箱を金庫代りに使ってる

鋭角の花弁 鉄線濃紫

梅雨寒に季節外れの蟹の鍋

両眼替えた鼓膜はどうだろう

用無しになっても伸びたり縮んだり

石投げてみる気も失せて淵に佇つ

松江市 舟木与根一

年金を生きてる褒美だと思ふ

最長の橋は三途の川だろう

ロボットは回転椅子を欲しがらぬ

綱締めて業師大きく見えてくる

何食べても美味しい美味いと老化する

松江市 川本 畔

靴の紐しっかり締めて会いにくい

好きな人の影はいつも黙っている

留守電に咳ばらいまで入れている

風呂敷をほどくと亡母の風が出る

もの好きな風がわたしを包围する

出雲市 岸 桂子

パレットの彩が足りない母子家庭

生涯にさて何冊の本を読む

いい思案出るまで庭の草を抜く

何処にでもある風景へバスに乗る

辞書引けば他人行儀になる手紙

鳥取県 林 露 杖

気がついてくれぬわたしの誕生日

夏本番やっぱ汗の似合う人

ぜいたくな悩みをもって不眠症

ラジオから笑いもらって手内職

また一軒ここのお店の名が変る

出雲市 富田 蘭 水

若者の中で余生を磨いてる

お早うの挨拶梅雨のウツ晴らす

窓ふしぎのぞくと心和らげる

七十を過ぎたぞぐつと身をしめる

ホトトギス鳴く朝友の計に濡れる

出雲市 石倉 芙佐子

樹齢さえ解らぬ古木に声をかけ

洞穴が出来ても椎の木緑濃く

紅白の山茶花つんと澄まし顔

苔庭が好きな子犬が叱られる

株分けをしても鮮やか沙羅双樹

出雲市 園山 多賀子

上品になろうなろうと野のあざみ

単身赴任何時まで続く栗の花

焦るまいとことん生きても若干か

感動も速く忘れることも早い

茄子の花私の無駄を論される

出雲市 吉岡 きみえ

出雲市 久谷 まこと

鏡掛け下ろしてつくる顔貌

傷ついた心キャンパスには描けぬ

プライドがあるから腹もたつだろう

七変化そうそう出来ぬ借衣裳

病葉が仲間の責も負うて散る

島根県 松本文子

あじさい忌探し疲れて眠るなり

紅つけて仏はみんな美しい

歯噛みした歯が欠けさまにならぬ日よ

紫陽花がおいでおいでをしてくれる

孫の打つ太鼓だ天まで届け届け

島根県 堀江正朗

花の色忘れた花の和にまじり

見えぬけど動けぬ地蔵より幸か

なにくそと出雲訛りでやってのけ

うなぎには済まぬと思う酒の味

朝の膳妻にあまえる音と聞く

島根県 小砂白汀

アメリカものらりくらりに手が出せず

風薫る里うぐいすや昼の月

監督はうっかり汗も拭かれない

苦戦しているのにワイワイはやしたて

結局はスタートダッシュに負けました

島根県 伊藤寿美

迂闊にもへそ出しルック着た蛙

ピカチュウの絵手紙孫のかもめーる

夢幻抱擁ああ短夜は明けやすき

いい事もいつかあるさと言う他人

ほっといてくれる友情ありがたい

島根県 藤原鈴江

また寝して誰も咎めぬのも空し

牡丹咲くこの世は私の春ですよ

けんらんと五月の風の中に立つ

梅雨晴れ間デイサーピスを受ける身の

アイリスが人待ち顔でいるわが家

岡山市 井上柳五郎

こだわりを捨てぬ心と生きている

特種にいのちを賭けてカメラマン

三寸の舌にキリキリ舞いさされ

義理ひとつやと果たしたきょうも暮れ

祝い酒ほんのり染める母の頬

岡山市 川端柳子

川柳の坂駆け上がりずり落ちて

夢の種拾い集めていてほがら

たくあんは刻んであった手をつなぎ

子らスクスクまんがを脱皮せぬ父と

風向きを変える鼻歌活気づき

倉敷市 小野 克枝

頭の中に教育勸語生きている

呆けるとは思っていない種を蒔く

鐘三つ鳴って人生宙返り

妻の掌の湖に溺れて恙無し

付き添いの交替がきて朝になる

倉敷市 田 辺 灸 六

励ましの声がうれしい句の仲間(四十周年を終えて)

かたつむり進路背伸びをして決める

ままならぬ金で買えない柴の種

人の世も憎まず瘦せたまま生きる

どんとこい男で生きる四股を踏む

岡山県 大石 あすなろ

至近距離あなたに鼓動聞かれそう

八起き目の力残したギブアップ

主義主張似てきて夫婦共に枯れ

わたしの胸に誰も渡れぬ橋がある

自画像が笑い出してる二重あご

岡山県 荻 野 鮫虎狼

マスコミの予想が当たる不倖せ

不景気な竹輪大きな穴となり

血圧の上がるを主治医不思議がり

四次元の鏡に歪む僕の顔

どちらともとれる言葉を大事がり

岡山県 矢 内 寿恵子

花菖蒲咲いて亡夫の忌を告げる

運命線も私も挽歌うたい出す

祥月命日手向けの母の顔知らず

年々歳々メークドラマを重ねきて

ソプラノとアルト木陰も賑やかに

岡山県 小 林 妻 子

身を任す竿が一本置いてある

数知れぬ地下足袋は皆破れしに

鋸の刃も鉋の台も闇に入る

平常心誰が怒ってなどいよう

逢いたいが少し大人になってから

岡山県 福 原 悦 子

先頭の父のよろこび分ち合う

連れ舞と決めて余生を模索する

こぼれ種花の色を待っている

甘言の裏に光っているナイフ

別々の部屋で家族が冷えてくる

岡山県 二 宗 吟 平

折り合いのよい町旗日揃う旗

欠席の後で地団駄予定メモ

全没の太刀打ちできぬ年と知る

出しゃばりの馬鹿世話人に睨まれる

この年で声は負けぬぞアイウエオ

忘れるため飲んでゐるのに泣き上戸
岡山県 福原辰江

影法師お前やっぱり丸い背な
追伸にいつも泣かせる母の文
叶うなら翼ください野山萌え
振り向けば運否天賦の坂の跡

岡山県 富坂志重

我がままが動き回って内輪もめ

同じ事気付いて笑う嫁姑

愛の有る嘘なら舌を抜かれまい

引越しに垣根でバラが泣いている

夕焼の雲をつむいで晴着織る

広島市 森田文

企業にも成績表がある決算

ドリンクとバナナを持ちてポランティア

絆とや祈ることのみ多くなる

お隣の花と見比べたりしない

ふるさととは水輝きて響き合う

竹原市 時広一路

割り箸の気楽さが好きうどん食う

洗われてみたかろうなあ紙コップ

針ほどの意地だチクリとさせたらか

流れ矢が頬をかすめて慌てさせ

賛成も反対もせず眼を閉じる

竹原市 森井菁居

ジャンケンに負けても将棋では勝てる
縁起直しに付合う友がいてくれる
ちよつと蔑み弁解を聴いている

無垢になれ無垢になれよと蟬しぐれ
年金で足りる暮らしにまだ慣れぬ

竹原市 石原淑子

一期一会感謝してます夏つばき

皺とも顔の一部に鼻眼鏡

ペランタに雀おしやべりして帰る

介護法儲け話を持って来る

サルビアの地球元気にする赤よ

呉市 横田英詩

コーヒーが苦手で女史と打ち解けぬ

念仏もアーメンもいる恩師の忌

一族を従え霊柩車が通る

駅ビルをぶらぶら回る乗り遅れ

ネオン林立この街毒を売るところ

下関市 石川侃流洞

尖っても6Bすぐに丸くなる

休肝日決めると残り火消えそうで

かたつむりのオブジェ見事に梅雨晴間

豊かさあふれ川の流れが鈍くなる

踏まれても夢があるから堪えられる

宇部市 平田実男

初恋はあの日あの日の日糸電話
オイコラの頃は人間味もあつた
違いますやりたい事とやれる事
マザコンを少し羨む父子家庭
人情と風情を橋に奪われる

香川県 成重放任

家事守るダイヤに勝る妻の指
空き缶を拾って田植準備する
あれこれと本音を吐かず誘い水
ひとときの夢ふっ飛んだ万馬券
時おいて軟らかく叱る母の愛

香川県 木村あきら

自転車を光らせ青い風に乗る
キッチンに光らせ主婦の座を守る
急上昇ヒバリにあつたエネルギー
千羽ヅル翔び立つ碧いあおい空
尻尾振る犬は叩いてなりません

香川県 池内かおり

ねじ捲いて栄養つけて送り出し
竹踏みで熱心だったのは三日
きれいな事ばかりで済まぬ義兄弟
もう二度と息子に水着見せられぬ
サッカーに照準合わせている午睡

香川県 川崎ひかり

守備範囲年毎せまくする頑固
神様に頂く時間と言う薬
水すましあかず輪を書く飽かず視る
肝心な時に笑ってしまুকせ
カエルの子蛙嫌って何になる

香川県 山地マツエ

定年の鋸が錆びてる老父のうつ
近よれぬ師の足跡が大きく過ぎ
大き過ぎる話を聞いている疲れ
つまみ食い体重計に見破られ
ふる里はいいな昔の名で呼ばれ

松山市 宮尾みのり

考える人のポーズでナルシスト
さわやかに初恋談義して別れ
少うしの毒が魅力になっている
友情へ大人としての車間距離
嫁嫁と言うから田舎へは嫁かぬ

松山市 丹下美津子

奥様に傾く下駄を揃えられ
すっかりと忘れたわけでない日記
土佐の人うっかり誘う酒の席
かざらない言葉も友と祝う酒
ふところをほのぼのとさすもどり税

今治市 野村京子

約束を反古にしている夏帽子
七本で損をした気のタコの子
ユーモアをたっぷり入れたベレー帽
魂が夜遊びをする大軒
田舎には幼馴染みの地藏さま

今治市 越智一水

欲捨てて愚痴は言うまい空を見る
苦勞人 人を見抜いてけなさない
一秒息災そんな心で生きる老い
山頭火書禅一致の白い道
終点の駅まで行きたいひとり旅

今治市 矢野佳雲

紙カミ紙世界の森が病んでいる
好き同士財布を見せたことがない
人の肩越しに見つめていた別れ
看病三日されて死んだらなと思ひ
死ぬまでにと言うた望みがもう叶ひ

高知市 北川竹萌

少年の無垢を抱かれた故里の山
宵風の火玉 黒森山越える
横浜の二男と温い車間距離
八合目富士山記念喜ばれ
合歓の花見下ろす母校公民館

高知県 赤川菊野

一度だけ救急車に乗った事がある
雲行きをたしかめゆつくり口を割る
熱帯魚家族はわたしとあんただけ
浪費家とケチな夫婦で仲が良い
墓参り亡夫好みのつむぎ着て

北九州市 梅田宣司

遠ざかる子の足跡を信じよう
地ビールにいきいきはしゃぐ舌がある
座蒲団のいらぬ男と飲みあかす
混んでない医院なんだか頼りない
湯の街の朝は昨夜を知らんぷり

唐津市 田口虹汀

目を病んで初めて知った陽の恵み
草に寝て迦陵頻伽の声を聞く
げんまんへ紅葉のような曾孫の指
労働は薄く賃金厚くとや
正剣さんと二人で送る霊柩車(樟 旭恒さん)

唐津市 山口高明

杏子咲く村に悲恋の物語
校長の息女才媛ともゆかず
喪服着たままで一軒誘われる
奇を衒う事はないのさ自然体
六部笠被ればしゃんと背筋伸び

唐津市 山門 幸夫

カンナ燃ゆ丘で運命に泣いた日々

木洩れ月車座の戦友今日も逝く

人の世に残す足跡永久なるぞ

芽を吹いた朝顔どんな色だろう

山鳩が撒餌に二羽の雛連れて

唐津市 山門 夕ミ

嫁にほし旅行案内茶髪の娘

考えを変えて茶髪に馴染んでる

年金へ慶弔費だけ増え続け

不自由を手足となってくれる親友

孫達の夢叶えたい夢を買い

唐津市 久保 正剣

春塵をかぶって書架の富国論

雨漏りの謎の回路が掴めない

入省から入牢までのドボン漬

白秋を偲ぶ旅情の川下り

節操が俺の禁煙許さない

唐津市 仁部 四郎

出張の背広もちろん紺である

出張に出して闘志をまた出させ

出張の旅費が時代の証言者

床柱出張先に罨がある

出張が続いて父が偉くなる

唐津市 市丸 晴翠

聞き上手になった父の背が丸い

たくさんの友が支えた闘病記

どよめいて知ったノーランノーヒット

人生のドラマ仕上げは恋模様

育ち盛り支えた母の割烹着

熊本市 永田 俊子

恋美しく演じていた日の袖袂

おそ咲きの花の情けの深い渦

女の魔性ブラウスの絵の黒猫に

竹山もはん女も逝った昼の月

檜山も酒場も核の傘の下

熊本市 岩切 康子

荷物見て送りましようとふと口に

ホテルの名意味をたずねる好奇心

ミニティッシュ書いてあること気にしない

仁王尊心の衰退知っている

琴の音を見上げて語る川下り

熊本県 高野 宵草

風の詩よく理解して暮し下手

弦バスのリズム座席の床を這う

どうしても目尻が下がる孫という

土いじり好きで畑と陶芸と

星七つかぞえて天道虫逃がす

教授回診 励ますことば温かい
素っ裸羞恥が残る手術台
識見のことばを拾う蛍光ペン
人を恋い踏ん切りつかぬ筆不精

弘前市 岡本花匠

姿見の向こうで見てる嫉妬心
聞く耳と聞かない耳とふたつあり
生きている目覚し止める手が伸びる
ウンウンと話だけでも聞いてやる

弘前市 福士慕情

花嫁が紫陽花ロードを旅に発つ
人の和が刻んだ年輪温かい
時の風壁画で飾るアーケード
ポケベルが奪う自由に慣らされる

十和田市 小笠原敏人

誕生日眼鏡屋だけがおめでとぅ
孫も来い亡妻も来いとは迷うわけ
今さらにふるさとのありがたみ涙して
出来るならふるさとの土になりたくて

八戸市 島田昭治

庭園で少しリッチな風に合う
花の名はとんと知らぬが花好きで
著我咲いて少し依怙地な亡父に似る
藤棚に首つるしおり花たわわ

青森県 諏訪柳々

炎天に影ゆらゆらと我が味方
敗北の痛みを分ける酒の友
妥協する両手が愛を語りあう
雑談の中で方言語尾高し

静岡市 安本晃授

鶯が啼く犬の遠吠え森眼覚め
鈴を振る児等合奏の中に映え
庭仕事生ビール手に暑気払い
枯れる日も近くピアノと詩に生きん

富山県 増田紗弓

峰々へ雲がロマンを打ち明ける
臆病もいいじゃないかと山が抱く
電話待ち友も同じでいたと言う
花の忌と慕うと知らず花は咲く

大阪市 藤田頂留子

夏暑いほうが嬉しい冷しあめ
都会やな食べたい処に牛井屋
カーラジオ顔もやさしい人らしい
人類の横暴叱るエルニーニョ

大阪市 稲本凡子

下手な字で真心こもる花便り
落日の神秘に酔うて帰れない
舞踊が好きで姑の自然な色香みる
石橋を渡る男に魅力なし

大阪市 松尾 柳右子

政財界おどろかないよトンボの目
物干しは満艦飾だ旅帰り

若いのにナツメロ唄う婆ちゃん子
母ちゃんの落雷屹度金の事

大阪市 清水 利武

手を口に当てて秘密の話し合い
紫陽花もバラも今年は早く咲き

シャッターの前で花束笑顔見せ
明石橋重い車の列つづく

大阪市 津村 志華子

人の世は十人十色というドラマ
大気汚染花より苦情来ています

夏草がのびたと亡夫が呼びに来る
母の香と温もりしめる袋帯

大阪市 寺井 東雲

大皿にまだ盛り足らぬ暮しむき
うかつにも隣の嫁と写される

停年後趣味に挑戦する夫
愛こめてうまい茶漬は妻の味

大阪市 杉澤 汀

マスターの仕上げの銕二三回
ひこばえのように店出す三代目

蜜蜂の巣箱に一人ずつ卑弥呼
立話過ぎ子は幼稚園遅刻

大阪市 岡本 久峰

落城の死者に手向けの辻地蔵
高砂の女医が土産の穴子寿司

黒髪を忘れ茶髪に何故走る
百年の校門いじめ受けぬ

堺市 黒田 真砂

お転婆も茶室に入ればおしとやか
彼岸まで持つて行く気の罪一つ

春の元氣と共に夫が退院し
心の空洞へそつと涙をためておく

箕面市 椎江 清芳

軽い罪消えた氣もする鐘の音
神様も商売氣出す祈禱料

みな無口空氣が重い事故現場
真つ当に生きた無冠の太い指

豊中市 松岡 久留美

佻しくも氣ままな暮し謳歌する
慎ましい母にもあつた底力

家中が何時も明るい丸い母
老後には妻とカラオケ楽しもう

池田市 岡本 吉太郎

文明は新製品生み毒残す
喜寿来ても妻に毒舌はいている

本心が零れそうにて慌ててる
美しい五月やさしいかおで来る

心理的な戦いしてる嫁姑

池田市 藤井計光

ギクシヤクと会話途絶える共稼ぎ

肩書きより社の存続が気にかかる

七桁は義務ではなくて協力だ

吹田市 山本希久子

孫と重ねる素足でものを売る少女(カンボジア)

アンコールワットの夕陽血の色か

旅人へ灼熱の陽は容赦なし

泣き癖のついた私の数珠ひとつ

東大阪市 指宿千枝子

猫のボス隣のままにやさしくて

隙間からのぞいた空の広いこと

エアポート行きのハンドル国なまり

飛行機のしっぽで耐える十時間

枚方市 前たもつ

幼稚園で大事にされるカタツムリ

気候不順菜園よく知っている

一号線で日本の活気眺めたり

大きな仕事残し元気に生きています

枚方市 二宮山久

仕事にも慣れた息子の午前様

生け花がまつてる我家平和なり

昨日までなかぬカエルの大合唱

子育てもおおえてしみじみ夫婦酒

カセットのお経を聞いてよく眠る

枚方市 寺川弘一

あなたから渡ろうとしない橋なのね

死ぬ時は楽しかったと妻に言う

休肝日なるべく怒るまいとする

高槻市 傍島克治

なにげない愛想笑いが誤解生み

親には長く子には短い夏休み

タレントの色紙が壁に小料理屋

行きずりの恋は深追いせずにおく

寝屋川市 森茜

草臥れていては大事を見失う

足もとに摩り寄る猫もひとりぼち

霊柩車きらきらきらと通り過ぎ

ごめんなさい蚊を仏壇に閉じ込める

寝屋川市 角野仁清

それらしい貌に男はなつてゆく

見本より大きな海老が乗って来た

ワンカップほっと息つく夜勤明け

妻はまだ寝ている朝の茶を淹れる

寝屋川市 坂上高栄

兄ちゃんていいと横綱綱の顔

平成の身繕いですスフィックス

間違いの電話が縁のお友達

喜びも悲しみも乗せ雲流れ

八尾市 吉村 一風

夢を追う筆は休まず描いている
身構えてくる相談はのりにくい
お日様の匂いを持って孫がくる
搾りたて飲むと小牛がにらんでる

八尾市 篠原 いつふみ

父よりも母の背中を見て育ち
財無いが福耳だけは親譲り
煩惱が大きい声を出したが
偏屈で頑固も孫にだけ甘い

八尾市 生 嶋 ますみ

鯛ふんばつ夫の傘寿まず祝い
バラ園に咲き競うてる夏帽子
新生児室 父似 母似とかしませ
候補者のポスター 自信満ちた顔

岸和田市 藪 野 けい子

定年を喜ぶ妻と核家族
夫婦酒話し相手が病に伏す
落し物あつたと朗報聞く電話
雨あがり花にきらりと水滴乗せ

和歌山市 福 本 英 子

いたずらを赦してくれぬバラの刺
良いことがありそう雨のポストまで
薪歌舞伎堂も谷間から助演
ああ十年瀬戸大橋の閑古鳥

和歌山市 榎 原 公子

底辺で窺うジャンプのタイミング
遠雷を聞いて膨らむ白昼夢
私の盛夏がはじけないヤマセ
一日がなんと短い多事多忙

和歌山市 楠 見 章 子

熊野路でみどりのシャワーどつと浴び
止ん事無き方も歩いた熊野古道
木洩れ日の奥から王子現れる
お裾分け桃だと鼻が利き分ける

西宮市 牧 淵 富喜子

手に取ったキャベツ高値をそつと置く
スランプのさ中らつきよう漬けている
この日頃震災前の味に凝る
年毎にがくあじさいが好きになる

西宮市 秋 元 てる

物わかり良過ぎ存在感ゼロの兄
一喝しすぐ機嫌取る癖が出る
お供えのいちご五粒づつ分けて
傘寿とや本音すらすら日記帳

西宮市 菊 池 トミエ

古里の新茶が届き嬉しい日
燕来て修理を急ぐマイホーム
まだまだと夢を追いつつ這い上がる
ダイエット羊もすらり衣替え

我が輩の主お札になりすまし

難点は自由に頭脳働かぬ

猫太り流れるようにおりられず

古色蒼然コーラン響く青の塔(ウズベキスタンにて)

人形に留守をたのんで医者通い

ただ今と帰れば写真に手を合わせ

毎日の注射でやわらく肩のこり

老人ホームの姉は痴呆の籠の鳥

梅雨入りと聞けば蛙の声高し

明石大橋瀬戸内ながむ暇も無い

邪気のない嬰兒のえみの温かさ

気に入らぬ物は食べない姥勝手

人生はうまくできてる五十肩

僕に行く後からお金ついてくる

ライバルと頭の古さ競い合う

傘立てをカラフルにする女客

仁王様転んでしまい苦笑い

回覧板アレレ奥さま別人だ

ズボン丈直さずはけたことは稀

一年草互いに何を残せしや

西宮市 井上 信子

宝塚市 吉田 笑女

伊丹市 小熊 江美

川西市 氏林 洋敏

鳥取市 石上 悦子

知らぬ間に舌が一枚増えていた

ペン執ればタイムスリップして困る

お点前へ大和撫子甦る

手入れする松に教わる無の美学

虫時雨さしつさされつ夜が更ける

虫けらの俺だが野良がついて来る

泣き虫がアンパンマンで立ち直る

こけにされどうにも虫がおさまらぬ

気のおける人の隣で肩がこる

追いこして出るに出れない人が居る

嫁の座をぬけて陣取る妻の城

再会に思い出せない顔と顔

泥つきの野菜に信頼感がある

ちぎれたように隅で煙草を吸っている

蛍とぶちぎれた夢を縫うように

お祝いの鯛にワインも赤と白

地に足をつけて行こうよ一円貨

愛されてますか水槽の金魚

宴までもしもばかり考える

誰よりもポチが分かってくれる愛

鳥取市 西村 黙光

鳥取市 春木 圭一郎

鳥取市 前田 一枝

米子市 政岡 日枝子

米子市 鷺見 正子

米子市 木村春枝

肚の中の造反の虫なだめている

頼みとする神が時々背を向ける

二人居て違った地図を書いている

強い星の下に生まれた人という

米子市 本吉宗光

紫陽花のピンクの色はまぶしすぎ

大山にきやらぼくを見に行けぬ足

酒五勺俺の適量唄一つ

保守政治まだまだ続く票が出る

倉吉市 野中御前

誕生日祝ってくれる嫁が好き

仏壇のお花はみんなこつち向き

バーゲンで年より若い柄を選び

足の裏下駄の感覚まで忘れ

鳥取県 乾喜与志

やわらかい言葉を忘れおぞましき

早う来た梅雨おだやかにおだやかに

散歩から戻ると大の字に転ぶ

生きている証お庭の草を取る

鳥取県 埜寛子

私の為に回った地球何処へいた

私があつたらこそその我が家の

自己診断リユックサク症候群

自己嫌悪言いたいことをまた言った

鳥取県 近藤春恵

ぼかぼかと背中に神の陽があたる

ありつたけ愛情受けた子が背き

念仏を唱える老母がいとおしい

米びつは嫁に任せて趣味に生き

鳥取県 権代康女

咲きはこる牡丹天使のようになり

困ってる方に心が向いてゆく

一夜干しほんのりうまみ出してくる

本心は言えず心にあるあせり

鳥取県 太田幸枝

素朴さの中に気品が見えかくれ

極道の限りつくしたホームレス

石笛の音色古代を語りかけ

飾らずに自分の素顔出して生き

松江市 浦辺静江

雨の午後ゆっくり箏笛の機嫌とる

片隅でかすかに咲いた花菖蒲

ゆつくりと夕日眺める夫婦箸

わだかまり解けて青空見え出した

松江市 佐野木みえ

エルニーニョ ストープしまえば扇風機

南禅寺疎水の肌に触れてみる

憧れとは違うあの人格好い

見た目よりずっと大人の高校生

香を聞くスローモーションだから合う

不精髭フォークマナーが点かせぐ
じゃんけんぼん好物欲しい目の動き

ブラボーだ夕日を浴びるスフィンクス

出雲市 板垣夢酔

ズルズルと退職線へ着いた歳
門札に戸主も似てきた老い疲れ

どつと客 生けすの魚介慌てだす
朗らかな割には痩せている財布

出雲市 小白金房子

紫陽花が濡れて人恋う札所寺
夕茜亡母の思い出抱きよせる

安全旗掲げ不運の事故現場
傘立てに会えぬしずくを折りたたむ

出雲市 小玉満江

金だけが頼りですと言うご時世
デイスカッション続く夫婦は同じ趣味

ハヒフへホそれは内緒よフツフツフツ
地震館想い新たに北淡町

島根県 森茂美

素面では言えないこともあった酒
十字架に誓った愛は嘘だった

紫陽花が重くかたむく傘雫
心から抜けない刺が夜を責める

倉敷市 井上富子

愛培の花とくつろぐ昼下がり
人生の花をチャペルが送り出す

それからは女を捨てたヘルメット
好き嫌い言わない箸を持つ長寿

岡山県 山本玉恵

情ひとつを追う身に風の無表情
人間を逃げてあれ野のひとり旅

胸の火がパチパチはせる十六夜月に
想いなおしてそつと鏡を裏返す

岡山県 江口有一朗

子に負けぬ親たちの私語参観日
年金に頼るつましき温かさ

前に出ぬ足よおまえも老いたのか
相棒の無理を黙って聴いている

竹原市 三宅不朽

陰翳礼賛佳人の翳もそのひとつ
白桃の修羅がはじまる袋掛け

白桃は見るものときめ見てかえる
鉄と鉄たたかう如し兜虫

竹原市 古谷節夫

ニッポンに二人と居ない妻という
ひよつとこになり切り鬼と酌むお酒

棟梁の腕が教える鉋くず
保護色の虫と戦う夏至の朝

柳井市 弘津柳慶

思わぬ処でシャッター切られたり

昭和中年に戦地の苦労わかるまい

僕の一票に次々電話かかって来

兄の死と同じ年になりました

美祿市 安平次 弘道

由緒ある鏡卑弥呼が出るかしら

鏡台の隅に秘密の鍵があり

前置きの長さ借金切り出せず

風倒木山の掟に逆らえず

香川県 工藤吟 笑

秤には乗らぬ重さの母の慈悲

百年の計も崩れてくる不況

体温計ベッドの母に嘘を言う

栄養剤吞んでいそいそ家を出る

高知県 小澤幸 泉

酒飲みの父が止めよと息子に聞かす

四次会を知った私の飲み始め

太陽が私を捨てて回り出し

世の中のことは忘れて飲み明かす

彬賞 時代を鋭く諷刺した新感覚の川柳 2句

大投句料1000円 締切8月5日(水) 必着

柳 応募先 石川県河北郡高松町字高松ク40

〒1215 高松町社会福祉センター 鶴彬賞係

後援 ナカトミ書房 第一回中村富二賞

(要項)

○二句一組 千円(何組でも)

但し、中村富二賞決定まで未発表の自作句に限る。

○募集締切日 平成十年十月十日(当日消印有効)

○送り先

〒二二〇 横浜市西区浅間町二一〇九一三

瀬々倉卓治宛

○選句方法 「隗」全同人による一句選出

(無記名清記選・合点方式)

○表彰

中村富二賞 一名

ナカトミ書房より寄贈の賞状額入りと

「童話」中村富二句集進呈

副賞 1 中村富二直筆短冊・短冊掛け

2 受賞者の個人句集一五〇頁二〇〇部

無料発行(該当者無き時は準賞者

三名に各五万円贈呈と致します)

準中村富二賞 三名

ナカトミ書房より寄贈の「童話」中村富二句集

「隗」発行の賞状額入り進呈

副賞 現代川柳「隗」三ヶ年購読券進呈

佳作 十名 現代川柳「隗」一ヶ年購読券進呈

○発表 第六号「隗」誌上(平成十一年一月発刊予定)

投句者には発表誌を呈します。

主催 現代川柳「隗」

自選集

西田柳宏子

裏口に油断のキーが落ちてゐる
輝いた亡父の武勲もセピア色
帽子などかぶらず愛校心は死語
飲みたらぬ同志集めた爛冷まし
いい朝だ父子輝く目がきれい

野村太茂津

黙って進めば黙ってみんな推してくれ
退く時を自分のハラで決めるべし
早過ぎても遅きに過ぎても見苦しい
結果論で物を言うてる愚劣者
若返り薬歴史の裏話

阿萬萬的

下手な洒落軽い男と見てとられ
好奇心あるのもいます蟻の列
結局は白紙にしとくペンを置く
馬鹿になることも覚えて来た余生
日本誕生ああやこしい古事記伝

月原宵明

一点を凝視疲れた招き猫
梅雨入りに感激もない蝸牛
父の日の父は居残りして帰る
サッカーの元気を貰うヘッディング
川柳がそんじよそこらに落ちてなし

正本水客

波の音ひとりで生きてきたわけでない
花冷えの朝いいことがありそうで
目を閉じてみなさい自分がみえてくる
例えばの話がすきな人とうまがあい
素足から夏が頭をひっこめる

野田素身郎

アンパン二つ食卓に置き妻出掛け
相続した株だ値下がりにしようとも
よく爪が伸びる麻痺したほうの足
OB会去年と同じスーツ着て
いつ寝ようがいつ起きようが無職の身

松川 杜的

パレットに昨日と同じ色もう出ない
お客さんの前では靴を揃えない
小財布を忘れた鈴を振ってから
九六歳 母の生命線まだ確か
来る手紙雅号の方がまだ多い

小林 由多香

晩酌がうまいまだまだ働ける
ライバルの風邪へ東の間気を許す
生きざまが変形をした靴にある
肩の凝りほぐしてくれる雨となり
雲ふわりハートの形にも見える

藤井 明朗

寅年の景気はずれる宝くじ
不況つづく政治ばかりでない悩み
時どきは痛いところつく父も老い
どの党も似たりよつたり参議戦
夏の情趣 蛍はとれぬほたる狩り

辻 白溪子

鯉のぼり見上げる空が晴れわたり
死に急ぐ男と思われない自殺
大きすぎる壺で花など挿してない
結婚を迫ってくれる人がない
唄い出すところは合図があるお人

波多野 五楽庵

同病の死に遭う 壮絶なる夕日
リラ冷えにまた傷口をいたぶられ
日曜菜園与作の貌をして行こう
諦めも喜怒哀楽の仲間入り
憐憫の匂いが強くなるバラよ

藤村 女

三回忌佛ほころび灯明が揺れる
思い出を重ね香焚く父母の墓
泣き顔をうつせば鏡冷たすぎ
義理済めば父母亡き故郷すぐ帰り
過疎の町私ひとりのバス走る

小西 雄々

堅物に羽目をはずせと誘う蝶
悲喜劇と晴れ後雨を繰り返す
証券も預金も持たぬ蛙です
ライバルへ和を求めたく一步引く
妥協案すつかり忘れ木を揺する

金井 文秋

白寿に挑戦 軍配は神が持つ
補聴器がうまく濾過してくれぬ声
米寿祝は要らぬまだまだ生きるから
油断した罰こげ付いた鍋みかく
若うなった気で居る若う化粧して

気分では若い席を譲られる
酔うほどに別れたくない仲間
余生なお豊かな土に恵まれる
生涯現役 指先も口先も
一鉢のみどりが対話とませる

恒松 叮紅

紫陽花の沖からとんでくる虫
ひたひたと波あじさいを手折るとき
紫陽花にきしむ変換キーの指
白い紫陽花青いあじさい現し世の
あじさいの湖に沈んでゆく枕

八木 千代

靴音が曲がって行つたまま更ける
スクスクと育ってくれたベルシヤ猫
牧草を摘んで牛の眼と出逢う
しばらくは足止めて見る鯉の群れ
本名を忘れた友と久し振り

黒川 紫香

テレビとゲーム孫は勉強嫌いな
六月だ雨は覚悟に入れておく
冷やしそうめんつるつる真夏が続く
せめてもの供養に葬儀委員長
御説教生者必滅会者定離

宮口 笛生

梅雨しとどわが身かさねる沖縄忌
老兵の思いリュックを背負わない
一票が欲しい善人ぶつた顔
貧しさにかわりもなき選挙戦
北国の海をしばらく見ていない

高杉 鬼遊

長男前路結婚
いつ迄も恋人であれ膝枕
妻よりも美人で妬いている童
恋人と言われ夫婦とも言われ
ばろくそにサンマ 伸助から祝詞
慶應を少し休んで嫁に来る

板尾 岳人

おかしさをうっかり笑えないも齢
地下街を一つ曲ってから迷い
バーゲンにもう近寄らぬことにする
名案がパッと浮んでトイレ出る
サクランボ少し調子に乗り過ぎる

遠山 可住

ハワイアン僕を魚にしてくれる
忠告してくれはる人がたんと居る
政治家の如く麻痺してなるものか
水茄子が水待っている飛び起きん
6キロも脂肪がとれたファンファーレ

河内 天笑

私の句特集 (1)

本誌目次ページ両側の座右の句・私の句の欄に
今まで掲載されていない方を順に特集します。
原則として、平成九年十二月承認までの同人を
対象にしています。

座右の句

一輪の菊は気合で咲くごとし

(薫風)

私の句

受験期の戦友母と子の夜食

瀬戸まさよ

座右の句

寒いから腹を立てないことにする

(智子)

私の句

裸麦貧しき風の音も聞き

堀畑靖子

座右の句

讃岐富士一番星を簪に

(薫風)

私の句

虹の色浮んできそう夏の服

金崎峰子

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薫風)

私の句

逝く秋の慕情切なく奥信濃

奥田良子

座右の句

人の世や嗚呼にはじまる広辞苑

(薫風)

私の句

スマートに老いて往生夢と欲

湯浅馬洗

座右の句

走馬灯花も犬ほど走るなり

(薫風)

私の句

灰皿に三行半は書けません

刈田泰司

座右の句

人恋し人煩わし波の音

(栞)

私の句

嵐にも耐えて優しい眉になる

大石あすなろ

座右の句

子は宝いつまで金のいるたから

(岡村嵐舟)

私の句

戦いは終った父の骨を抱く

丹下美津子

座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(薰風)

私の句

首相よりスイスの犬が早く着き

月原 方郎

座右の句

島一つ買うて暮らせば涼しから

(薰風)

私の句

温もりも逃げ道もある母の膝

堤 くに子

座右の句

人恋し人煩わし波の音

(栞)

私の句

輪をぬけた影に翼がついている

籠島 恵子

座右の句

終戦日分水嶺の如く在り

(薰風)

私の句

知覧基地今年も桜競い咲き

山門 幸夫

座右の句

人恋し人煩わし波の音

(栞)

私の句

あひるたち平たい足で坂上る

山門 タミ

座右の句

立話長うて犬も坐り換え

(薰風)

私の句

パレードの行く先々に母の顔

榊原 慧心

座右の句

双六の上がりにござるお釈迦さま

(とみお)

私の句

蹴躓く石が浮世に置いてある

植田 一京

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

今日も又民謡で旅する西東

川内 叭笑

座右の句

少年の居る明るさで秋が来る

(智子)

私の句

よろこびをきくわがことのようにきく

森 茜

座右の句

少年の幾人いても毬一つ

(薰風)

私の句

絶妙の相槌さくらの影が見え

前田 昭子

座右の句

ぬぎすててうちが一番よいという

(水府)

私の句

正誤表手に還暦を歩き出す

市丸 晴翠

座右の句

遠き人を北斗の杓で掬わんか

(薫風)

私の句

落葉踏む忘れた日々の音を聴く

藤原 桂子

座右の句

秋風に傷なきものはなかりけり

(薫風)

私の句

気の合った医師に出会って命のび

黒崎 恭子

座右の句

人生に起承転結ありにけり

(薫風)

私の句

混み具合見て診察が早くなる

北村 正安

座右の句

北国になお北のあり流水よ

(薫風)

私の句

福梅と神社で実ればはくがつき

栗田 久子

座右の句

五十年の起伏歩んで来たドラマ

(小路)

私の句

間歇泉地球の溜息かも知れん

坂上 高栄

座右の句

北国になお北のあり流水よ

(薫風)

私の句

隧道とんないを風通り抜け春が来た

黒台 伊佐武

座右の句

灯台の夕陽神話を抱きよせる

(緑之助)

私の句

沖繩に戦後ひきずる夏の雲

森 茂美

座右の句

ピリ走る根気に拍手惜しまない

(紫香)

私の句

荷崩れがするほど欲を積んでいる

山本 玲子

座右の句

石くれも三つ積んだら思惟の塔

(薫風)

私の句

眠れぬむれ私の中の天邪鬼

志田 千代

座右の句

富士山の藍に一礼してしまふ (薫風)

私の句

いっぱいはいらない薔薇は一本に 鴨谷 瑠美子

座右の句

雪月花日本の味は足るを知り (薫風)

私の句

おぼれそう水の流れに逆ろうて 田中 節子

座右の句

こおろぎのように泣けたら涅槃かな (薫風)

私の句

宝物何一つなく終りそう 松永 会美

座右の句

旅人も月もやがては去る砂丘 (薫風)

私の句

人生の旅は知らない駅多し 福岡 雅楓

座右の句

旅人も月もやがては去る砂丘 (薫風)

私の句

矢を持たぬ弓にも小さな役があり 増田 紗弓

座右の句

こおろぎのように泣けたら涅槃かな (薫風)

私の句

七夕にこより作ってくれた人 森本 節子

座右の句

煩惱はいつも吃水線を越す (天笑)

私の句

簡単な計算だけど割り切れず 宮本 かりん

座右の句

一冊のノートに風をはらませる (智子)

私の句

ふいに郷愁一途に走れ竹の馬 長浜 澄子

座右の句

さよならのあとまほのぼのするお人 (天笑)

私の句

迷うても森の出口はきつとある 福田 満州

座右の句

あんたかてうちかて阿呆で伸直り (天笑)

私の句

音痴でも愛の讃歌は唄えます 以倉 菜々

田中好啓

東野大八

「私が初めて『大仏の会』へ足を運んだのは昭和八年(二十歳)ごろであったと思ふ。佃嶺月さんや中島柳坊さんのステテコ姿が印象に残っている。

当時のこの会の常連といえは楳元紋太、房川素生、三条東洋樹、鈴木九葉、大山竹二、釜永睡花、山本浄平、藤本主税という先輩諸氏であった。

随つて句会の選者にはこと欠かなかつた。二十歳前後の若い私たちも勉強のため、選を押しつけられて最初は句箋を手にして身震いしたのだが、嬉曳(あいびき)や流連(いつづけ)の文字がわからず、嶺月さんや、睡花さんに教えて貰つたものだ。

当時、西灘辺り、東神戸一円には川柳のグループがないところから上筒井の会を作つ

たものだ」(ふあうすと50周年記念号) 歳月人を持たず、田中好啓)

「蠟燭は叱られてからしゃんと持ち 紋太『わたち』の序文に寄せて三太郎師は次のようなイミのことを書かれている。

『紋太さんは、いつ会つても叱られているような格好をしているし、句を見ても文章を読んでも、人を叱るのでなく叱られているよ。う：(中略) 紋太さんが叱られるとすれば、それは人間にはなく天の声であらう。作家としてこれほど幸福なことはない。私もこの天の声を早く得たい寵遇になりたい』(「ふあうすと」 紋太追悼号・田中好啓)

本名・田中好一・大正2年12月5日福知山市生れ。昭和11年1月ふあうすと同人に推された時は好啓児。

古い話だが、大陸川柳作家同窓会の伊勢の大会の席上、好啓児とは面白い柳名だな、何かいわくがあるのか、とたずねたところ、少々はかんでコッソリと啓の字は初恋の人の名だ、と答えていたのを思い出す。この柳号は、昭和44年にやつと好啓に改めた。

「平成10年3月1日、喉を犯されていた好啓さんは、メッセージを残すことなく逝つてしまわれた。昭和30年代から昭和40年代まで好啓さんの属された職場川柳会、川鉄(川崎製鉄)川柳会と、僕(中川一)の属した新明和川柳会(もと新明和甲南川柳教室)は、東神戸どうしということと姉妹吟社の提携をしていて、お互いの句会に行き来し、合同吟行を催したりして、好啓さんのお世話で宝塚にある川鉄の寮などで、忘年句会や新年句会がよく開かれた。(中略)

好啓さんは、昭和初期から「ふあうすと」だけでなく、『番傘』や『川柳雑誌』に鈴木九葉さんらと投句されていた。『昭和九年度番傘自選句集』には、大山竹二はじめ、ふあうすと系の地方同人らとともに、同誌投句の十句を寄せられていた。(中略)

戦後は神戸の川鉄川柳会などを中心に活躍されていたが、倉敷市水島に新製鉄所ができて、昭和41年ここへ転勤されたのを機に、昭

和42年9月に川柳いづみの会を設立、柳誌いづみ(不定期刊)を十月に創刊された。「いづみあつすと」5月号中川一悼文抄録)

「倉敷に転動される前の東神戸の川崎製鉄所の要職中、仕事の傍ら社内に川柳の同好者を募り、当初は川鉄新聞・川鉄健保新聞の柳壇を担当、同社の本田文三氏と川鉄川柳クラブを結成。社内に多くの川柳愛好家を育てられた。

昭和27年6月1日有馬の泉郷荘で川鉄川柳会創立一周年記念大会を開き、前夜祭においても夜の更けるのを忘れての談論を行った。

後年私(里嘉矩)の所属した新明和川柳会が川鉄川柳会と兄弟吟社になり、思い出はつきない。好啓氏が川柳を知られたのは満十八歳の頃で、郷里福知山に番傘支部があり、先輩に誘われ句会に出たのが川柳人のはじまり。

青年時代は、専ら市民グラウンドや甲子園で陸上競技を愉しまれていたようで、一万米レースで、例の村社選手に二周も追い越されたという苦くも愉快な経験をされたとか。

芸能・スポーツ・文学を趣味とされ、謡曲は女人の域に入っておられた。「同」里嘉矩悼文抄録)

好啓といえは、麻雀が好きで海士天樹、室田千尋、橘高薫風、寺尾俊平が、いわば並外

れた雀友であつたらしい。

筆者も大陸時代からこの方はたんまり仕込まれているので、一度手合せしたいものだとよくあちこちの会合で話に出たものである。

好啓さんといえは、筆者の長女の婿が瀬戸内海の六島の出身で、娘の縁談がととのい、結納を老妻と二人で納めにいった折、川鉄の寮に一夜泊めて貰い、なんとその翌日は船つき場まで、小型自動車の愛車に三時間余もゆられて、その門出を祝って貰った思い出は、今も昨日のようだ。

その車中に「あなたと私は一つちがいたが、お互い出来るだけ長生きしよう。そのこやし」が川柳なんだ」と川柳だんきをえんえんとくり展げたものである。

平成10年3月1日、咽喉がんを患い七カ月も入院生活を送って他界された。享年86。顯徳院雅道好啓居士。

小池鯉生にアルバムごと贈られた中から、紋太師の写真を数枚、ウムをいわず巻きあげられたものだが、この人にとって根元紋太は、その生涯の川柳の恩人であり、傾倒する大先輩であつたらしい。

「花隈時代の記憶は随分うすれているが、先生の白い前垂れ姿は忘れようとしても忘れられない。

荷車も商品もはつたらかして、諏訪山図書館で川柳勉強を懸命にやられた頃、ついに荷車ごと商品が他人に盗まれ、かんかんになって叱られた挙句、大阪の菓子屋へ修業名目で丁稚に出された話など、先生にそれをきかさ一晩中、こちらも寝られなんだ」という話には、お互い眼頭を濡らしたものである。

「お菓子のあんこを煮きながら、柳人との企画や編集の打合せに身を入れすぎ、大事な鍋の底に穴をあけた話。正に三太郎師の叱られそうな紋太先生だった。

のこぎりはべこべこさせて柄を渡し
の紋太先生の句は永久に忘れん」

そんな話をよく語り合った仲であつた。ふあうすと賞の選衡委員で、全人抄の選者で同社の副主幹、その病中の遺作を最後に掲げておく。(ふ誌五月号より)

燕行き交つてかわらまららしい 好啓
母と娘で生きるでだてを思いつき 〃
酸素吸入のちに近い路にある 〃
生命のことを明るく語りあいたいな 〃
一合のミルク三キロ増える 〃
雲疾しあくまではやし死出やよし 〃

▼次号は「渡邊 蓮夫」

『盂蘭盆』

清博美

精霊の馬を喰てる轡虫

一五二二

— 霊棚の胡瓜や茄子を轡虫が。

うし馬をよけてひづんだかやをつり

一六15

— 霊棚を避けて蚊帳を釣る。

*

盂蘭盆はもととは、「盂蘭盆経」の記事に基づく仏事で、古く推古天皇十四年（六〇六）に初めて行われ、聖武天皇の頃から恒例の仏事となったとあるが、民間での盆行事には仏教的要素以外のものが多い。例えば、各商家では、師走の大晦日と同様、盆祭の前夜に半年間の総勘定をし、貸借を済ますので多忙を極める。その代わり十六日から三日間は敷入と称して、奉公人に慰労休暇を与え、などである。盆踊りもまた盛んに行われた。

*

掛とりが来て吹付ける御迎ひ火

六二26

— 迎火を焚いている所へ掛取りが。

はたられるのが無き霊へきのとくさ

八31

— 借金に追われる身では先祖に申し訳が立たない。

かけ取の米ぬのが精霊へのちそう

一〇30

— こちらはきちんとした生活。

*

また、十二日には草市また盆市が立ち、

盂蘭盆は、また精霊祭とも称し、陰曆七月十五日を中心に行われる仏事である。

先ず十三日に迎火とて門口で焚火をし、先祖の霊を迎えて霊棚に講じ、十四・十五日の両日には棚経とて僧を招いて経を誦じてもらい、十六日には再び焚火をして送火とし、薬船などに供物を載せ、灯籠を点じて川に流し、精霊を送る。

盂蘭盆には、祖先の位牌を安置し、供物をのせる棚を作るが、これを霊棚といい精霊棚とも言った。『四方の硯』には、「七月十四日の夜、家ごとに其の先祖のまつりをなすを、仏とむらふといはずして精霊まつりといひ、仏壇といはずして、たま棚といひ、棚経といふ」とある。

俳諧『俳諧新式』秋の詞寄・七月に「魂祭

り 聖霊棚・たな経・魂棚・青そは・ねいも・みそはき・枝まめ・枝ささけ・青ふり・麻から」などとも見られる。

また、霊棚の牛といって、茄子や胡瓜に麻幹（おがら）の足をつけて作った牛や馬が供えられたが、これを霊棚の牛といい、先祖の霊がこの牛に乗って帰るとされていたものである。

*

霊棚の牛ハはたけの鼻まがり

初20

盆ン棚ハみんなはたけの月たらず

二二34

— 出来損ないの胡瓜や茄子。

精霊の馬の目き、ハ下女にさせ

拾三21

— 料理に使う物と霊棚の牛に使う物とを。

鳴焼をのがれ仏の馬に成り

九七6

— 鳴焼にならなかつた茄子。

人々はこの市で盆の仕度を整えるのだが、さて、太田南畝の『金曾木』を見ると、「盆の精霊祭の団子をさへ売来れば白ひく家もまれなり。霊棚の杉垣をつくりて売る事も、我若かりし比はなかりき。」（此杉垣は江戸計、上方長崎もなし）七月十六日の朝、精霊祭の御迎ひくと、霊棚をくづせしものを買に来れば、世は便利にのみはしり行て、はてくは飯も汁も買ふて食ふべし……盆太鼓、団扇太鼓とて、紙に張しものを売に来しが、是も止みぬ。よろづの翫もの価高きものみにていやしきはすくなし。かゝる時にあひて銭のなきをなげく者あるもおかし、銭のなきは必然の理なり」と記している。江戸時代から、既に万事手抜きを優先し、便利々々の方向に向かっていた事が窺えるが、これには銭が掛かる。銭を使って便利を買えば銭が無くなるのは当然の理。「飯も汁も朝毎に買ふて食ふべし」とは、南畝先生、先見の明があつたが、現代の我々の生活を見て、なんと嘆かれるのだろうかとも思ふ。

また、宿屋飯盛こと石川雅望先生、筆禍にあつて新宿に所払いの身となつたことがあるが、その折の記述『万代狂歌集』に「新宿の辺に家居つくりてすみけるに、檀那寺の住僧のいへりけるは、あまりに道のほど遠ければ

盆になりぬとも棚経の所化はえつかはずまじとぞいひける、はたして、たまだなはつくりいとなみけれど棚経はえきたらず、事足らぬこ、地しければ便りにつきて所化のもとへ申しつかはしける、山里の盆は法師もとはざるをなき人いかで浄土よりくる。その翌年よりは盆ごとになえず来て棚経はよみける」とある。雅望先生、家が遠くなので坊主が来て呉れないと嘆かれていたが、坊主にしてみれば、かき入れ時の忙しい最中、わざわざ遠方まで棚経を上げに行くのは億劫なことだつたに違いない。それでも、たつての依頼に応じて翌年からはわざわざ出掛けていたのだから、律儀な坊主だったのであろう。

『東都歳事記』には、「今日（十三日）より十六日にいたるまで、人家聖霊棚をまうけ件々の供物をささげ、先祖をまつる、この間僧を講じて誦経するを棚経といふ。諸人先祖の墳墓に詣づ。盆の中托鉢の僧多く来る。盆の中、市井の女兒街に連なりて、歌唄ひあるく事夜毎にかまびすし、唱歌はしるすにたえず、ただし盆をとりの余風なるべし。江戸名勝志延宝五年の事を誌する件に、七月江戸中踊り初まりて美麗を尽くし、国家より制禁ありし由記せり」とある。

文中「市井の女兒街に連なりて云々」につ

いては、女の子に遊戯があり、京では「さあのやさあのや」、大坂では「おんこく」、江戸では「ぼんぼん」といった。江戸では、下層の人々の娘八、九人が一組となり、「ぼんぼん」のじゅう六日に、おんまさまへ、まあいろうとしたら、じゆうずのおがきれて、はあなおがきれて、なあむしやかによらい、手でおがむ、てえておがむ……」などと唄いながら、手を引き合つて横に並んで歩くものだつた（『江戸学事典』）とある。

*

霊棚をほだかで拝ミしかられる 八 8

— なにしる暑い季節。

たま棚にいんごうの無イ恥かしさ 二二 14

— 貧乏では院号も貰えない。

なま出来な所へ棚ぎやうもふしかけ 四二 25

— 坊主は忙しい。霊棚が完成しないうちからもう来る。

御きやうの安うり七月やたら出る 安六 8

— 坊主が沢山の檀家を廻る。

棚経をかんてうらいによんで行 拾三 23

— 「かんてうらい」は大ざっぱの意。

棚ぎやうハあたまをた、きくよみ 一一 2

— 蚊を叩きながら。

いか葉が落ちて棚経飛上 六一 10

— 毛の無い頭へ落ちたら大変。

秀句鑑賞

同人吟 西 口 いわゑ

—7月号から

秀句鑑賞を依頼されましてより、皆様の句を隅から隅まで読まして頂きました。

作者の切々たる心の叫びに触れた感動に浸り、皆様と対話の出来た満足感を味あわせて頂きました。

川柳つて、苦しくて楽しくって本当に不思議なもの、今更ながらつくづく感じている次第です。

でも課題吟一句に、二日も三日もこだわって、さあこれは出来たと思つて勇んで句会に臨む、だのにその句は没、数合わせのために出した句の方が、天になつたりする場合もあります。

そのこだわつた句は、美辞麗句を並べたて自己満足の果て自分を離れてしまつた句、天になつた句は自然に自分が出ています。

今更私がこの中で申し上げるほどのことではありませんが、こんなことを繰り返しながら、ペンを持てる限り、川柳を続けていくことになると思ひますので、今後ともよろしくお願ひ致します。

解体の家屋寂しやこぶし咲く

齊藤 焔

解体の屋敷にこぶしが咲いている、この句の解体は、何かの都合で大きな屋敷が解体され更地になつているものと思われれます。

私は震災でこの光景を嫌というほど見えています。更地には草が繁り、そして四季の花が何も知らぬげに美しく咲いています。誠に淋しいとも、はかないとも言ひ切れません。作者のこの一句、身につまされてしまいました。

ピアノの音ときどき狂う恋なかば

野村 京子

中尾藻介氏の、

「恋人の気弱へピアノぐわんと打ち」

という有名な句がありますが、恋は女をいら立たせ、そして宙にも舞わせませぬ。恋ほど不確かなものはないと思ひませぬか。

相手の何げない一言にも一喜一憂する純真な女心、可愛らしいものです。ピアノの乱れも青春のページだと思ひます。

虹の橋あれは天女のハンモック

林 瑞枝

私も空想の扉の中に入り込んでしまふ時があります。虹の橋を見て、天女のハンモックとは楽しくなつてしまひます。

ロマンチストの作者に拍手です。

不運なり主治医が酒の味知らぬ

久保 正剣

主治医が酒の味知らなくて、お嘆きのようですが、本当はよかつたのではないでしょう。酒好きの主治医なら、まあすこし位は等と甘くなります。

作者は許されたとはかりに、始めはほんの少しと思つている内にどんどん量が増えてしまひます。酒好きは飲み出したら少しでは治まりません。不運ではなく幸運であると思つて下さい。

迷信をわらつて絵馬へ手を伸ばす

小野 克枝

自分に今さしせまつた出来事のない限り絵馬なんか迷信だわ、などと思つていたくせに、山ほどの絵馬の傍を歩いてるうちに、やっぱり自分も絵馬に何かを託してみたくなりませぬ。日頃思つていることへの後ろめたさを感じながら、欲望がある、即ち生きています。いうことでしようか。

十七歳よ一緒に旅をしませんか
見つめ合う恋の電話の長いこと

結婚記念日ワインを二本買ってくる

小島 蘭 幸

ほのぼの家族の三句揚げてみました。

一句目、十七歳ともなれば家族との旅も楽しいが、でもボーイフレンドとのデートの方がもっと楽しいでしょうね。チョッピリ淋しくて、嬉しいお父さん。

二句目、お嬢さんの成長を温かく見守って上げておられます。

三句目、結婚記念日にワインで乾盃、私まで嬉しくなってしまう。

なごやかな、おふたりの様子が見えるようです。おしあわせに。

顔あげよ十人十色説を持つ

政岡 日枝子

一人や二人で取り仕切るより、人それぞれの意見を持っていますから、大勢の人が意見を出し合って一つのことをまとめ上げる。これほどすばらしいことはありません。

藍の色人に連なるものがある

榊本 露 児

特に藍染めのゆかたなんて好いですね。作者は遠い日の思い出に浸りつつ、ふっとこの美しい句が生まれて来たのだと思います。

いま一度温めてやろう翔び立つ子

岩本 美智子

翔び立つ子を抱きしめてやりたい、母親なら誰しもそんな衝動にかられます。

ましてや結婚ともなると、もう手の届かない程遠くへ行ってしまうような気がします。親としてまだ上げて上げることがあったのではないかなどと思いが乱れます。でも心配はいりません。そのやさしい作者の心は通じています。安心して翔び立たせてあげてください。子供の方も、結構親のことを思っています。

間柄不明で都会の夜が更ける

竹治 ちかし

間柄不明、都会の夜は不可思議で、且つおもしろいところのようです。

人間の裏の顔もうごめいている、でもそれが魅力で集まる男と女、次の、

「只酒を飲んで沈んでいった人」にも通じるものと思います。

大ぜいの仲間と橋を架けている

高橋 夕花

人間三人以上集まると、なんとなく諍いが起きてきます。でも仲間は多い方がいい、泣いたり笑ったり争ったりしながら虹の橋、否、川柳の大きな楽しい橋を架けているのです。

ときどきは悪女になって酔うてみる

宮西 弥生

いいことです。いつも聖人君子では人生おもしろくありません。それにはお酒でも飲んで自分を脱出するのも一つの術です。そして悪女にでも、鬼にでも、作者の悪女なら魅力的でしょうね、賛成です。

妻の座も母なる海も遠くなり

山海 友照

昨年に御主人を見送られ、そして、子供さん達も結婚されて遠くなってしまった。

たまに來られても、ゆっくりにお母さんに甘えている訳にはいかない。淋しい心境を読まれています。でも友照さんには川柳という、とてつもなく広く、深い「海」があります。元氣を出して下さい。

否応なしにサッカー好きにさせられる

福本 英子

その通りです。私などサッカーのルールを知っている訳でもないのに、新聞やテレビで大さわざしているのを見て、俄かファンと言ったところですよ。

ワールドカップでの成果はどうであったにしても、久し振りに日本中が炎上上がったのですから、好いことであったのに間違いありません。



西田柳宏子選

今治市 野村清美

いやな過去たち切るように髪カット

掛け軸の偽を夜店で買った悔い

つるバラの笑顔に手傷負わされる

さわやかに逢って別れたレモンティー

草むしり空を仰ぐと飛行雲

河内長野市 大西文次

長者番付一文なしの好奇心

待ちかねて直ぐ持て余す孫が来る

もう歯止め効かぬ米寿の下り坂

梅雨晴間出会う夫婦の車椅子

遺言状中にまさかの借用書

今治市 渡辺南奉

よく釣れた場所は誰にも教えない

中継があるからもえる巨人戦

背伸びしたくらしを叱る玉手箱

惨酷な音だと思おう卵割る

生きている証いびきがいとおしい

高槻市 江原秀夫

眉唾で敵の揉み手に乗ってみる

土壇場に味方は鬼の面で来る

七人の敵を味方にする余生

抓ったら痛いよまだまだ惚けてない

道楽を道連れ余生波に乗せ

尼崎市 田辺鹿太

安住の地は何処にあるはぐれ雲

寝て待ってみたが果報は来なかった

疑えば叱られそうな美人の湯

齒に衣を着せぬ男が孤立する

暗算で足る年金の使いみち

横浜市 川島良子

運命の出会いに今の君と僕

叱られてみんな大人になるのです

自由とはなんと欠伸のでもものよ

変わり者いいえアナタは個性的

一本の電話で足りる親孝行

大阪市 立 蔵 信 子

歳月をかけた夢だと自慢する
鉛筆を削ったままで朝になる
いつだってすぐに答えを聞きながら
気がつくとなあなたのくせをかぞえてる
冷めんの具の切り口で涼をよぶ

秋田県 湊 修 水

手に汗をにぎる茶の間のサポーター
年金にむなしだけの景気策
地ビールが生れ寒村走りだす
ささやかな平和だ過疎に住み慣れて
帰阪する企画に組んだ明石橋

堺市 矢 倉 五 月

酌をするママの指輪を誉めておく
ジジババの子守で覚えたヨッコラショ
陽当りの良い鉢花をたんとつけ
寂しい日元氣探しに行く書店
家族には言えぬ話を聞いてくれ

東大阪市 北 村 賢 子

白でした全ての物に感謝する
助手席で鳥居を見れば拜む妻
乳をやる母子に至福の時がある
くり返しました繰り返し娘の手紙
あたたかい言葉ここをつなぐ橋

今治市 越 智 青 園

初夏の風抱いて一輪咲く菖蒲
例え話チクリチクリと責めてくる
いたずらをしそうな顔でカラス寄る
無人売場 人を信じている野菜
山村留学 子が一まわりたのもしい

海南市 谷 口 義 男

生真面目に本音出すから敵出来る
息子より介護保険に期待する
味方だと心許したのが誤算
勇気ある発言すれば爪弾き
知らぬ間に妻のペースに乗って居る

和歌山市 上 地 忍

手の平を返して悔いを深くする
先にぼける損か得かと笑い合う
年毎にきついなと思う布団上げ
善し悪し姑と長屋の端と端
孫の計略終日乗った肩のこり

尼崎市 的 場 十 四 郎

二次会で馴染と合うて弾む酒
頂上で味わう母のにぎりめし
ふところに甘い話も詰めて逢う
酒のめる幸せがあり夕焼ける
それぞれの旅を写して夫婦老い

大阪市 一本勇太

瀬踏みする理性があつた急斜面

鍵穴の視野に広がる乱気流

過去洗い昨日忘れる髪を染め

罪一つ溶けぬ絵皿の底を這う

背で読ます意地と嫉妬の無言劇

富田林市 山原昭水

森林浴俄詩人になりました

隣カレー向かいすぎ焼うち茶漬け

河内弁伊勢の朝市値切つて

女優よりもっと美人の長女 二一女

孫二人トンボ博士に蝶博士

藤井寺市 太田扶美代

車椅子ちゃあんと笑顔添えて押す

百歳の笑顔はとても前向きだ

望みの高さへ椅子の調節繰り返し返す

痩せられぬ妻の料理は美味すぎる

賞めるのは下手 賞められるのは苦手

倉敷市・家守政子

こだわりに生きて燃えてる米作り

一男五女苦勞に耐えた母の皺

十人十色苦勞話に味がある

七人の一筋縄にゆかぬ孫

今日も無事ありがとさんと香を焚く

横浜市 田中笑子

手をひいてくれるが息がはずんでき

腹立てて一人芝居を演じてる

言い切った言葉に裏が秘めてある

大欠伸口ふさぐ手が遊んでた

爪に灯をともした金でフルムーン

大阪府 澤田和重

反省会 少し賑やかすぎないか

外堀を埋めて妥協を迫られる

年毎に妻が大きく見えてくる

不況風 開き直って生きている

子育ての膝は丈夫に出来ている

今治市 中村好恵

ほめ言葉お礼に笑顔さし上げる

若いつもりを血圧計に諫められ

石鎚の天狗が掃いたほうき雲

さわやかな風に心を解き放つ

ほめ言葉もらい素直な芽が育つ

東京都 井上つよし

半分コした肉饅が手に温い

梅雨寒に都合これあり義理を欠く

補聴器の侮り難きヒヤリング

終章を何故急ぐのか砂時計

ラップしたお菜と妻の置き紙

高知県 百田 幸

大阪狭山市 伊藤 尚子

謎とけて何か良いことあったよう
呑み代を忘れた頃に取りにくる
鈍感をモットーとして姑でいる
思いきり手足伸ばして仕舞風呂
旅三日もう古里を恋しがる

生駒市 川端 きぬ子

高知市 細木子 龍

バーゲンで隣のカゴと見比べる
逆様に立てた箒を孫見つけ
梅雨晴れ間歩け歩けと万歩計
傷ついた心を癒やす花鉢
まだ呆けぬ孫の晴れ着へ運ぶ針

西宮市 長谷川 淳

鳥取県 西垣 美知子

社説書く人大臣になって欲し
樹木たち私語交わしてる原始林
幻の影を慕うた若い夢
またしても手を当てる母心
表向きだけの紳士に騙される

富田林市 中井 アキ

大阪府 奥野 義夫

母を恋う十三回忌よもぎ餅
一筆箋 息子夫婦とつなぐ糸
窓際の席でうねりがよく見える
ときめきが次の駅まで歩かせる
三人の子に見舞われている安堵

泣き止んで少しおどけた孫のかお
母さんのやさしい顔につい甘え
神様を崇拜したり恨んだり
戒名を先に貰って未だ生きる
中年の胸の振子に時差があり

余命表僅かに拾う赤いシャツ
善人の顔が履いてる禿びた靴
脇役にするにはおしい古稀美人
楷書から路地の草書へ老いる愚痴
メーターも振り切れそうな土佐の夏

今治市 塩路 よしみ

鉛筆のメモへおやつを添えてママ

出欠を決める財布に問うてみる

ボランティアいい汗流すいい笑い

都市砂漠転んだ人へ振り向かず

伊丹市 榎谷 郁子

素顔には尊い人生刻んでる

嫁姑主婦の座越えてから平和

終業のベル一直線に主婦の顔

祖父から父へ夢はばたいた古机

福岡県 本田 忠男

無造作に挿した一輪にぎやかで

行く暇を惜しむ女の長電話

就職は自由退社のためにする

寝たきりに少し辛味の粥を炊く

羽曳野市 西村 りつえ

感動がもう湧かなくて乾く舌

風向きで時々きしむ祖母の部屋

苦手など素知らぬ顔で薔薇は咲き

頂上でどんと強なる風あたり

横浜市 山梨 雅子

サーピスというから座るマツサージ

花の名をきいて覚えてすぐ忘れ

百円屋こんなに見える物がある

母の日は期待があつて落着かぬ

京都府 前上 英一

棹をさす舟がこの頃重くなる

この町も時代の波に病んでいる

劳いの声が背を押す朝の靴

魂胆の見える誘いの下手なひと

羽曳野市 安芸田 泰子

虚飾だと鏡の中で見抜かれる

針千本飲んでも嘘をつきとおす

酒の味知って父子の距離縮め

子の茶髪へピクリと動く父の眉

唐津市 樋口 輝夫

修復の利かぬ夫婦の車間距離

ハンカチを振って送った無人駅

どよめきも昔語りの兜町

ふつくらと十九の胸が自己主張

和歌山市 木村 親路

まだ生きているのに墓を買わされる

美しく老いたく朝の水を飲む

定年後散歩のついでに駅による

死んだことないから死んだ気になれず

高槻市 執行 稲子

手招きに納得生き生き尻尾振る

オクタブ外れたうたでご愛嬌

取り敢えず追われて葉書出すことに

小銭ならポッケに豊かさ貯めてます

吹田市 西岡 豊

ネオン灯に若さを貰う花名刺
百薬の酒で達者な喜寿の艶

スリル追う若さ満々血が騒ぐ
大ジョッキごくぐんごくんと夏を飲む

娘達笑い転げる春の宵
大阪市 榎本 洋子

ためらいもなく焼芋屋呼び止める
謎を解く彼がいるから幸せだ

あの人にやさしくされてから自信
八尾市 與田 明

エレベーター赤の他人とふたりきり
メモ取って安堵そのメモ置き忘れ

ああ書けばよかったポストへ入れてから
添削の朱に猛然と湧くフアイト

事故多発地獄の鬼もびくついた
池田市 木村 一 笛

孫の夢祖母は黙って聞いてやる
定年後ハンドル捌き旨く行く

小ちやな児夢一杯のクレヨン画
島根県 菅田 かつ子

争った金魚か鱗が破れてる
蟻だとしてには休養したかろう

蝶を撮るその気でわたしも写してよ
少女A澄んだ瞳を信じよう

神戸市 船津 とみ子

てのひらのまん中にある母の海
心から下げる頭でありがとう

さみしさを忘れるあじさいが満開
新緑に吹かれて歩く友に会う

公約は四文字熟語だけでよい
めくるにも悲しい指の脂切れ
黒板の字には勿体ない上手さ
不器用に歩くカラスに油断する
尼崎市 軸丸 勝巳

構図だけ大胆に描くまだ喜寿だ
不惑の子無学の母に諭される

老い二人何も変わらぬ誕生日
人恋しカルチャーの輪に縋りつく
唐津市 井上 勝 視

見えっぱり鼻が伸びたり縮んだり
背伸びしてみても高嶺の花と知る

内心はおだやかじゃない笑い方
別れ上手な白いハンカチ振っている
和歌山市 森口 美羽

妻と二人平凡凡今日も晴れ
孫抱けば遠き日の母匂いくる

思い出が追い駆けてくる地蔵盆
想い出に耽るか金魚瞬かす
尼崎市 松下 比ろ志

情報待合室の週刊誌

頼りにはならぬ影だが連れて行く

喉元へ言いたい事が引掛り

引き返すことはプライド許さない

ごめんなさいうつかりしていた植木鉢

難病の夫に教わることも多し

今朝は雨半日ほどは眠りたい

神様を頼る心に鞭を打ち

台風を一步かわした空の旅

満足の汗が流れる負け試合

うちの子のフアイトは遊ぶ時に出る

家中をはらはらさせる試歩の杖

欲かけばきりが無いのに欲を出す

はしり梅雨着たり脱いだりまた着たり

一行にドラマを秘める尋ね人

テレビ欄見てから今日を考える

疲れても朝日が昇るはい上がる

出る事が続くしあわせ蝶と舞う

飽食になれて気ままなお弁当

絞るだけ絞って知恵が出てこない

島根県 武 島 ちよえ

島根県 松 本 聖 子

愛媛県 安 野 案 山 子

横浜市 金 森 徳 三

兵庫県 中 野 とよ子

国試受く孫に緑の応援歌

若い日へ戻れる友と長電話

車間距離とって家族の和をたもつ

ばあちゃんのこだわり一品膳に盛る

あたたかい心通わす橋かける

とげのある言葉が先に出てしまう

へそくりが笑うふところから逃げる

出来すぎた妻にかわいさちと足りぬ

老境は相身互いのクラス会

風貌の差が無くなつた老師弟

卒業のアルバム順にまた列ぶ

お開きは校歌合唱肩を組む

先ず笑顔朝の挨拶さわやかに

弱音吐く割に元気な足と腰

買物にリュックを担ぐ祖母元気

昼下がりに猫に欠伸を移される

借りに来て番茶の味をほめている

いたわってやろう鬼の背が丸い

激辛のカレーで飛ばす梅雨のうつ

見えすぎる眼鏡それから敵が増え

京都市 勝 山 美千代

八尾市 山 本 宏

泉佐野市 稲 葉 洋

高槻市 乙 倉 武 史

羽曳野市 芦 田 絢 子

京都府 高島啓子

病院に顔きく人に助けられ
孫を見る夫の顔の隙だらけ
赤ちゃんを抱くとマリアの顔になり
母さんの箸は量ったように分け

羽曳野市 森田 四三郎

窓際のシャボン玉より軽い首
几帳面過ぎて判らぬ探し物
良く喋る妻で夫の出番なし
茶髪娘の譲ってくれた温い席

横浜市 布山嘉信

甘え声出して捨て猫拾われる
清貧に生きて頑固な人にされ
徒食していても休日待っている
犬も耳立てて主人の立ち話

大阪府 米澤俣子

他人から見れば母娘の嫁姑
汗で得た金でないから浪費する
健康を過信していたつけが来る
もうあかん言われた二人元の鞆

徳島県 安宅 美代子

困ったら狸寝入りの父が好き
ほんとうの事が言えたらなと思つ
棲み慣れた猫が家主の貌をする
そんな事言うた言わぬの電話口

香川県 神保 坊太郎

途中下車出来ぬしくみの口車
人畜に無害で神のお気に召し
二合酒つけて留守番たのまれる
今度こそこんどこそはと矢を放つ

寝屋川市 井上 すみれ

裏話になって本音が笑わせる
単線の旅で大きな夢を画き
古時計いつも真面目で呆けてない
口裏を合わせと目では言うけれど

鳥取市 有沢 せつ子

くつろげば目まで優しい形する
末っ子の長男赤い服が好き
おいしいと二歳児だけがいつも言う
それぞれの持ち味生かし子が巢立つ

横浜市 近藤 道子

負けるなど私をふるい立てる朝
若さっていいな五感が磨かれる
山ゆりが咲いて友の忌巡り来る
定型が好き暮しではみ出せず

出雲市 川島 和歌子

気にかかる母の手紙の筆の跡
やせ薬女心をとりこにす
生まじめに生きて誤解をよく招く
薄化粧女心が今日もゆれ

和歌山市 上地 登美代

水田に蛙集まりよく喋る

ためらいもなく女が先に歩いている

価値観が違って夫婦もめている

ひとりっ娘が胸張って生む三人目

静岡市 増田 扶美

換気扇今日のメニューが駆けてくる

美しいバラはとげまで愛される

立ち始めた兎にもう靴を揃えてる

弱音吐く心叱って経を読む

岡山市 国米 きくゑ

待っているかたちに水を打ってある

つきあいが深くなるほど人間味

道草をしてきた父の人間味

誇る物ないが笑顔のある吾が家

羽曳野市 徳山 みつこ

どたんばに来て駆ける癖とれません

人間不信バラの蕾はまだかたい

荒波へすなおにのびた子を案じ

草むしりいい汗だった髪洗う

枚方市 二宮 紫鳳

色変えて咲くあじさいに惑わされ

美人ではないがにこにこ幸多し

にこにこが取柄で我が家に客多し

ストップの歯止めがきかぬ酒が好き

横浜市 秋元 和可

聞きとれぬ祝辞へ隅の私語続く

たまに着る和服で女とりもどす

留袖を仕舞えずにいるはしり梅雨

雨音が二度寝をさせる子守唄

今治市 村上 久美子

職退いて夢も小ぶりの旅かばん

神さまへ出世払いの願かける

片減りの踵子供も孫も真似

血みどろになっても猫の恋一途

日立市 加藤 権悟

濁流は森の怨念かも知れぬ

一番星になれよと父の肩車

八月のドームに蟬の鎮魂歌

あたたかいはなしにもどるワンカップ

横浜市 保田 絹子

天気予報裏切られてもまた頼り

カレンターに妻の予定が多過ぎる

手ほどきの誠意初心をかきたてる

臆病炎言い訳にして筆不精

藤井寺市 岸本 寿代

山積みの古本大事私より

もう一度恋してみたいと笑われる

年いってあのそのあれでわかる友

偉そうに文句言えるは夫だけ

和歌山市 吉村 さち子

深い山の靈気に神と会う予感

大阪市 平井 露 芳

一期一会牛馬童子のユーモラス（熊野古道）
安らぎは厨に湯気がのぼる刻

八尾市 平川 幸枝

病院の迷路に慣れて退院す

ババママのうらもおもても子が見抜く

略式のふくさで暮らすうらおもて

岸和田市 亀井 皎月

志野 萩と備前 信楽みんな好き

年金はいばれぬ額で高値とか

しあわせが逃げた余生を奮進中

米子市 小塩 智加恵

旅記念 箸紙にある郷土唄

枝先も神経ビリりさつき鉢

職業はキッチン勤め主婦と書く

寝屋川市 瀧本 八十八

子になう笈摺担い父子遍路

ギャル御輿担いて祓う不況風

大胆な麻酔手術の黎明期

兵庫県 仲井 素水

欲背負い歩ける老いの健やかさ

命ある限り未熟のままで老い

日課のよう隣の三毛が覗きに来

昭和一粒勿体なくも食べ残し
あれも良いこれもきれいと菖蒲園
銭取って花を見せてる休耕田

尼崎市 森安 夢之助

草むしる老母の皺に汗光る

不器用に生きて五人の子を育て

自由になつた男は昼寝ばかりする

河内長野市 妹背 尽呂久

考課表職場の花に匙加減

若者のルール知らずに唾われる

口喧嘩なら母ちゃんの方が上

富田林市 大橋 鐘造

のし付けてどなたにあげよ影法師

裏話聞きたい酒を注ぎにくる

シナリオがこなし切れない余命表

羽曳野市 山本 たけし

ガラス器が重んじられたわらび餅

整理した途端始まる探し物

夾竹桃折鶴舞うて原爆忌

堺市 梶本 哲平

お人好し日本いつまでもつものやら

デモクラシー住民エゴに地域エゴ

ほどほどの寒暖四季に風情あり

新緑の町はずかに鳥歌う
窓外の空暮れ初めて蛙鳴く
天井とベッドの間に居るくらし

八尾市 鷺 見 章

土の色しつかり見ている再生紙
蛇口から朝のリズムが弾け出る
いつてらっしやいさわやかな声弾む妻

伊丹市 延寿庵 野 鶴

課長課長と昔の部下が呼んでくれ
石ひとつ動かしがたい意思を持つ
切れ味はすこうし鈍い方がいい

愛媛県 中 居 善 信

鶯の声が小さくなって梅雨
雀の子チュンチュン巣立つ日間近なり
結局は生老病死の四苦に尽き

鳥取市 近 藤 秋 星

出会いから今もドラマは続いている
いい出会い一つ土産に旅終る
生きがいと思う手ごろな畑がある

兵庫県 円 増 純 子

人生の実りの時期は短過ぎ
かさこそと身辺整理をしています
エルニーニョ観音竹に花が咲く

八尾市 井 尻 民 子

ヒゲ剃りの元気な音に起こされる
大阪の活気グリコのネオン塔
実績だなんて始末の悪い過去

八王子市 播 本 充 子

家を持つ夢遠くする子の学資
他人の子も我が子も叱る子供好き
濡れ衣を着て悪役に徹し切る

尼崎市 清 水 久 美 子

菜園を賞めて今夜の胡瓜もみ
何となくどちらともなくする和解
色恋もなかった妻ともちがよい

兵庫県 植 村 雄 太 郎

紫陽花は虹にもらった彩で咲く
あの頃の田植は四度めしを食べ
ネクタイの要らぬ職場で肥えてくる

東大阪市 今 岡 貞 人

すぐノーと言えずチャンスものがし去る
うぐいすの声に素直にさせられる
もらい泣き君のこころが入りこむ

(前月分) 鳥取市 夏 日 健 一

万歩計季節の花に迎えられ
尾を振って咬みつく牙を研ぎ続け
大荒れの引金になる隙間風

鳴門市 八 木 芳 水

吹田市 三浦 憩

平穩に暮らして邪魔な六法書

悪女にはなりたくないと未だ独り

疲れなど癒してくれぬ昼の月

大阪市 星野 ひさ

一日のスタートきれいにパン焼ける

貯めて買うつもり貯まれば惜しくなり

瀬戸内の魚あれから不眠症

岸和田市 井伊 東吉

買うまいと決めてまた買う宝くじ

核実験しない勇氣を持ってないか

文明の見直し迫るダイオキシソ

綾部市 藤田 芳郎

寝た振りをしていて浅い傷ですみ

ご好意が虫歯へ沁みるかき氷

何着ても似合うと古着戴いて

出雲市 名原 純子

睦みあい二匹のホタル灯を消した

眼鏡拭く今日の辛さも拭きとって

遠近の眼鏡に慣れて老いに入る

大阪市 尾崎 黄紅

ふるさとにくるふるさとに家がなし

鬼の描く自画像菩薩さまに似て

打ち水のごめんさいを掛けられる

大阪市 榎本 日出子

ゴキブリを逃したその日うつになる

私語止めて紳士淑女の顔をする

後ろにも目がありそうな母の勘

鳥取市 富山 雄幸

A4のコピーに余る愚痴を書く

生きざまをコピーに撮って二人老い

まだ弾む夢があるから汗を掻く

唐津市 宗弘

次世紀は独居老人キレるかも

名作の出鼻をくじく妻の愚痴

井の中は井の中なりの顕示欲

岡山市 清水 金太郎

当選が決まれば順位に不足あり

助手席の妻に運転指図され

買うほうが安い野菜の種をまく

沖繩県 杉谷 カズエ

神棚のほこりを詫びるなまけもの

退院をしたと安心嫁のこと

庖丁が抜き身に見えてすぐ隠す

和歌山県 坂東 和代

老いるとはプライド少しずつ剥がれ

感動にゆるくなつて涙つぽ

心配りの過ぎる夫で肩がこる

岡山県 土居 ひでの
雨漏りを必死で受けるナベヤカン
半分は妻に残して来たお膳

手さぐりで来た道だから騙されぬ
横浜市 岡田 芳江

湯船から川柳ブツブツ溢れだす
病気の予定はないがガン保険

突然のお別れポツカリ穴があく
横浜市 生坂 サト子

少子化で孫が産院一人じめ
決心がつくまでテープエンドレス

幅広の靴がすっかり身に馴染み
静岡市 中西 雅

あれも効くこれもいいよと試し飲み
亡き夫の答がほしいおりんの音

テレビドラマ見たい時間の長電話
益田市 岡田 たけを

生き恥を晒さぬように竹を踏む
躓いてどんだ底舐めて這いあがる

あと四年妻と頑張る箸をもつ
尼崎市 内田 美也子

回転椅子孫の笑顔が回ってる
大空へ児をさし上げる肩車

パパ起こす時計代りの子沢山

横浜市 三村 八重子
背のびして小さな花も陽を浴びる
鼻唄でゴルフの朝は雨戸繰る

わからない帰宅時間を今朝もきく
和歌山県 和田 美寿子

結び目に神の情けが置いてある
遠花火夫婦で別のこと思う

平凡が幸せと知る握りめし
横浜市 長島 亜希子

経済の活性願い無駄遣い
電子音一日わたしを指図する

夜なべして縫った服だが着てくれぬ
島根県 福岡 博利

マイナスもあつてあの人好まれる
この頃の子等の表情偉くみえ

道々を案内役のホーホケキョ
横浜市 伊藤 ふみ

カサブランカ十個の蕾夢がある
梅雨空のあじさい喜々と咲いている

地鎮祭終つて鳥二羽遊ぶ
兵庫県 安達 厚

人間のおごりが地球破滅する
腹八分不足の二分が追ってくる

快適な目覚めがうれし古稀の坂

河内長野市 木太久 正 一

温もりの残る握手をして別れ
自分史に自慢の汗も少し載せ
畑との別れ玉葱とり終えて

和歌山市 武本 碧

秘密などなくて小川が澄んでくる
病む母へやさしい嘘もまぜておく
こだわりの木綿豆腐にある誇り

貝塚市 吉道 時子

地位よりも細く長くを望む妻
ダイエット三ヶ月先期待する
結婚はビビッと来て決めました

東京都 清原 悦子

転勤が家族の絆強くさせ
覚悟して聞いてよかった胸の内
Gパンをはいて若さを保つてる

横浜市 鈴江 純子

無事故の日ボードのゼロが光ってる
握手して孫の元気をもらい受け
危機越えたベッドに朝の陽がまぶし

横浜市 荒井 広和

認識の甘さを悔いる結跣蹴坐
自分史を埋める虚栄の美辞麗句
忙しいから遊ぶのが面白い

年金で少しは俺の有難味

新潟県 高野 不二

満期金貰うて得をしたつもり
売り込みに離婚も利用するつもり

大阪市 三浦 千津子

萬は伸び一つの罪をひた隠す
年の功踏み台ほどの役どころ
葱坊主ずらり見事な勝ち名ものり

静岡市 大村 正雄

人混みに祭の音を聞きに行く
団扇風日本のよさが吹いてくる
子を叱る声にぎやかに夏休み

出雲市 加藤 スズコ

絵手紙が離れ住む子と結ぶ糸
近況に葉無縁と書く便り
五月晴れガラスの皿に盛る豆腐

兵庫県 谷田 多美子

手術台どうか神様仏様
生真面目とユーモアと住む一つ屋根
売り切れと聞いたとたんにはしくなり

尼崎市 河津 正治

二次会で本音引き出す策を練る
フォーマルに真珠が似合い喪を飾る
明日一日どんなに咲こう花の苗

尼崎市 野瀬昌子
発車オーライだった一人の客乗せて

相談があると二次会誘われる

握りめしなら食べたいと風邪の床

兵庫県 北川とみ子

自分史がやたら揺れてる水子塚

回り道ばかり歩いた愚痴ひとつ

百度石神の目覚めを祈りつつ

高知県 桑名孝雄

血だろっかりズムに乗れぬフラダンス

子も孫も俺を越えるは楽だろっ

泣き虫の孫の主張に味方する

鳥取県 橋谷静江

何時までも他人行儀で仲が良い

脱ぎ捨てた靴で機嫌がわかる妻

メンバーを外れ悔しさをバネにする

箕面市 出口セツ子

傷癒やす優しい芝居するナース

疑いを知らぬ向日葵天に伸び

ストレスは溜めぬよく食べよく喋る

八尾市 高橋明子

大学を出ても会社の雑用人

捨て捨てと言って去年の靴恋しい

他人には元氣に見えて悩む足

鳥取市 福島庸二
砂の紋そつとこのまま残したい

手も口も動くうちは老化せず

飽きさせない雲の変化に時忘れ

和歌山市 松本良

補聴器もやっぱり好きな銭の音

理路整然そうは世の中甘くない

汗かかぬ一日めしがうまくない

尾張旭市 三浦きぬ

消費奨励そつぽを向いて生きてます

襪履ですがお気に入りですこのバッグ

死にたいと言うがたっぷり食べている

川崎市 和泉見早子

ほどほどの幸へ浸しておく素足

決心を促されてる雨宿り

幸せに見せるポーズになれている

和歌山市 福重美子

祝電が以下同文の仲間入り

遠い耳答えにならぬ笑顔みる

目計りが経験積んだ母の勘

八尾市 田中トシエ

息ぬきに来た娘が庭の草をぬき

激安と閉店競う繁華街

田植歌知らず田植機使う嫁

大阪市 中澤孝子
謎なぞのように人の名出てこない
三歳の孫百円をうれしがり

いつ見ても並んでるから買うてみる

和泉市 横山捷也

父逝きて時のたつのが遅過ぎる

年金で余生過ごせた父の幸

昇進の祝いねたみも注いでいる

鳥取市 夏目健一

コップ酒のんでも悩み出てゆかぬ

戦場に赤い夕陽がよく似合う

恥掻けば掻くほど人はずるくなる

鳥取市 谷岡清子

懸命に流した汗は宝なり

横断に性分見てる信号機

紫陽花に今朝は派手ねとほめてやる

和歌山県 村中悦男

ニュータウンここに子供の声がする

うなずけば相手気おってほらを吹き

茶髪の子土方する眼はまよわない

八王子市 井上京一郎

冷やかしのつもりがしゃがみ込む露店

あの頃は良かった過去にまだ緋り

入居者がない公団の草いきれ

大阪市 中井正秀
再婚を祝ってくれる友がいる
そう言えばオフクロの味忘れたな

ボランティア出来る幸せ噛みしめる

倉吉市 大下智子

酸性雨怖い地球に住んでいる

独自性主張したがる反抗期

リハビリの一步に自信ついてきた

高槻市 左右田泰雄

たてつけの悪い雨戸に起こされる

何取りに来たのだろうと立ちつくす

初蟬がつゆの晴れ間にリハーサル

尼崎市 尾宮弘治

思い切り喧嘩の出来た母を看る

お茶よりもコーヒーが好き老庭師

浪曲の仁義が子等に通じない

兵庫県 徳平毬子

争いも微笑みかえす嫁に負け

衣替えクシャミしながら夏衣装

今宵またこりずにウォーク梅雨の道

島根県 槻谷仲子

夫の留守友と二人でモーニング

盗まれて未練が残る傘置場

そよ風に笑われている万歩計

兵庫県 高見末野
手古摺った子が母の日を忘れない
愚痴っても肩に蝶々が来て止まる

豊中市 岸田知香子
雨の日に閉じ込められた老いの足
ダイレクトメール金融ノーサンキュー

札幌市 三浦強一
枝豆とビール私に夏が来る
ハンドルに遊びなかった突然死

樺原市 西本保夫
不思議にも午前4時には目がさめる
盗作の作家私は許さない

千葉県 大川晚翠
技術を武器に歯車噛み合わせぬ
あじさいのひと雨ごとに欲が出る

東大阪府 松山隆
また一人星座にのぼる胸騒ぎ
一代に見返りこない杉の苗

和歌山県 中後清史
石橋を叩く男でおもろない
無理もないことやな妻のストライキ

横浜府 北沢街湖
高い所上ると痒い足の裏
ほろ酔いの機嫌夫にオーイお茶

滋賀県 中宗明
外泊の我が家の敷居高く見え
惜しまれるうちに身を引く果報者

豊中市 みきわきみ
阪神が勝っても負けてももう一本
友が逝くああ友が逝く戦友会

熊本県 増田一乗
役終えた里道宅地で蘇る
デーケア参加するたび若返る

今治市 渡邊伊津志
耐えてこそ君の心が理解出来
波蹴って男の唄が散ってゆく

河内長野市 印藤智子
長雨に明るい色の服を着る
あじさいのブルーにすっぽり染まりたい

鳥取県 高尾京
いやされて援け合う日を繰返す
名選手育てた人は語られず

枚方市 大昇隆広
隣の核世界の声は防げない
熊野古道今は峠に塾への子

米子市 猪森スミエ
おばあちゃん遊び疲れた日除け帽
半分は親に縫って組むローン

東京部 吉田土風
テープ切る味も知らずに老いていく
他の人に見えぬところを知っている

出雲市 榎ミツエ

初夏の川さざ波光って踊っている
ピイピイとどこでなくのか五月晴

泉佐野市 大工静子

かる鴨の横断見兼ね誘導す
末っ娘は泳ぎ上手で口かるく

横浜市 山下省子

楽になるごめんなさいが何故言えぬ
冷や汗を布団もかいた恐い夢

鳥取県 加藤公子

電線に我が家の子つばめ勢揃い
赤ちゃんに笑顔もらった待ち合い所

北九州市 岡田幸生

人は皆いい思い出を抱いて老い
乾盃のあとのジョッキがよく喋る

横浜市 福田由美子

もちよりのおはこレシビの花が咲き
子の夢と親の期待はすれ違う

唐津市 岩崎實

走らねばならぬバトンを渡さねば
限られた縁の中の仲違い

雑巾が乾いたままの農繁期

よろこびも躓きもある老いの朝

兵庫県 西山八重子

暇がないことが自慢の信号機
貼り紙の小売りしないが客を寄せ

島根県 藤山弘子

木陰からそっと見守る父の愛
野菜苗一から始めいとおしむ

横浜市 豊田羊子

べランダに実が待たれる茄子の花
越して来た家に驚聞かれない

鳥取県 山本益子

ほろ酔いは女の口を軽くする
失敗を背負う私は貝になる

大阪市 鈴木トヨ子

夫逝く遠い彼方で妻守る
黒部ダム喜怒哀楽を抱いた顔

鳥取市 宮脇道子

サッカーが核問題を蹴りとばし
老いの坂軽くて重い夢もある

香川県 向山治延

家の味教えて娘嫁に出し
欠点をおぎない合って五十年

愛媛県 黒田茂代
農政の不備熟れた麦腐らせる
海藻の森を揺らして潮の詩

横浜市 小野句多留

酒の味妻の機嫌が左右する
愚痴ひとつ聞かぬ日はなし朝の膳

羽曳野市 川口信子

年重ねふえる口数減る動き
剛情で死神からも見はなされ

和歌山市 岡本八重子

ツバメの子巢から落ちぬか気にかかり
アジサイの彩に目覚める朝の風

愛媛県 宮本末子

神の手が届いて効いてきた薬
花南瓜此の家に戻る人もなく

兵庫県 北野哲男

願いごとある時だけの神仏
店先に八卦見のいるパチンコ屋

姫路市・服部一典

携帯電話夫の首へ枷を填め
持ち唄は三つ程でよい呑み仲間

鳥取県 平井栄翁

明日の米無くて困った夜もあつた
不貞くされ無言で御飯食べている

米子市 池尾保子
父の声やさしいうちに謝まろう
教科書よりもなぞなぞの本読んでる児

香川県 松村輝夫

難問を明治の知恵が和ませる
暗闇に億光年の星を見る

大阪市 小泉久子

裏道も紅い花咲く季節あり
思ひ切り泣いたら見えて来た明日

河内長野市 水谷正子

万緑の中の孤独に神といふ
渦巻の蚊取線香に亡母がいる

松江市 松浦登志子

神経痛生きてる証拠あきらめる
焼き茄子に生姜を添えて夏は来ぬ

堺市 見本ちや子

雨垂れに生演奏のリズム聞く
風に誘われふらりと降りた学文路駅

水煙抄ご投句頂いた皆様へ

永い間、御支援頂き有難うございました。今月を以て
選者交替になりましたが、引続き御投句をお願いしま
す。本当に有難うございました。

西田柳宏子

麻生路郎の作品とその周辺

大空の、、、ろ

(91)

橘 高 薫 風

昭和十年十二月号の路郎先生の雑誌に

小町静太七つの鐘が七つ鳴り (悼)

というのが目に止まった。また平井春光の筆で「静太の死」の悼文が掲載されている。

「ひるすぎ、与三郎が「兄さん、けさの静太の記事見たか。あの片山津の心中事件だよ」

えっ、あの記事が」と唾をこくり、今更見直す彼の驚くべき思い切った死の場面、あの

静太が、とも思い、静太だから、とも思いつ

つ熱くなつた僕の臉の裏には、つい五日前の彼の姿が目にもちらつくのだ。」というのに続き、その春に結婚した春光氏へ

ふたりわらって ふたりの家です

という祝吟をくれたこと、十年もの結核での療養後施療患者であつた刀根山病院を退院し、

約一ヶ月間四国巡礼の旅にいたこと、帰阪し十一月八日の道頓堀支部句会へ馳せつけ、七

句入選、その夜日本橋の袂で別れたことなどを述べ、三日後に

「いで湯の宿の白い障子が斜陽に染まる空気の中で、ひとりの少女を道連れに赤い血を

流して冷たくなってしまった。

僕等の本棚へ静太句集を遺して置いて置いて昭和の柳界へ鮮やかな銀線を長く引いて——と結んでいる。

私自身、『川柳雑誌』を毎月号調べていて

各地柳壇欄に掲載の川柳雑誌蛸ヶ池支部句会

の石森静太の句の、独自の彩に注目していたのであるが、そいうえば五月号の同欄の兼題

「川」平井与三郎選、席題「雲」縷紅選に

申譯御座無候川に浮き

片恋のバットを川へすてるなり

雲の峰きれいに目高のぼつて来

などの句が入選し、半年後の成行きを思えば

すこぶる暗示に富む。

胸の病に苦しんだ末、二十七年の短い生涯

を閉じた柳人は次のような遺書を残した。

「自決します。病を恐れてではなく、恋のためでもなく、汗を流して働ける体に生れ更

つて来ると確信ちやうどしています。冷静です……」

死の前の一ヶ月ほどの四国巡礼記は、当時の自由律川柳雑誌「視野」の編集発行人枝松

規堂に宛てたもので、次はその大略である。

生きて帰つた私は冷たい雨に打たれた旅のことを、こころのさまよひであつたことを、一度柳界からさよならした今、書けることで

もないのに自分を嗤いながら、ペンをとりませう。

・波こえてゆく波ばかり寂しいぞ

というところから始まる。胸を病み、あきらめた生活の死にもせで、一人の人間を忘れるため、否、その人間を通じて感じる絶望的な社会へのあきらめのために

・せりりゆうをやめてあなたをわすれるのと四国巡礼の旅に出る。

二十七回の誕生日の大阪天保山は、朝からの雨の中、見送る老いたる父母、ある少女たちへ港の灯は美しく五色のテープと見まがう

ばかり、生まれかわろうとした静太だった。暗い激しい雨の音の船中でのもたえ、

・別れた母おもい鳴戸すぐる

四国への上陸も雨の中、第一番札所への四里もすぶ濡れで、規堂氏からの情けの地図を胸にぶら下げ、水害で橋の流れた川を膝まで

没して、杖を頼りに二度まで渡る。

・水害のはげしい村のわたしは

りんりん歩いてゆく

雨中、胃をいたため吐き、一日十里、水を呑んでも吐く旅がつづく。(以下次号)

沙湖抄

八木千代選

二の矢にはおそらく托さない心
 ルビ打っておかねば私消えそうな
 押し入れをくまなく捜す物思い
 普通に暮らしていた変わった夫婦
 沈んだら竜宮城を尋ねよう
 住所不定梅雨とはそんなものですよ
 さくらんぼ定まって思う景がある
 私がわたしでおれる家の中
 沈着冷静そうです何もしていいない
 怖い言葉を酒に言わせていいものか
 笑ってくれませんか私の駄洒落
 躓いたあれは石ころにはあらず
 いつもならもう帰る頃 坂の上
 古いころポキンと折って屑籠へ
 ひまわりのうしろの悪を見てしまふ
 履き慣れた下駄が揃えてある不気味
 謎々の中で酸素を吸っている
 野良猫のダッシュ明後日まで駆ける
 どの道を歩くにしても杖がいる
 ぶらんこを大きく振っている嫉妬

和歌山市 牛尾 緑良
 岡山県 矢内寿恵子
 唐津市 久保 正劍
 松原市 小池しげお
 同
 東京都 佐藤 季穎
 西宮市 牧渕富喜子
 藤井寺市 高田美代子
 海南市 三宅 保州
 米子市 政岡日枝子
 藤井寺市 太田扶美代
 寝屋川市 森 茜
 和歌山市 古久保和子
 鳥取県 新家 完司
 八尾市 高橋 夕花
 倉吉市 淡路ゆり子
 倉吉市 野口 節子
 大宮市 新井 朋子
 米子市 青戸 田鶴
 茨木市 藤井 正雄

ウエストを締めも緩めもせず生きる
 濁点を付けると深い意味になる
 修飾語忘れて梅雨が肌寒い
 捲つてもめくつても土が見えない
 苦しみの果てなら弥陀の手がすくう
 鶴を折る指はまだまだ確かです
 低音のガラスがどうもボスらしい
 あの人のはあの曲がり角で振り返る
 静かな人はしずかに善を積みんさる
 噴水の向こうやっぱり未知の国
 奥さまよろしく妻にはつたわらぬ
 川の流れに逆らう杭を打っておく
 餌くれる人にはお手をしておこう
 反れるだけ反つては薔薇の散りにけり
 這うものを嫌う人間達のエゴ
 身のうちに絹糸ほどの意地捨てず
 ゆく先の闇の向こうが覗きたい
 恥ずかしいものを流行着せたがる
 薔薇の花 切るには傷が深すぎる
 あれもしたこれもしたけどみんな無駄
 もう何があつても不思議ではないぞ
 白は白で汚したくない事もある
 シクラメンやつと休職願ひ出す
 排水のパイプに用済みの男
 茶柱に何を興奮老いひとり
 照明を外し私の色で生き

和歌山市 木本 朱夏
 和歌山市 堀畑 靖子
 吹田市 山本希久子
 和歌山市 野々 圭子
 岡山県 小林 妻子
 出雲市 園山多賀子
 高槻市 左右田泰雄
 枚方市 森本 節子
 鳥取県 土橋はるお
 大阪市 町田 達子
 八尾市 高杉 千歩
 愛媛県 中居 善信
 和歌山市 川上 大輪
 和歌山市 福井 桂香
 米子市 中井 ゆき
 和泉市 中川 楓
 唐津市 井上 勝視
 横浜市 菱田 満秋
 松江市 川本 畔
 島根県 松本 文子
 豊中市 田中 正坊
 米子市 白根 ふみ
 鳥取市 美田 旋風
 和歌山市 川上 富湖
 八尾市 宮崎シマ子
 和歌山市 榎原 公子

霧の海 過疎は眠ったまま夜明け

空気澄むそんな国にもある戦

絶対に嘘は言わぬと嘘を言う

その角を曲がれば風の通る道

詩かぬ種生えて花まで咲いてくれ

もう誰も叱ってくれぬ酒の量

うっかりとしてはおれないパスが出る

踏まれても悲しい花で終らない

あのねあのねが言いたくなつて電話する

傷口をそつと隠している若葉

自惚れて丸書く稽古忘れそう

どれほどの企業秘密か厚化粧

料理などしない熟女の言い放題

イエスマンばかりは居ない花の園

鉛筆転げうたた寝から醒める

カゴメの輪かしい仲間出ていった

老人が中座してから死の話題

心機一転これから解脱するトンボ

意識して罪に時効はないと知る

短期で瘦せる誘いに乗ったのはわたし

もうひとつ揃わぬものがあつてよし

野の花を花瓶に挿すと背伸びする

久しぶりに寿司でも握る気のたすき

足腰を庇いばちばち遊ぶ

妻の吹く笛は魔法に違いない

陽炎となつて炎天下を泳ぐ

出雲市 竹治ちかし

米子市 林 瑞枝

鳥取県 鈴木 公弘

羽曳野市 田中 透太

米子市 木村富美子

富田林市 藤田 泰子

八尾市 村上 剛治

米子市 茂理 高代

鳥取県 田村きみ子

弘前市 斉藤 荔

米子市 野坂 なみ

唐津市 仁部 四郎

寝屋川市 岸野あやめ

西宮市 奥田みつ子

寝屋川市 江口 度

鳥取県 小西 雄々

守口市 森川まさお

鳥取県 乾 隆風

和歌山市 桜井 千秀

和歌山市 福本 英子

西宮市 西口いわゑ

尼崎市 春城武庫坊

倉敷市 井上 富子

米子市 鷺見 正子

綾部市 藤田 芳郎

羽曳野市 徳山みつこ

卵ゴロゴロおんどりはどこにいるだろ

爪立ちで見えない明日へ又どうぞ

心理テスト何が基準か訊ねたい

人間が好きでときどき勇み足

露草のよろこび夜明けのひとつとき

好敵手腹拵えをして待とう

賞味期限 奢つた口がなお奢る

猫と僕 大事な方は決まつてる

只という言葉の催眠にかかる

三面鏡にやさしい面を吊つておく

鍵のない母の部屋から花におう

内緒ごとにかく犬に喋つとく

母上様 箱の底から古手紙

故郷が近くになると仮面とる

泥舟に気がついたのは川の中程

告白をしよう砂が落ち切らないうちに

したたかな記憶に過去があばかれる

たのしげな風だ私も踊りましょ

平行線だから言いたいことを言う

ストレスを花の世界においてくる

一分を争う駅の呼吸音

投げつけた礫したたか跳ね返る

満点の人に謀反を抱いている

酒煙草止めずに逝けば国のため

想い出の箱は独りのとき開ける

梅雨しとど人の命をおもうなり

堺市 志田 千代

弘前市 佐治千加子

和歌山市 楠見 章子

枚方市 前 たもつ

米子市 光井 玲子

倉敷市 田辺 炎六

砂川市 大橋 政良

横浜市 川島 良子

八尾市 村上ミツ子

西宮市 門谷たず子

岡山県 山本 玉恵

大阪市 神夏磯典子

寝屋川市 井上すみれ

今治市 月原 宵明

川崎市 和泉見早子

和歌山市 武本 碧

横浜市 保田 絹子

富田林市 中井 アキ

尼崎市 長浜 澄子

米子市 澤田 千春

大山市 早川 盛夫

京都市 高村吉之助

和歌山市 宮口 克子

姫路市 服部 一典

鳥取市 植田 一京

尼崎市 春城 年代

これからを決めかねている村茶碗
鉄砲ユリつきぬ想いや秋女の忌
そのままの景色私を迎え入れ
手にすれば如何にも頼りない自由
臘月 舌乾くまで語りたし
くれないの紅をひいてもひとりなり
大過なく一日終えた夏椿
限られた自由に光る青葉風
懸命に泳いで岸がまだ見えぬ
どの窓も夢見てるらし夜光虫
身の上相談に比べる幸せ
本筋はとびつきの色で描きたい
失ったものを労わる影法師
原色を塗ってメリハリつけてみる
純白の紙で折られた騙し舟
青空になりきるドブのいじらしさ
一枚の紙でも手応えのあるナイフ
まだ測に握まっている助け舟
鍵穴の向こうは見えないことにする
その気持変えて見せよう青い海
紫陽花が包む仏舎利殿の苑
賽銭の音も神様ご存じで
墓だけの里遠くなる遠くなる
胸借りて泣けたらいいナ仁王さま
バラ一輪庭をグレードアップする
雑草と言われた昔なつかしい

羽曳野市	吉川	寿美
鳥取県	さえきやえ	
八尾市	井尻	民子
八王子市	播本	充子
今治市	渡邊伊津志	
八尾市	大内	朝子
横浜市	三村八重子	
貝塚市	池田寿美子	
和歌山県	坂東	和代
枚方市	濱田	良知
横浜市	長島亜希子	
伊丹市	樫谷	郁子
日立市	加藤	権悟
鳥取県	石谷美恵子	
今治市	矢野	佳雲
鳥取市	石上	悦子
京都市	都倉	求芽
倉敷市	小野	克枝
和歌山市	吉村さち子	
大阪市	藤田頂留子	
唐津市	田口	虹汀
京都市	松川	杜的
吹田市	西岡	豊
今治市	村上久美子	
鳥取県	谷口	次男
奈良県	鍛原	千里

舐んだ地球儀を縫う針がない
お節介便意のようなものですね
怒り湧くときには刃物遠ざける
せつかに生きて絡まる蜘蛛の糸
恩返しにの鶴は理想のファンタジー
らつきよの白さに手間を忘れてる
お独りでですか実は私も独り者
極楽に行くにはお布施足りません
貧しくて袋をかぶり逃げてゆく
思いっきり舞うて鬼らを眠らせる
便利さに慣れた手足が動かない
キッチンにないもの欲しい梅雨さなか
老人もキレイくなるよ淋しいよ
たった一人の味方の妻がサボタージュ
ブライドがあつて古稀まで生きられた

横浜市	近藤	道子
鳥取県	林	露枝
鳥取県	西原	艶子
和歌山市	山根めぐみ	
寝屋川市	瀧本八十八	
寝屋川市	籠島	恵子
黒石市	相馬	一花
美禰市	安平次弘道	
鳥取県	橋本多哥由	
岡山県	福原	悦子
横浜市	清水	潮華
守口市	結城	君子
唐津市	宗	弘
高槻市	江原	秀夫
滋賀県	中	宗明

牛尾緑良さんのおそらくは背水の陣でしょうか。静かな方で
すから言葉を大切に穏やかに仕立てられています。此の一の
矢にこめられた誇りの美しさ、滅びも辞さないという覚悟で弓
につがえられた一筋は、人の心の奥にまで届きます。矢内寿恵
子さんのルビは巧く使っておりです。私というものを見失わぬ
ように、周囲にも解って欲しく邪魔にはならぬ程度のルビを打
っている、そのルビこそ川柳だと思わせて下さいました。久保
正剣さんの押し入れに惹かれます。普段は暗くて人の眼に触れ
ない場所ですが、仕切った部屋とは続きながらの愉しい空間で
もあります。正剣さんの押し入れにはきつと心の昔がしまつて
あるような。くまなくて、もどかしさが伝わります。

秀句鑑賞

— 7月号から

三宅保州

多くの玉句の中から私なりに、訴えのある句、作者の存在感のあると思う句を中心に、発想・表現・リズムという川柳の基本にも心掛けて選び鑑賞させていただきました。

汗知らぬ金で一生棒に振る

大西文次

うまい飯食いたくて汗かきに行く

松本良

晴耕雨読そんなに甘い農はない

桑名孝雄

矢面に立つ気でバンドぎゅつと締め

荒井広和

何事にも、真面目に真剣に取り組まなければならぬという諫めと穿ちの効いた四句

丸くなるそれはわたしでない証拠

立蔵信子

丸くならなければという意味の句が多い中、この開き直りともとれる人生観に拍手！

美人ではないから笑うことにする

川島良子

ありふれた顔で良妻賢母です

田中トシエ

ダイナミッシュちよつと高めのヒールはき

清原悦子

冷たい美人よりも笑顔良し、ありふれた顔大いに結構です。そして、たまにはブランド・ファッションで息抜き、人生楽しからずや！

ウーロン茶も君と飲んだら恋の味

山原昭水

幸せにするよと軽く言ひすぎた

中後清史

恋の味は何もカルピスだけでない。問題はそこに愛が存在すれば、あばたもえくぼなり。そして男は「君をしあわせにするよ」と口走ります。そのときはほんとうにそう思ったのですから、許してあげて下さい。

有難うと言える子供を育てたい

木村親路

駄目ですよ一度許せば癖になる

西岡豊

偏差値重視の教育の弊害とか、親が嫉をしないからとか、少年問題や子供のマナー論がかまびすしいが、この両句のような考え方で育てれば、大人も子どもも良くなるのでは。

頼まれもしないフানের嘆き節

乙倉武史

ワールドカップの切符も入手できないのにフランスまで応援に行ったサポーター。今年もまた優勝できそうにないタイガースの何年来的のファン。損得抜きで打ち込めるしあわせ誕生日メガネ屋だけが知っている。

不意打ちのブザー居留を思いつき

高橋明子

降りそうな仕草の人の前に立つ

越智青園

誕生祝に、会員になった店から割引券を送ってくる。相手が不意打ちなら居留守で対抗する。経験と勘で降りそうな人がわかる。三句とも微笑を誘われる軽味と見つけの良さ。

パソコンに家を建てては消してみ

山梨雅子

内緒することも出来ない狭い家

河津正治

豪邸に住むことだけが幸福ではない。両句とも嘆きながら小さな幸福を噛みしめている。

星占い良いところだけ信じよう

大下智子

そうですね。何事も前向きに良い方向に考えて生きれば、良い句も作れ人生も開けます。

加藤要子

加藤要子

加藤要子

加藤要子

加藤要子

首香の芯

宮西弥生選

身を伏せて煮え湯を浴びぬようにする

まっとうに生きても闇はおそろしい

まだ若いなどは思わないことに

丸くなり過ぎたか背縫い綻びる

人生の午後を考えまいとする

淋しさをかくす化粧が濃ゆくなる

初心にかえる男結びがほどけない

十人十色足並そろうのが不思議

これしきのことには負けない木の根っこ

割勘の恋を信じていいですか

私の命が休む日記帳

仮の世の長し短し帯の丈

隠しておこう夫の知らないかすり傷

外面の七分にストレスが溜まる

梓の中で四角四面に生きている

姑の立場で替えた色眼鏡

孫を抱く昔々が蘇る

相性が家の鏡と合わぬ服

舟盛の鯛と目が合い箸が出ぬ

米子市 政岡日枝子

吹田市 山本希久子

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 川上 富湖

倉敷市 小野 克枝

奈良県 鍛原 千里

大阪市 稲本 凡子

西宮市 西口いわゑ

八尾市 大内 朝子

八尾市 高杉 千歩

大阪市 神夏磯典子

羽曳野市 吉川 寿美

西宮市 門谷たず子

和泉市 中川 楓

米子市 光井 玲子

寝屋川市 太田とし子

富田林市 藤田 泰子

寝屋川市 井上すみれ

鳥取県 西川 和子

平凡な今日であしたを疑わぬ

この先はオマケの日々を慌てずに

カラフルに時代おくれのたまごっち

千羽目の鶴で狂えぬ位置にいる

病院でまだまだ辛い人に会う

友達は少ないけれど変らない

一線を退いた選手が若すぎる

結局は良妻賢母なれず古希

桃 栗はまだ見られそう種を埋め

描けそうでなかなかかけぬ円である

香水と髪型変える嘘がある

投げかえす石は痛みを知っている

寡婦となり終身刑の中で生き

迂闊でした栄と労との読み違い

怪獣をいっぱい産んだ紙ねんど

空缶が花一輪で甦る

不器用に生きても満ちる明日がある

都会志向やがては土を恋しがる

国のため死ぬことなどは考えぬ

アメとムチ承知で後を付いて行く

またひとつ忘れて明日を生きられる

母さんの形に千切る白い雲

いつからかピントは花に合わせてる

古日記謎のページは虹の色

ときどきは意地悪になる薔薇の花

米子市 白根 ふみ

貝塚市 池田寿美子

和歌山市 木本 朱夏

今治市 野村 京子

和歌山市 上地登美代

西宮市 牧淵富喜子

堺市 志田 千代

和歌山県 坂東 和代

米子市 木村富美子

東京都 佐藤 季穎

川崎市 和泉見早子

今治市 塩路よしみ

岡山県 矢内寿恵子

和歌山市 桜井 千秀

和歌山市 古久保和子

倉吉市 野口 節子

和歌山市 吉村さち子

和歌山市 武本 碧

出雲市 園山多賀子

横浜市 後藤 早智

芦屋市 黒田 能子

藤井寺市 太田扶美代

横浜市 川島 良子

西宮市 奥田みつ子

八尾市 村上ミツ子

結び目を見せぬ男に隙がない
 やさしすぎる人にレモンひとしずく
 砂の城ゆっくり積んで今日も暮れ
 後ろ指差されてならぬ道を生き
 生足の淫らを包むハイヒール
 腹筋は蛙を真似てやってみる
 止まらない電車に乗った恋心
 一年も経れば小鳥も仲良しに
 人間と見分けのつかぬ鬼でした
 売れ残る茄子か底値で叩かれる
 少しいびつに描いた園児の瞳が温い
 私が素顔に戻るカーラジオ
 同じ柄許せる人とイヤな人
 誤字脱字アイドルスターの国語力
 履歴書へ疵の数など載せられず
 原色を着て向日葵に負けられぬ
 悩みごと聞いてストレス増やされる
 シースルーの服を着れないサロンプラス
 しなやかに横糸に罪織り込もう
 貴方の傘の下で雷怖くない
 秒針がびたりと合うと色褪せる
 厚化粧笑わずピエロ素顔泣く
 秒針に削られている命の灯
 あじさいの闇に虚実をためている
 長命の秘訣か姑の派手好み

岡山県 福原 悦子
 八尾市 高橋 夕花
 尼崎市 内田美也子
 倉吉市 淡路ゆり子
 横浜市 清水 潮華
 鳥取市 坂田和歌子
 倉敷市 井上 富子
 鳥取県 西原 艶子
 米子市 澤田 千春
 鳥取県 土橋 睦子
 和歌山市 福本 英子
 尼崎市 長浜 澄子
 羽曳野市 芦田 絢子
 大阪市 板東 倫子
 今治市 村上久美子
 鳥取県 石谷美恵子
 横浜市 保田 絹子
 和歌山市 楠見 章子
 富田林市 片岡智恵子
 大阪市 本間満津子
 松江市 川本 畔
 伊丹市 櫻谷 郁子
 寝屋川市 坂上 高栄
 熊本市 永田 俊子
 八王子市 播本 充子

硬直で生命線も泣いていた
 苦も楽もリユックに詰めて老いの坂
 ぬくい一言胸に小さいバラが咲く
 気軽に相談うける余生でありがたい
 ふるきずを見せぬ心の化粧です
 人助けした亡夫の実印宝です
 聞く耳を持って人の輪丸くする
 B面に昨日の嘘を塗り替える
 人間の都合で匂が変えられる
 美しいふる里で聞く嫁不足

松江市 安食 友子
 八尾市 生嶋ますみ
 羽曳野市 徳山みつこ
 鳥取県 さえきやえ
 八尾市 井尻 民子
 倉敷市 家守 政子
 横浜市 田中 笑子
 岡山県 山本 玉恵
 横浜市 近藤 道子
 米子市 鷲見 正子

日枝子さんの句―身を伏せて……昨今の人間の生きざまを正直に直視した句で巻頭にいただきました。「君子危うきに近寄らず」わが身を守るには理不尽でも止むを得ないと思います。
 希久子さんの句―まっとうに生きても明暗はついてまわるもの
 常に清簾潔白である以上は闇は好みません。だから清く正しくありたいと願うのですね。美代子さんの句―私ごとで恐縮ですが、部屋の模様替えのために足を痛めました。以前は、らくらくと無事だったのが今回はそうもゆきません。年齢だ、年齢だと痛感いたしました。富湖さんの句―富湖さん御自身ではないはずですが。これはやがて私達に訪れる現実だと有難く受けとめさせていただきました。

九月号から、茴香の花の選者交替に当り今回が最後になりました。この一年大切なお仕事を担当させていただきました喜んで居ります。皆様の温かい御支援と素晴らしい句に接し、大変勉強になりました。一層の御精進を心より念じて感謝の御挨拶とさせていただきます。

うっかり

堀畑靖子選



うっかりと頼んだ方が忘れてる
うっかりが重なる惚けが心配だ
誘導のうまさうっかり出た本音
単純な嘘にうっかりだまされる
うっかりとしてれば肥る二三キロ
うっかりの裏を小銭で見すかされ
うっかりもちやっかりもいて皆家族
うっかりは出来ないほどの青い空
うっかりと寝過ぎ古いミルク飲む
そのバスじやないとガイドが呼んでいる
うっかりと物も言えない子の知識
迂闊とも過ぎた女だとも思っ
未だ明日があるさと油断した報い
一目を勝ってしまった接待暮
蓋すればすむとっかかり吐いた愚痴
うっかりに慣れて自分を見失う
愛の大きさをうっかり見逃した
うっかりと乗ってこぼれた蓮の露
うっかりはしない得する話なら
酔い覚めの水と請求書があった
愛してるなどとうっかり言うてから
うっかりとしてたら夫取られます

和重 武史 清芳 剛治 ますみ 四郎 勝巳 正甫 和歌子 清史 虹汀 芳郎 文時 あずま めぐみ 哲子 緑良 佳雲 みつこ 政良 ミツ子 典子

有頂天うっかり連れて跳ねている
人柄のよさでうっかり見逃され
大金も骨壺もある忘れもの
うっかりの眼鏡と今日もかくれんぼ
一人芝居の幕うっかりと引き忘れ
二人三脚うっかりなんかしておれぬ
うっかりに備えて傘は五六本
うっかりの年月つめた玉手箱
うっかりと絡めた指が生む波紋
札束を積まれうっかり者になる
うっかりと甜めていたのは敵の塩
うっかりと明日の暦まで捨てた
父であることをうっかり忘れ果て
うっかりと喋れぬ奴が横に居る

勝秋 隆盛 寿美 玉恵 弘 美代子 洋良 正劍 しげお あずき 日枝子 章久 保州 久仁於 勇太 妻子 京子 大輪 たす子 岸本宏章

席

山本三郎選



目くばせに席を外した花の宴
あの世でも席順守る兵の墓
今朝も無事何時もの席で御飯食へ
人生の隅で気楽な自由席
テレビ機数こは老父の指定席
矢面に立つ気一番前の席
隅この母の周りに輪ができる
無礼講社長部長の席がある
ドヤドヤと一度に埋まる指定席
別れよう言われる前に席を立つ
靱帯を痛めたらしい花の席
数合わせの席だとことん飲んでやる
直ぐ立てる場所母さんの指定席
常連の席は何時でも空けてある
指定席どうぞどうぞと空けてある
ジャンケンで席取りしてるバスツアー
正論を拳に弱者の席に居る
末席の切れ者決議履し
感動のラストシーンに立てぬ席
子の家に私の席を囲うとく
頂点の席は孤独な風を知る
陽の当たたる席へ盃寄ってくる

高栄 俊子 ひで 時弘 庸佑 吉之助 たもつ 重人 とし子 英王子 良知 仁清 慕情 多賀子 茂代 正劍 克治 恭昌 あやめ 寿美 好恵

初歩教室

題一筋

吐田公一

句意（自分がその句の中で何を訴えようとして
しているのか）が相手に分るように表現しな
くてはならない。川柳は省略の文学といわれ
るが必要な言葉まで省略しては、相手にその
句意が伝わらない。それではいくら句を作っ
ても意味がない。そのよって来たるところは、
一句の中にあれもこれもと欲張って読み込も
うとするとところにあると思う。恐らくは省略
しすぎると選者に分ってもらえないのではな
いかという懸念があるからだろうが、作句す
る時はできる限り、詠みたいと思う現象がた
くさんある中で、ただ一点に絞られる（集中
する）ように心掛けられるとよいのではない
かと思う次第。

添削句

○筋のない息切れと火の車 トシエ
句意は不明だが、不況に耐える姿だと
▽不況へも筋金入りの火の車

○筋金入り妻に頼って生きる老い 弘子
この省略は筋金入りがかのによってその内
容が違ってくる。このような場合例え上七
になっても一字を省略してはならない。

○筋道を立てる男に勇み足 晩翠
この場合「男の」にすればよかった。

○お中元届いた先は筋向い 泰雄
やっかみを詠むなら少し強調した方が一

▽筋向いの預かるだけのお中元
▽筋向いばかりに届くお中元
○筋書の通りにならぬ出世 栄翁
川柳は当り前に詠むと深みがない。逆転の
発想も必要

▽接待から筋の通らぬ天の声
○かあちゃん筋一つ持ち農家する 輝夫
下五の表現に無理がある。

▽老いてなお鉄一筋に生きる妻
○筋通し頭固いとシヨムに行き 一典
下五を左遷とすれば味が出るのでは

▽筋通す頑固頭が左遷され
○一筋に歩いた昔ふりかえる タツエ
ふり返るのもいいが、ここは前向きに詠む

▽一筋に歩き築いたくらし向き
○母の鞭筋を通して悔はなし 四八重子
受け身で詠んでみると

▽身にしみる筋の通った母の鞭

○こつとつ人でも一筋の達人で 仰信子
下五に難。でも表現が句を殺している。

▽骨董の道一筋の確かな目
○筋道を少しはずして生きてみる 捷也
下五がやや安易に流れてしまった。

▽筋道を少しはずして楽に生き
○筋肉じゃなくて中年太りです セツ子
このままでは説明句

▽筋肉もやせてきました管理職
▽筋肉が消えて現場に遠くいる
○大筋は賛成ですとけちちよつと 芳水
下八に一考が欲しかった。着眼良し。

▽大筋は賛成条件つけてくる
○日の本は筋を通して生きれぬか 勝久
下五の疑問詞に難。また大上段に構えすぎ
る。肩の力を抜いて

▽この国の筋が通らぬまつりごと 茂代
○筋書の通りに行かぬ余生みる
下五が単調

▽筋書を立てた余生が狂い出し
○血筋の良さ後ろ姿に見え隠れ ふみ
血筋の良さは必要

○筋通す人で世話役信篤し 一乗
下五の圧縮に多少無理があるのと、何の世
話役かを詠めば

▽筋通す世話役がいて村祭

○がむしやらに筋を通した捨てぜりふ 雄 幸
捨てぜりふも結構だが

▽がむしやらに筋を通した横車 君 江
○筋道を立てて正論突いてくる
逆説的に表現するのも川柳

▽正論の筋をみんはもて余し

○乱れた世筋を通せば異端児と 宗 明
下五が極端と思われる。

▽乱世へ筋が通らぬ徒党組む
○早苗にも一筋の意地黄金に トヨ子
下五が尻切れトンボ

▽黄金咲く夢一筋に生きる苗 つよし
○筋論に激した夜の独り酒

▽筋論が通らぬ夜の独り酒
平易に表現すれば

○筋道を通しそつない意見吐く 義 男
原句は説明的。逆の見付けをする

▽筋道を通すひとりに会議もめ
○セールスが筋金入りで夫呼び 仙 雅 子
下五の意味が解しかねる。セールスを詠ま

れるなら、それらしい舞台装置を
▽棒グラフ筋金入りが伸ばす汗

○揉めぬよう筋を通したはずなのに サト子
内容がやや単純。もつ少し内容を掘り下げ

ていただきたい。趣旨は異なるが

▽揉め抜いた筋の通らぬ予算案

○澄んだ空飛行機雲は恋一途 美也子
上五が冗長

▽恋一途飛行機雲は娘を乗せて よしこ
○筋金の入った乙女戦前派
現在風にアレンジすると

▽不況へも筋金入りの妻がいて

○筋肉の緊張解す茶の時間 益 子
原句もいいが、この情景にはできる限り柔

らかい表現が似合うのでは
▽筋肉をほぐす一息入れるお茶 忠 男
○筋違いわかつて通す多数決

ゴリ押しを表現すると
▽正論へ筋が通らぬ多数決 智加恵
○筋肉痛登った石段百五つ
単なる説明句。百八なら煩惱との関係でま

だ面白かったのだが
▽石段に齡知らされた筋肉痛 志 重
○政変に曲ってしまった貯金帳
「筋」という題からずれていると思ふ。

▽年金へ皺寄せをする筋違い 哲 平
○職人のしごと中坊筋通し
上八の表現に問題

▽筋通す住専処理にある悩み 美寿子
○おなじみが筋書通り話する
句意は違うが

▽根回しで筋書通り事運び

佳句

核実験筋くい違ってお国柄 幸子

筋道を一本通す老がんこ 宏

筋書も決まらぬうちにケリが付き てる代

本筋をはずれ余談に花が咲き 徳三

席を立つ筋の通らぬ会議室 寿代

仲裁に筋書き立てて妻と行く 勤

穏やかに筋を通せば合う歩調 久子

筋道が解けぬ社会の裏表 てる子

筋書がはずれてくる縄暖簾 要子

(下五でグツと締められた)

子育てに筋のいい子と悪い子と 美子

(素直に詠めていて好感)

自分史の筋書変える句説点 幸枝

(下五が効いている)

アキレス腱切った痛みは忘れない 早智

(泣いて馬謖を切る―つらいね)

口下手の筋を読みとる聞き上手 みやこ

(見付けが見事)

筋通す女で恋に遠くいる アキ

(失楽園とは凡そ縁のない人ですね)

ひと筋の涙が小言終らせる 純子

(見付けも表現も全くすばらしい)

私の句

筋通す決意辞表を懐に

アンコールワット 世界遺産紀行

田中正坊

五月二十六日から三十日まで、アンコールワット世界遺産紀行五日間のツアーに参加した。第一日は関西空港から全日空機で出発、タイのバンコク空港に到着した。

翌二十七日は、空路カンボジアに入国し、シエムリアップ市に着いた。ここではまず、**ロリュオオス遺跡**の最古のヒンズー教寺院である**プリア・コー寺院**、**ロレイ祀堂**などを訪れた。ロリュオオスは、クメールがアンコールに王都を定める以前の紀元七九〇年ごろに都があった地で、この遺跡群の建造物は煉瓦で築かれ、壁面には砂岩に刻んだ彫像がはめこまれているのが特徴である。

実はこのツアー、急に思い立って申込み、

アンコール・ワットを背景に



出発直前に『地球の歩き方』シリーズの「アンコール・ワットとカンボジア」を入手、一夜漬けの知識で参加したわけだが、もともと『幻の遺跡』として名前だけが知られ、その実態が明らかでなかったのが世界遺産に指定されて以来、観光の対象としてクローズ・アップされるようになった。

この日の午後には、ツアーのハイライトであ

るアンコール・ワットを見学した。遺跡は、全長数キロの堀に囲まれた敷地内にあるが、西塔門をはさんで回廊が南北に延々とつらなり、ひとときわ高い中央祀堂を真ん中にして四つの塔がそびえる宏大な全景に息をのむ思いであった。一九〇年代にクメール国王によって、三十年の歳月をかけて建造されたヒンズー教寺院であると同時に、王の墳墓でもあり、ピラミッド型の砂岩建築物としては世界最大規模で、芸術的な価値も高い。

西塔門から遺跡内に入り、中央祀堂をはじめ各尖塔に通ずる急な石段を昇降し、三つの長い回廊をくまなく回って壁面に刻まれたデバター（女神）や「天国と地獄」「乳海攪拌」などのレリーフを鑑賞したが、短時間では文字どおり一覽するにとどまった。

一口にアンコール遺跡と言うが、それはこの独立した遺跡であるアンコール・ワットと五つの門に囲まれた大きな町であるアンコール・トムの遺跡群、それに前述のロリュオオス遺跡群の三つから成る。これらがアンコール王朝の滅亡とともに忘れられ、ジャングルの中で長い眠りについていたのが、十九世紀後半にフランス人によって「発見」され、よみがえることとなったという歴史がある。

二十八日は、トンレサップ湖のクルーズを

山本 義子

行った後、アンコール・トムを訪れたが、その中心部にバイヨン寺院がある。十二世紀に建てられた仏教寺院で、正面の南大門には巨大な観世音菩薩の四面像があり、その門への通路の両側には、神々と阿修羅がナーガ（蛇神）の胴体を引き合う五十四体の石像が並んでいる。

このアンコール・トムには、主なものだけでも三十数か所の遺跡があるが、アンコール・ワットの保存状態がきわめて良いのに比べて破損がいちじるしく、崩れた石材が散らばったままに放置されている所もあり、修復には多くの経費と労力を要するものとみられる。バイヨン遺跡では、日本のアンコール遺跡救済チームがユネスコ信託基金によって保存計画策定調査プロジェクトを組み、フランスや現地チームと修復作業にあたっている。

その一方で特徴的なのはタ・ブROOM寺院で、ここはまるで怪物のように大きく成長したガジュマル（榕樹）に押しつぶされながらかろうじて建造物の体裁を保っており、修復に手を下さないうままに据え置かれ、自然の脅威を示すサンプルとして奇観を呈している。

なお、現地は治安と地雷については全く心配無用であったが、ただ三十六度を越す高温と高い湿度には悩まされた。

「アンコールワット世界遺産紀行五日間」に参加させていただいた。カンボジアはまだ観光旅行延期勧告地域とのこと。ただし遺跡は除くと言うのに望みを託し、かつテレビ放映の壮大なインパクトに魅せられていたのでとびついた次第である。

現地は雨期に入る前の五月二十六日、午後閑空発↓バンコク着。二十七日早朝発↓現地シエムリアップ着。覚悟はしてきたがとにかく暑い飛行場である。そこへ現われた現地ガイド氏、なんとも陽気な人柄で少し珍妙な日本語は難民キャンプで習ったとか、肉身を戦禍で亡くしたとかを話すが、悲慘には聞えず一生懸命なのに救われる。

九世紀〜十三世紀隆盛をきわめたアンコール王朝は、二十数か所の寺院があったらしい。それが戦乱と時が流れて密林の中に埋もれ長い眠りについていたのが、十八世紀後半から十九世紀に入りゆり起されたと言ふ。またこの十数年は内戦による破壊、また盗掘などで荒廃していたのをユネスコが中心となり、日本もその一員として保存修復に力を入れているとの説明を聞く。ホテル着後、ロリュオス

遺跡に向かう。国道と名付けられているが舗装なしの赤土道である。小さな建物は小学校とのこと。中央市場を見学する。物は豊富なお土産だ。昼食にホテルに帰る三時までお昼寝タイム。暑いときにありがたい。

次は憧れのアンコールワット。百聞は一見にしかず、とにかく偉大、あなたの五基の塔は十五階のビルに相当。塔の下までの参道は数軒はあった。石段は急峻で風化している。懸命に四つんばいで登る。夕日を見に小高い山にあるブロンバケン寺院まで登る。寺は荒れていたが眼下にアンコールワットを望む。夕日と遺跡は絶景なり。二十八日、日の出を見るためアンコールワットの石垣に座り待たが、黒い雲にさえぎられた。残念。トンレサップ湖クルーズで市民の水上市場を見る。

午後第二の目的アンコールトムの都市遺跡へ。ここはワットのヒンズー教に対し仏教なので親しみやすい。テレビで見た侵略する巨木の根、包みこむ榕樹の根を目のあたりにする。崩れる寸前の美しさがここにある。四角四面の保存修復を観光化しては困る。難しい問題だが、カンボジアの自立と世界の協力が必要と思うなど生意気に考える。

最後にカンボジアの子供たちよ、たくましくあれ。

川柳と私

結城 君子

それは十数年も前のことになる。

リユーマチが再発して左ひぎの手術でK病院に急遽入院の運びとなった。六十歳の十月である。

手術後養生の期間は、たいいていの人は退屈する。私は消灯時間が早すぎて恨めしかった。ベッドに寝たつきりの数日が続いたとき、天井をにらんでいるだけではないかと思つて、手の届くところに、小さいノートと鉛筆を置いて寝ていた。私は二年前から、川柳を始めていた。私には行けないけれど投句なら出来る。

句を考へよう。このせいたくありません。時間に……。

朝日新聞の「なにわ柳壇」にも投句していたのでベッドの上で挑戦する。その週の課題は「紫」であった。

入院の空きベッド待ちの間、私の植えた桔

梗が蕾をつけた。端正なうす紫の硬い蕾を見ていると元気が湧いてきた。

桔梗の花が開いた朝、入院OKを知らせる電話ベルが鳴った。

開花すると、桔梗は濃い紫だった。私を励ますように、紫は深かった。

そのときの感動を句にした。

術後の経過もよく大部屋の患者さんとも仲

良くなったある日、朝日新聞朝刊の切抜きを片手に、兄が姿を見せた。「アラツ」と驚いている私に笑いながらドアの近くでためらっている。女性だけの病室に入りにくいのだと、私は手招きする。「載っているよ」と、切抜きを見せてくれた。

手を触れば

手を染めそうな桔梗映く

川柳から元気を貰つて、リハビリも熱心にした。回復は非常に速かった。

再び家の敷居をまたぐことが出来た。

× × ×

本箱から懐かしい『陽やけ誌』が出てきた。

若いころ、ハイキングの会のメンバーで、兄弟姉妹の多い森川一族といとこや近くの友人数十名の会である。昭和十七年十月発行とあり、紙質も戦時中の感があり、派手に染しめ

ない暗い青春時代を何とか明るい方向に持つべくのに苦心したものだ。

見よう見真似で「川柳会」もした。

「丸刈り」 緑風選(戦死)

丸刈りは屈託もなく汗を拭き 箱作
やりまっせ念をおされて刈られてる 織女
二日だけ丸刈り見せて夫征き 健作

丸刈のここに名譽の傷がある 理恵子

「就職」 互選

就職へ妻も今夜はつけてくれ 箱作
同窓が逢えば就職先にきき 九一
仲人は就職時代にはふれず 理恵子

「戦果」 緑風選

大戦果 涙と共に聞くニュース 一鉢(戦死)
外電が先づ見通しをつけるなり 健作

大戦果そして嬉しい回覧板 九一
大戦果我に損害なしがよい 箱作
今日もまた戦果報する声強し 織女

特配で清く祝った大戦果 理恵子
まだ敗戦の影もなかった時代。その後次々と召集令状が来、出征している人の戦死の報

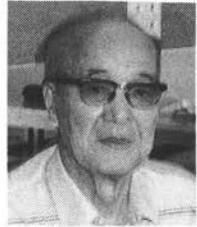
が入り、そして誰もいなくなった。

(注)箱作 故森川技智 織女 森本節子

健作 結城敏夫 理恵子 結城君子

九一 森川まさお

栗谷春子は子育て最中で投句は休み。



笠原吸江さんを偲ぶ

吉岡美房

六月二十九日朝、御息から、「昨夜父が病院で亡くなりました」という電話を頂き、「えっ」と言ったなり次の言葉が出ませんでした。と言いますのは御高齢ではありませんでしたが、昨年十一月入院されて、御見舞いに伺った際には、「二週間の予定がもう少し居れと言うことでゆっくり養生しますわ」と元気に話され、今になって時々外泊を許されて自宅へお帰りになっているとお聞きしておりましてだけにびっくりしました。

御葬儀は六月三十日神式（金光教）で厳粛に行なわれ、薫風主幹、鬼遊相談役、岳人副理事長らと共に、お世話になった川柳藤井寺の会員ら多数でお見送り致しました。

吸江さんは、銀行に在職中の昭和三十年、羽曳野病院に入院され、当時同病院で活動していた「どんぐりの会」に入会され、路郎先生の高弟川村好郎先生の指導で鬼遊さんや谷垣史好さんらと共に川柳を学ばれ、退院後

は川柳塔社発足には理事として参画され、常任理事としても川柳塔社の発展に大きく寄与されました。一方、川柳でも課題吟の名手とも言われ、夜市川柳の前身である大萬川柳で高位入選される等名句を数多く残されました。句風は温厚篤実な性格そのものの優しい優しいものでした。それと共に作句態度は厳しい姿勢で臨まれました。本社句会でも一昨年一月、最愛の奥様の御逝去後体調を崩されるまでは、高齢にもかかわらず皆出席をつづけられ、いつも会場の左側の前の方の席で静かに作句をされ「吸江」と呼名される真剣な姿勢にはいつも尊敬の念をもって拝見しておりました。その間、藤井寺市に川柳の場を作ろうと参予児島与呂志さん等とともに大変な御尽力を下さり、昭和五十七年二月「川柳藤井寺」が結成されました。以来十六年間、会長として会の運営、後進の指導他文化団体との交流等、多方面にわたって活躍して頂きました。

その他、町内会老人会等のお世話も積極的にされました。その結果、平成五年十一月三日、文化自治功労者として藤井寺市民表彰を受けられました。

最初は十数名で発足した川柳藤井寺も会長の献身的な努力により投句者を入れて五十名を越す会に成長させて頂きました。更にこの九月には句報も二百号に達します。それを記念して句会を開催し、会長にも出席して頂くつもりで準備を進めて来ただけにこの急逝が残念でなりません。吸江さんには川柳だけでなく人生の先輩としてお慕い申し上げると共に、心の支えともして来ただけに淋しい限りです。今後は、吸江会長のモットーであった自由で楽しい会を益々発展させることが御恩に報いることだと思っております。どうかいつまでもお守り下さい。

御冥福をお祈り申し上げます。

合掌

遺句

年輪をひとつの皿に盛る夫婦
どの道を歩いてみても秋の風
胸に棲む鬼が時々顔を出す
寝たきりへ春夏秋冬窓の景

妻傘寿寝たきりなれど祝いけり
失意の日雨もとほけた音で降る

笠原健二翁 八十九歳

路郎忌

本社 七月句会

七月七日(火)午後五時半
アウイーナ大阪

梅雨明けのはつきりせぬまま猛暑に見舞われた七月、路郎忌本社句会は百十一名の参加により七夕の宵のにぎやかな集いとなった。

この度、麻生アト氏が川柳に一生を捧げた父路郎の著「川柳とは何か」の復刻版を上梓され、この貴重な一冊は川柳塔社より出席者全員に配布された。

六月亡くなった同人笠原吸江氏への黙祷に続くお話は、高杉鬼遊氏、麻生路郎師と生前にお会いする機会はないが、句集旅人の君見たまな波稜草が伸びているの斬新さに衝撃を受け、路郎師についてもっと知りたく葭乃夫人を訪ねたところ、突然の訪問にも拘らず気さくに応じて頂けたと言う。初出席に森松まつお氏、福岡雅楓さん、鴨谷瑠美子さん、田中節子さんの四名を迎える。

月間賞は田中節子さん(大阪市)に輝く。
(司会)朝子 (記名)ダン吉・月子
(受付)冬葉・かすみ・恵子

席題「牛乳」 板野美子選

欲一つ捨てた分だけ飲む牛乳
牛乳を飲まされてる鬼がいる
牛乳配達朝顔ほめて走り去る
銀色の恋するふたり牛乳党
牛乳でアメリカみたいなのが育ち
遅しく伸びよ牛乳冷えている
列島の戦士牛乳ぐいと飲み
牛乳で育って母を跳び越える
牛乳を一本増やす夏の陣
牛乳を飲んだら朝の幕があく
牛乳をお水がわりに飲んでいる
牛乳を少し温めてモーニング
骨のない男が牛乳飲んでいる
牛乳で朝のリズムが弾みだす
荒れた胃を洗うミルクを流し込む
牛乳に環境ホルモンかきまわし
牛乳がバターになったこの暑さ
牛乳とパンで抑えた腹の虫
牛乳のからで再生ハガキです
最愛の人と牛乳飲んでる
苺ミルクと初恋談義しています
牛乳瓶にかけた花だが笑いかけ
牛乳をこくり他人の味がする
牛乳に四五日漬けていたい妻
牛乳を飲んでも歌は出てこない
牛乳パック別れた妻の匂いする
牛乳のお風呂でむだな夢を見る

弥生	弥生	牛乳の皮膜に軽いうそがある	房子
恵子	恵子	いつも強気牛乳たくさん飲んでる	扶美代
正雄	正雄	独りというものは牛乳をふきこぼす	富湖
一步	一步	牛乳の白へ挑戦状を書く	
倫子	倫子	牛乳を一杯白い汗になる	(蘭)美代子
重人	重人	時計のように今朝も牛乳びんが来る	たつお
ダン吉	ダン吉	牛乳がのどにつまった救急車	天笑
典子	典子	ホルスタインしぼる地面に穴があく	度
夕花	夕花	牛乳瓶の底は骨太だと思っ	富湖
保子	保子	人 シューベルトを聴いた牛乳だうまい	靖巳
月子	月子	地 牛乳を蹴ってナイフを光らせる	森子
森子	森子	天 静脈をゆっくり牛乳で洗う	(蘭)美代子
射月芳	射月芳	輔 産まれたぞ牛乳瓶がこだまする	美子
靖巳	靖巳		
たつお	たつお		
朝子	朝子		
諷云児	諷云児		
昭子	昭子		
扶美代	扶美代	兼題「役者」 西口いわる選	
希久子	希久子	騙されたふりして役者が一枚上	満津子
弘直	弘直	久々に逢って役者演じ切り	照子
鹿太	鹿太	よい役者後ろ姿で勝負する	吉太郎
いづふみ	いづふみ	子沢山なかに役者に似た一人	鬼遊
路児	路児	チャップリン映画の中で生きつづけ	洞庵
しげお	しげお	歌舞伎役者のような老舗の若旦那	倫子
信子	信子	汚れ役に徹し美しさが光る	みつ子
		赤ん坊は千両役者だと思っ	楓楽
		玉三郎の流し目に酔うかぶりつき	一二三

役者だと言われ世間に踊らされ
落選になれば役者に戻ります

アドリブでさすがに役者うまく逃げ

素顔の役者と出合った昼の法善寺

私生活微塵も匂わない役者

役者だな頼んだことにそつがない

兄嫁の貫禄やっぱり役者だな

八方美人妻は千両役者かも

化けるのが上手 女はみな役者

さすがに役者するりと舌をすり替える

嘘でない顔で女は泣いて見せ

金バッジ裏で役者が支えてる

役者だと思つ男がだまつてる

妻の掌で躍る役者と他人知らず

なかなかの役者尻尾はつかませぬ

良妻賢母だんだん疲れてきた役者

困まれていても役者はひとりぼち

選挙前大根役者の揃い踏み

斬られても役者は役者華がある

脇役のスターがみせるいぶし銀

大見えの余韻残して幕降りる

国憂う役者がいない永田町

円満は大根役者の妻が居る

脇役に徹した人のしぶい芸

佳

顔も声もこわれて一流の役者

死に方を役者はいつも考える

父の訃も舞台できいて役者馬鹿

酔芙蓉ほどの役者にはなれぬ

哲郎

仁清

一風

萬的

義子

壽美

諷云児

金太

射月芳

いづみ

昭子

信子

吐来

石舟

泰子

ますみ

哲夫

房子

夕花

正一

典子

正坊

美子

大輪

たす子

寿美

私生活見せない所に花がある

別れ話がベストセラーになる役者

地

役者だな丸く納めて幕にする

天

密談の部屋に揃ったのは役者

軸

名優のせりふを真似る照れ隠し

兼題「酒」

川島諷云児選

酒タバコやめたら結婚してあげる

不甲斐ない猛虎へヤケ酒が続く

左遷地に旨い地酒が待っていた

口軽くなるのでお酒ひかえてる

飲み過ぎて青菜に塩の二日酔い

口切らぬまま免税のナポレオン

酔いどれを拾い集めて終電車

酒癖の悪さは場所を選ばない

やけ酒じやないかと知ってるお月さん

焼茄子が出たので銚子追加する

焼酎がとっても好きな腹の虫

縄のれん人の心のおかる酒

思い切り酔いたい明日は娘が嫁ぐ

甘酒が好きな男で頼れない

お互いに地獄見て来た断酒会

酒二合良心軽くなってくる

内臓の消毒をする酒である

スーダラ節の一番似合うコップ酒

舞夢

たつお

千歩

湖風

いわる

アキ

充子

満津子

信子

節子

萬的

頂留子

二南

吐来

路児

しげお

賢子

たす子

射月芳

ダン吉

富湖

度

期待した訳ではないがまむし酒

いい朝を迎えるために酒がある

乱れてもいいかとお酌ぎにくる

いろいろな顔をもつてるコップ酒

あれこれと博士が多い屋台酒

塩なめて飲むとは底の知れぬ酒

夏やっこ湯豆腐で父の酒

ここだけの話と酒が喋り出す

無調法よと受けてるうちはまだ淑女

水掛不動お酒掛けたら利きますか

本当の俺が浮いてる酒の中

飲む時の気持ち分かってくれる酒

酒やめて牛乳党になりました

酒が出るとなれば話は別である

酒やめたそうだ中元困つたな

飲むほどに男勝りの河内弁

佳

古伊万里の酒器に呑む奴呑めぬ奴

七夕に酒はやめると吊つておく

日々の風沈めて居酒屋は海に

母の在所は水も酒にも銘がつく

信号無視酒のせいでもなさそうな

入

点滴もいっそ酒ならありがたい

地

樽からの酒は日本の音で出る

天

ふるりの訛りをもっている地酒

湖風

由一

金太

狸村

正一

笛生

いづみ

三男

富湖

勇太

弘一

月子

保州

典子

天笑

落児

恵美子

森子

恵美子

美代子

大輪

雅文

天笑

生きてゆく氣力に酒という薬

兼題「ふたり」

宮口笛生選

風云児

ふたりして選んだ道だ悔いはない
皆嫁さ夫婦ぼぼち趣味さがす
別々のお墓を予約する夫婦

庸 佐
照 子

ふたり合せて百八十歳を目指す
君となら地獄も見ると言うふたり

充 子
希久子

ふたありでいるからケンカするのです
すねてよし妬いてもよしのふたり仲

射月芳
重 人

ふたりして先に死ぬのが勝ちと言う
離婚劇演じたこともあるふたり

たす子
泰 子

おじやま虫ふたりの仲に気づかない
成るようになつて夫婦の旅続く

千 秀
大 輪

ふたり目の子供まだかと聞かないで
お隣へ裾分けばかり老いふたり

正 一
典 子

鴨川べりふたり二人の夕涼み
ふたり分買つて惣菜余らせる

千 枝子
茜

ふたりして渡る吊り橋こわくない
人前は一人ひとりになるふたり

千 梢
いっふみ

新世帯はやばや二人半らしい
美しい距離で他人でいるふたり

正 雄
風云児

一個をふたりで食べたとうれしそ
少子化へせめてふたりはほしい孫

冬 葉
かすみ

逢つては蜜はいてもいなくても
逢つては蜜はいてもいなくても

仁 清
由 一

修羅阿修羅ふたりの愛はもう無限
火の章のふたり一氣に修羅を見る

雅 文
湖 風

ふたりだけなのにテレビが二台ある
家裁からもつれたままで出るふたり
二人目は少し手を抜き子が育つ

しげお
風云児
胤 子

反対をふたりの愛が説き伏せる
ふたりいるただそれだけの安堵感

胤 子
雅 文

針のない時計夜道を行くふたり
合縁奇縁ふたりで綴つて来たドラマ

伽 羅
萬 美

歯が痛む女と暑い昼さがり
ふたりの子どつちも妻の側につく

寿 美
美 子

ふたり日はのびのび育つ三輪車
夫婦茶碗揃う食卓幸がある

希久子
賢 子

ふたりして笑い合つてる物忘れ
まあまあの星だったなと老いふたり

正 坊
三 男

終章へ歩幅を合わす老いふたり
ふたりともぶすつとしてる老夫婦

狸 村
寿 美子

ふたりともぶすつとしてる老夫婦
ことりともさせずに住んで老い二人

恭 昌
月 子

ふたり共元氣ぜいたくなど言わぬ
天

月 子
天

老いふたり向こう三軒両隣
軸

月 子
天

親指の躊躇卵を割り損ね
父方の指でなんにも手伝わぬ

胤 子
正 子

点字よむ指が眠いとぐすりだす
指先が冷たくなって白い恋

剛 治
ア キ

ジャンケンはいいこで通す夫婦なり
一本の指が時どき謀反する

高 栄
雅 文

神楽舞う指の先から神になる
ブッシュホン押す指先に火の匂い

雅 文
寿 美

地蔵様と指切りをして村を出る
指ぎつねあの娘はきつと騙される

美 子
楓 楽

八月の指を自分に向けてこころ病む
人指の指ひたすらに鶴を折る

泰 子
彌 生

哀しみを数える白魚の指で
その指に止まると銭が消えてゆく

彌 生
い わゑ

十指みなシナリオを持ち仲がいい
バイエルがなかなか卒業できぬ指

泰 子
ますみ

遊び上手な指もだんだん老化する
人さした指がだんだん瘦せてくる

ますみ
たす子

優男の父を愛した母の指
伎芸天の指に感じる秋の影

美 子
萬 的

少年の指笛聞いた風の丘
千手観音千の痛みを救う指

萬 的
周 信

それにしても小指に罪を被せすぎる
指さきむに投票用紙あり 暑し

周 信
保 子

マニキュアの指で浅漬け出されても
ペンだこの指が私の勲章だ

保 子
恵 美子

ときめきも諦めも知る菜指
核はゼロ地球が指切りをせまる

恵 美子
英 子

ネクタイの歪み直してくれた指
すこし古い話へ指をくつっている

英 子
正 坊

どの指もいとしく爪を丸くする
佳

正 坊
富 湖

片岡湖風選

富 湖
グン吉

剛 治

剛 治
ア キ

相伝の指にいたみを聞くこだま
十字切る指に殺意はなかつたか
触れそで触れない指が美しい
線香花火 指の白さが目に残る

指切りをしたので妻は裏切れぬ

人を指すゆびを封印しておく

美しい指 さよならもつつくしい

絵馬を吊るその指先に愛が満つ

兼題「男」 橋高薫風選

バイアグラちょっと気になるお父ちゃん
くじやくほど男男であつてほし
母子家庭男結びも板につき
神様も男でござるギヤルみこし
策もたぬ男ひたすらトツプ行く
男の約束なんて単純なんだよね
男でしょと言われはじめる三歳児
雑談の多い男と小半日

ルーブルブックは俺だと胸を張る男

キャミソール見てる男がおもしろい
威張らせてあげる大事な夫だから
職退いてからは内づら良い男
薬一本あれば男はへこたれぬ
酒のんで男の気持わかり出し
男手を借りると出せる底力

二南

正子 湖風 惠美子 諷云児 落児 萬的 紫香 勇太 勇太

ベアリック男がつきなき止められる
男らし女らしいも曖昧な
くいしばる歯から男になってゆく
敗北をバネに男になってゆく
マンネリの唄もよからう男なら
口重い男要で釘を打つ
大嘘のばれて男のワツハツハ
男言葉使うとたぶん気が晴れる
トイレのスリッパをはいたままの男
五時からの男リストラ免れる
萩津和野おとこの偉さたどる旅
一喝をせずに書齋にまた籠もる
ざるそばを男ぼそぼそ隅の席
踏み台にするには丁度よい男
次の世は女になつてもてやる
共稼ぎ料理上手なのは男
ロカ岬男ロマンの錨あげ
冬と言う男を一人でのなかに
妥協癖男めつきり皺がふえ
夏バテの男へ茄子を焼いている

完次 雅楓 湖風 寿美 周信 満州 信洋 惠美子 英子 保子 みつ子 英子 富湖 ダン吉 佳秋 隆盛 美子 萬的 義子 洋 一風 昭子 富湖

妻の死に男泣きしたことがある
酒ほろほろ錆びた男がぼつと点く
二の腕に蚊を止まらせておく男
（清記一希久子）

正坊 節子 薫風

第16回 夜市川柳大会

とき 平成10年8月1日（土）
ところ 堺総合福祉会館5階

11時開場・4時半終了予定
各題2句・出句締切1時

- 「今宵」 (米子) 政岡日枝子選
 - 「虹」 (宝塚) 嵯峨根保子選
 - 「椅子」 (藤井寺) 高田美代子選
 - 「揺れる」 (枚方) 寺川 弘一選
 - 「決める」 (岸和田) 岩佐ケン吉選
 - 「期待」 (出雲) 岸 桂子選
 - 「狙う」 (鳥取) 鈴木 公弘選
 - 「鈍い」 (堺) 河内 天笑選
 - 「甘い」 (海南) 三宅 保州選
 - 「相手」 (松原) 玉置 重人選
- 賞 各題佳作天地人に呈賞
費 2000円(軽食・記念品・作品集)
◎ベストテン御招待懇親宴
大会終了後「犬吉」にて5時～7時



毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

大原川柳社（前月分）

矢内寿恵子報

波乱万丈小柄な父の強い意志
母さんのハミングを聞く仕舞い風呂
激流もやがてはゆるむ母の海
確実と聞くまで鉢巻ゆるめまい
快方に向かえば途端に気がゆるむ
心の縮みんなゆるめる春こよみ
帯すこしゆるめ妥協の風を呼ぶ
起伏支えた内助の功が光ってる
六十歳起伏時どき息切れる
初ポーナス少しゆるんだ父の顔
子の羨めてもゆるめるさじ加減
引き締めてもうゆるめな命綱
ゆるみなど一度も見せず逝った夫
涙腺がゆるむ身の上ばなしなど
気のゆるみ不況の風に絡まれる
戦中戦後の起伏を抜けた白い髪
薄化粧肌のゆるみが戻らない
店閉じてゆるむ心に隙間風
起伏多き人生説いて子を送る

みづえ あやこ さちこ すみえ やすこ 玉恵 辰江 妻子 悦子 喜美子 こふゆ 敏子 朝代 たづ子 ひでの 美佐子 昭子 絹子 和子

逢いにゆく朝の空気もゆるみがち
癒ゆるむ大蔵省の辺りから

富柳会

池

森子報

あすなろ 寿恵子

いつまでも心にむむる花の章

蟻の首糸一本の細さなり

めでたい日バラを貰って姑になる

傷ついたスターに届く赤い薔薇

刺のないバラが花屋で売れ残る

百輪のバラもそれぞれ皆孤独

紅白の薔薇も老いたり長い雨期

好きだから一万キロも追いかける

エルニーニョ今年は早い通り抜け

欲かけて深追いするなど亡母の声

五月の薔薇はカーネーションに負けている

割ったグラスの痛みを聞いている欠片

白バラの雫ロマンを秘めている

また同じ夢見た老母の苦勞性

大きく育つのは罪多きわたし

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

森子

妻だけは反旗振らぬとみた油断

芸をする猿の哀しい眼を見たか

父という威厳逆立ちして見せる

看板に肉の硬さは書いてない

油断したひとと言世間狭くする

人生を狂わす油断許さない

油断して出来た子もある子沢山

平坦な道にもあつた落とし穴

鉄治 富湖 保州 英子 萬的 武春 和重 さら子

逆立ちの自信をもっている男

修羅の海逆立ちさせる波しぶき

逆立ちをしても架けた娘が行き

水溜まりのうまかった娘が嫁に行き

百点とれば逆立ちすると母ちゃん

看板塗り変え中身そのまんま

行く先を看板にきく無人駅

映画の看板アクション役に睨まれる

看板上に旅情豊かな夢も足し

口こみを看板にする味の冴え

ステッキを持つと武芸者身構える

敵方に芸の細かい裏をかく

獅子舞を継いで覚えた郷土愛

朴念仁むつり男の隠し芸

無芸大食砂漠で砂を噛む余生

津軽の海の鳴咽を聞かす芸の域

民芸は無名の腕で守り抜く

芸達者妻を泣かせてきた顔だ

芸のない私雑巾掛けが好き

いざという時へ秘かに隠し芸

はびきの市民川柳会

安芸田泰子報

へんなことばかり続いている平和

愚痴聞いてもらえない名医村にいて

よつこらしよ今日はへん言ったかな

夏野菜今年も植えた生きている

婚家から他人行儀な娘の電話

酒友逝く一人静かに偲び酒

辰子

かつみ

四三郎

昇

泰子

昭平

しげお めぐみ 公子女 紀美女 ふみえ 紀久子 正博 美子 千寿子 誠子 富美子 二南 豊太 良 射月芳 吞天 佐代子 君枝 稚代 克子

孫の癖俺に似てきて気にいらぬ
核実験テストだけだと言わせない
それなりの理由でサツキ狂い咲き
譲るものないので子供仲が良い
靴一足孫が初給のプレゼント
父親は変な癖まで子に譲り

涙腺の弱さを衝いてくるテレビ
古稀がもうそこまで待ってる五月晴れ
天にまで弾み行方を見失う
掌の中のマリは弾んで行ったさき
核ゼロのその日弾んでいた地球
嘘言わねばならない顎をなでている
魔女のアゴです簡単に人を喰う
わたしの願ひ顎外すほど笑いたい

北京原人の顎に文化の跡がある
あごを出して歩いていきます未知の道
特ダネを光らすデスクペンの沓え
泣く机男に一つあれば足る
天才の机に罪と罰がある
いいネタも無くてデスクの渋い顔
デスクプラン漏れたか蟻が寄ってくる
天下りデスクに札が詰めてある
春の机に夢が一ぱい積んである
父の日はせめて亡夫の墓参り

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報
炎の色に神乗り移る新能
火消し壺でくすぶる僕の心意気
残り火が風の流れをたしかめる

俊男 末一 敦子 一壺 猿杓 志洋 重人 吐来 一屯 昭子 ダン吉 扶美代 美代子 みつこ 元紀 利武 洞庵 聡 たけし 庸佑 りつえ 絢子 敏

ヤキモチの激しい妻だ火の性か
ひとつひとつ箱開けてみる亡母の部屋
魚ごころわかったよな釣り自慢
言い分はわかるが力抜きなはれ
青い目に道を教える片言で
リストラがまさかの白羽突き刺さる
まさかとは逆縁に泣く春彼岸
トウルーズまさか一点とれぬとは
悪人になれそうもない奴
守るべきもの何もなく強がり
一言で打てば響いた勘のよき
手のうちをすつかり読んでいたメガネ
短気だが信号ちゃんと守っている

赤い糸アツアツ切れてばかりいる
毒だつて良いき元気になるなら
悔いはなし自分で敷いた道だもの
ミニトマト育てて無事な老夫婦
毒きのこの見分けが僕にはわからない
いい顔で飾るサラダのミニトマト
雀百までもやもやもやと老いてゆく
毒のある言葉は笑って聞き流す
老春というほとぼりを抱いてねる
月夜茸孤独な日々を繰り返し
脇役の涙が乾く風を待つ
毒味した大吟醸で腰が抜け
ミニでもいいトマトの赤を保ちたい
タイオキシンに慌てふためくかたつむり

川柳塔みちのく 小寺 花峯報
毒味した大吟醸で腰が抜け
ミニでもいいトマトの赤を保ちたい
タイオキシンに慌てふためくかたつむり

柳宏子 求芽 一笛 ただし きく子 悟郎 登代子 博史 重人 吉太郎 知香子 しげお 正坊 井蛙 龍人 柳々 北歩 隼人 千加子 ツネ ふさゑ ヒサ子 しげる 銀波 花匠 雅子 順風

土壇場でダイビングするカタツムリ
罪の手でうっかり触れたミニトマト
少女期を迎えて赤いミニトマト
トリカブト妻が般若の面になる

南大阪川柳会 吉川 寿美報
知能とは別世渡りの下手な人
やさしさは知能指数ではかれない
レモン齧って雑魚雑魚なりの知恵しほる
知恵の輪がとけて花屋で小半時
偏差値も鼻も低いわたしの子
まな板に刻まれていた母の知恵
台風の子知があるのか果が低い
素晴らしい知恵だきれいな蜘蛛の網
同居して緑茶紅茶とむつまじく

佳句地十選 (7月号から) 佐 治 千加子
ふくろうの真うしろ風が守っている
隅っこのは素顔のままが良い
葉桜のベンチ大人の恋らしい
魚心計る物差しなど持たぬ
生年月日だけは内緒にしておいて
何もかも受け入れ海が荒れている
全快へ千羽のツルを飛ばさんか
評論家 右も左も斬つておくれ
保護色をまとうて群へまぎれ込み
末席に座って風を読んでいる

花壇場 土壇場でダイビングするカタツムリ
罪の手でうっかり触れたミニトマト
少女期を迎えて赤いミニトマト
トリカブト妻が般若の面になる

一花 一人 花峯 五薬庵 庸佑 朝子 萬的 柳伸 重人 東雲 志華子 頂留子 日枝子 吐来 黙人 房子 碧 坊太郎 正坊 さと美 武庫坊

言いつくをするなど苦いお茶を飲む
 ポチとタマいちばん知恵のない私
 虚栄心のぞく茶席の太鼓帯
 茶番でも接待という遍路道
 茶摘唄も背負った赤袴
 カネないが注目はする円と株
 マスコミの注目浴びてから墮ちる
 注目を叫びはねてるムツゴロウ
 挑戦はうけよう青い空がある
 挑戦する意欲へこち向く女神
 やつと出来た逆上がり豆つぶれてる
 挑戦へ熱い支援の声が湧く
 生涯の挑戦父に追いつかず
 飲むたびに禁酒禁煙すると言つ
 見つめられベース崩さぬかたつむり
 背伸びした調子が狂う貸渡り
 借りて来た知恵で一気にまくしたて
 三振をする気はしない調子よき
 挑戦の気力失う足と腰
 調子づく菊丸のやめさらせえ
 テンポよく司会が運ぶ式次第

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

正博 道子 久峰 清水 日出子 哲郎 直子 秋子 ダン吉 文秋 千里 悟郎 蛙 和歌子 たもつ 憲太郎 三男 民代 勝美 昭二 章久

香弘 住直

極楽へ行ける切符はないかないな
 川柳塔きやらばく
 政岡日枝子報
 久米城のまぼろしを追う夜の街
 遊びが過ぎてとかけの尻尾切っている
 ちぐはぐに皿を回している家族
 向こう岸男待たせる余命表
 しばらくは目を遊ばせる金魚鉢
 無防備に庭で遊んで蚊の餌食
 鬼になって遊びの仲間にしてもらう
 過疎の村ホテルは人を誘っている
 大屋根に父のすわった場所がある
 額の花にも知らずに今日も咲く
 したたかな沖よそれでも円を描く
 埋もれ火も風のさそいで燃えている
 プライドの衣を脱いで妥協する
 立ち読みで何を覚えていたのか
 母の日に母を慕って花が来る
 この風の誘いにのれば戻れない
 八十路まで夢いっばいのスケジュール
 母の忌はあじさいの彩つゆしとど
 半分は親にすがって組むロイン
 足裏によろこびくれた砂の浜
 ビートルズ聞くわたくしは十五歳
 頭痛風邪のとき私をとりもどす
 旅日記昨日の嘘を織り交せる

川柳大阪

坊農 柳弘報

腐つてるたぶんいけるよ出してみよ 真紀

清芳 瑞枝 日枝子 千代 文葉 ふみ 恵子 花子 八重子 晶子 ゆき 千春 春枝 亜弥 弘子 田鶴 玲子 寿々子 すみゑ 蘭 正子 天雀 荒介

いつまでも愉快な顔と言われたい
 恋しいと思えるうちはまだ若い
 アルバムに恋しい思い出閉じ込めた
 裏切った恋しさ今も生きている
 俺だけの涙の匂いと山の青
 外人に聞かれ苦笑で逃げる僕
 ふるりに恋しい青春おいてきて
 スリルある恋愛ごっこもう卒業
 幼児から席を譲られ照れしました
 空中でつかむ手首に命かけ
 逆転のスリル勝者も泣いている
 寝つかれずそっと開けてる冷蔵庫
 相槌を打って歩けた頃がある苦笑
 スタスタと歩けた頃が恋しいな
 老いの部屋明日の思案が埋もれてる
 人の知恵絶叫マシンの音が銭になる
 危ないぞスリルの輿の落とし穴
 恋しさはいつか冒険そのかす
 差をつけた敵が恋しい輪となり
 故郷が恋しくなつてユーターン
 絶叫のスリルに酔っている女
 旅三日うちの茶漬が恋しいなり
 初恋に似た恋しさで孫を待ち
 汚れた街で恋しい空の青
 ゆっくりと雲は恋しい母になる
 ふるりは愉快な話してくれる
 核爆発のスリルに平和かけますか
 よく進む時計だ恋しい人といる
 カーネーション恋しい夢よ母の日よ

高1 須賀夫 まゆ子 末坊 信醉 醉照 多香 喜楽 呷笑 かよこ 青道 醉舟 美花 川童 柳昌 比呂志 希久志 鉄心 雅果 柳宏子 一步 まつお 笑風 金太 ダン吉 重人 柳弘

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

心まで縁になつて跳んでみた
初夏の風緑の風を持つてくる
さくらには明日の約束など出来ぬ
さくら咲くまでこの先のスケジュール

恵美子
好栄
ちよえ

川柳クラブわたの花

吉村 一風報

春だろつか夏だろつか温度計
この花が散るとは見せぬ牡丹咲く
新郎がたじろいでいるかすみ草
正直に暮してたじろぐことはない
実印といわれたじろぐばかりなり
唐辛子の前にたじろぐ甘い汁
山ざくら雑木林のかんざしか

英子
鈴江
かつ子
聖子
博利
清泉
白汀

花びらよそんなに急ぐ恋ですか
ばあちゃんの愚痴うんざりと猫の耳
古稀の春付けてはずしてイヤリング
お互いの思いがあつて夫婦旅
ふうふうとうどん食べれる友がいる
吊り橋を一気に渡る五月晴れ
一つ屋根違ふ空気を吸っている
塾終る母のうどんが待っている
遠い日をうっとり惚ぶ埴輪の目
ルノアールの裸婦にうっとりしてしまふ

けいこ
いつふみ
春江
知佐子
美代子
明
八寿子
宏
剛治

うどんつゆ残し猫にも分けてやり
橋が出来讃岐うどんの店が混み
古タンス母のぬくもり光つてる
素うどんと言えばみんなが顔を見る
旅の宿気になる二人連れがいる
古い古い言うが年寄り知恵袋
たこやきとけつねうどんの街に住み

一
ますみ
トシエ
まさと
明子
鬼遊

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

友情をつなぐ糸目は濃むらさき
謎追えば玉虫色の鳩が出る
孫よりカーネーションしばし母想う
雨の日は雨を見ている物思い
また一つ謎を残して命消え
風みどり友と揃いの帽子買つ
神獸鏡謎の光を磨き上げ
クラス会友の仇名はポンと出る
どうしてが続く終止符うつ日まで
友達がいるので生きて行けそうだ
発掘の銅鐸更に謎を産む
縁かな綾取りのごと友とあり
泣けるだけそつと泣かせてくれる友
はしご酒誘う友の背叩きよい

てる
ミサラ
キク子
みつ子
藍
哲子
トミエ
貴代子
澄子
いわゑ
武庫坊
年代
はつ絵
民平

世が世なら等とルーツの酒を酌む
初恋のルーツは土手のねじり草
ウクライナのルーツ奏でるバラライカ
運ひらくすべての音を断ち切つて
音沙汰が盆暮れだけの帰省かな
バタンの音ポストのぞくとらしのみ
野菜切る外国産の音のして
深追い止める一病持つてから
風を待つ巢立ちの雛の真剣に
衣食足りてまだ捨てられぬ欲を持ち
権力の落差を持つている影絵
他人には戻れぬ橋を渡りきる
庭に咲くポピーは風のプレゼント
売りに出で本舗と元祖連れ合つ
娘の日記押えて知らん振りをする
チャンスだ結び直した靴の紐
席譲りうけて年の深さしる
衣更え心替えには距離がある
怠けものの鶴もいる鶴匠の眼の中に
プロセスが違ふ人権の逆立ち

弘治
ヤス子
武庫坊
芳子
昭三
千恵
ハツエ
富美子
昌子
愛
歌子
静

世が世なら等とルーツの酒を酌む
初恋のルーツは土手のねじり草
ウクライナのルーツ奏でるバラライカ
運ひらくすべての音を断ち切つて
音沙汰が盆暮れだけの帰省かな
バタンの音ポストのぞくとらしのみ
野菜切る外国産の音のして
深追い止める一病持つてから
風を待つ巢立ちの雛の真剣に
衣食足りてまだ捨てられぬ欲を持ち
権力の落差を持つている影絵
他人には戻れぬ橋を渡りきる
庭に咲くポピーは風のプレゼント
売りに出で本舗と元祖連れ合つ
娘の日記押えて知らん振りをする
チャンスだ結び直した靴の紐
席譲りうけて年の深さしる
衣更え心替えには距離がある
怠けものの鶴もいる鶴匠の眼の中に
プロセスが違ふ人権の逆立ち

光穂
義芳

ロース川柳会

山崎 君子報

友情をつなぐ糸目は濃むらさき
謎追えば玉虫色の鳩が出る
孫よりカーネーションしばし母想う
雨の日は雨を見ている物思い
また一つ謎を残して命消え
風みどり友と揃いの帽子買つ
神獸鏡謎の光を磨き上げ
クラス会友の仇名はポンと出る
どうしてが続く終止符うつ日まで
友達がいるので生きて行けそうだ
発掘の銅鐸更に謎を産む
縁かな綾取りのごと友とあり
泣けるだけそつと泣かせてくれる友
はしご酒誘う友の背叩きよい

てる
ミサラ
キク子
みつ子
藍
哲子
トミエ
貴代子
澄子
いわゑ
武庫坊
年代
はつ絵
民平

花びらよそんなに急ぐ恋ですか
ばあちゃんの愚痴うんざりと猫の耳
古稀の春付けてはずしてイヤリング
お互いの思いがあつて夫婦旅
ふうふうとうどん食べれる友がいる
吊り橋を一気に渡る五月晴れ
一つ屋根違ふ空気を吸っている
塾終る母のうどんが待っている
遠い日をうっとり惚ぶ埴輪の目
ルノアールの裸婦にうっとりしてしまふ

けいこ
いつふみ
春江
知佐子
美代子
明
八寿子
宏
剛治

うどんつゆ残し猫にも分けてやり
橋が出来讃岐うどんの店が混み
古タンス母のぬくもり光つてる
素うどんと言えばみんなが顔を見る
旅の宿気になる二人連れがいる
古い古い言うが年寄り知恵袋
たこやきとけつねうどんの街に住み

一
ますみ
トシエ
まさと
明子
鬼遊

ロース川柳会

山崎 君子報

友情をつなぐ糸目は濃むらさき
謎追えば玉虫色の鳩が出る
孫よりカーネーションしばし母想う
雨の日は雨を見ている物思い
また一つ謎を残して命消え
風みどり友と揃いの帽子買つ
神獸鏡謎の光を磨き上げ
クラス会友の仇名はポンと出る
どうしてが続く終止符うつ日まで
友達がいるので生きて行けそうだ
発掘の銅鐸更に謎を産む
縁かな綾取りのごと友とあり
泣けるだけそつと泣かせてくれる友
はしご酒誘う友の背叩きよい

てる
ミサラ
キク子
みつ子
藍
哲子
トミエ
貴代子
澄子
いわゑ
武庫坊
年代
はつ絵
民平

花びらよそんなに急ぐ恋ですか
ばあちゃんの愚痴うんざりと猫の耳
古稀の春付けてはずしてイヤリング
お互いの思いがあつて夫婦旅
ふうふうとうどん食べれる友がいる
吊り橋を一気に渡る五月晴れ
一つ屋根違ふ空気を吸っている
塾終る母のうどんが待っている
遠い日をうっとり惚ぶ埴輪の目
ルノアールの裸婦にうっとりしてしまふ

けいこ
いつふみ
春江
知佐子
美代子
明
八寿子
宏
剛治

うどんつゆ残し猫にも分けてやり
橋が出来讃岐うどんの店が混み
古タンス母のぬくもり光つてる
素うどんと言えばみんなが顔を見る
旅の宿気になる二人連れがいる
古い古い言うが年寄り知恵袋
たこやきとけつねうどんの街に住み

一
ますみ
トシエ
まさと
明子
鬼遊

ロース川柳会

山崎 君子報

友情をつなぐ糸目は濃むらさき
謎追えば玉虫色の鳩が出る
孫よりカーネーションしばし母想う
雨の日は雨を見ている物思い
また一つ謎を残して命消え
風みどり友と揃いの帽子買つ
神獸鏡謎の光を磨き上げ
クラス会友の仇名はポンと出る
どうしてが続く終止符うつ日まで
友達がいるので生きて行けそうだ
発掘の銅鐸更に謎を産む
縁かな綾取りのごと友とあり
泣けるだけそつと泣かせてくれる友
はしご酒誘う友の背叩きよい

てる
ミサラ
キク子
みつ子
藍
哲子
トミエ
貴代子
澄子
いわゑ
武庫坊
年代
はつ絵
民平

花びらよそんなに急ぐ恋ですか
ばあちゃんの愚痴うんざりと猫の耳
古稀の春付けてはずしてイヤリング
お互いの思いがあつて夫婦旅
ふうふうとうどん食べれる友がいる
吊り橋を一気に渡る五月晴れ
一つ屋根違ふ空気を吸っている
塾終る母のうどんが待っている
遠い日をうっとり惚ぶ埴輪の目
ルノアールの裸婦にうっとりしてしまふ

けいこ
いつふみ
春江
知佐子
美代子
明
八寿子
宏
剛治

うどんつゆ残し猫にも分けてやり
橋が出来讃岐うどんの店が混み
古タンス母のぬくもり光つてる
素うどんと言えばみんなが顔を見る
旅の宿気になる二人連れがいる
古い古い言うが年寄り知恵袋
たこやきとけつねうどんの街に住み

一
ますみ
トシエ
まさと
明子
鬼遊

ロース川柳会

山崎 君子報

友情をつなぐ糸目は濃むらさき
謎追えば玉虫色の鳩が出る
孫よりカーネーションしばし母想う
雨の日は雨を見ている物思い
また一つ謎を残して命消え
風みどり友と揃いの帽子買つ
神獸鏡謎の光を磨き上げ
クラス会友の仇名はポンと出る
どうしてが続く終止符うつ日まで
友達がいるので生きて行けそうだ
発掘の銅鐸更に謎を産む
縁かな綾取りのごと友とあり
泣けるだけそつと泣かせてくれる友
はしご酒誘う友の背叩きよい

てる
ミサラ
キク子
みつ子
藍
哲子
トミエ
貴代子
澄子
いわゑ
武庫坊
年代
はつ絵
民平

花びらよそんなに急ぐ恋ですか
ばあちゃんの愚痴うんざりと猫の耳
古稀の春付けてはずしてイヤリング
お互いの思いがあつて夫婦旅
ふうふうとうどん食べれる友がいる
吊り橋を一気に渡る五月晴れ
一つ屋根違ふ空気を吸っている
塾終る母のうどんが待っている
遠い日をうっとり惚ぶ埴輪の目
ルノアールの裸婦にうっとりしてしまふ

けいこ
いつふみ
春江
知佐子
美代子
明
八寿子
宏
剛治

うどんつゆ残し猫にも分けてやり
橋が出来讃岐うどんの店が混み
古タンス母のぬくもり光つてる
素うどんと言えばみんなが顔を見る
旅の宿気になる二人連れがいる
古い古い言うが年寄り知恵袋
たこやきとけつねうどんの街に住み

一
ますみ
トシエ
まさと
明子
鬼遊

ロース川柳会

山崎 君子報

友情をつなぐ糸目は濃むらさき
謎追えば玉虫色の鳩が出る
孫よりカーネーションしばし母想う
雨の日は雨を見ている物思い
また一つ謎を残して命消え
風みどり友と揃いの帽子買つ
神獸鏡謎の光を磨き上げ
クラス会友の仇名はポンと出る
どうしてが続く終止符うつ日まで
友達がいるので生きて行けそうだ
発掘の銅鐸更に謎を産む
縁かな綾取りのごと友とあり
泣けるだけそつと泣かせてくれる友
はしご酒誘う友の背叩きよい

てる
ミサラ
キク子
みつ子
藍
哲子
トミエ
貴代子
澄子
いわゑ
武庫坊
年代
はつ絵
民平

花びらよそんなに急ぐ恋ですか
ばあちゃんの愚痴うんざりと猫の耳
古稀の春付けてはずしてイヤリング
お互いの思いがあつて夫婦旅
ふうふうとうどん食べれる友がいる
吊り橋を一気に渡る五月晴れ
一つ屋根違ふ空気を吸っている
塾終る母のうどんが待っている
遠い日をうっとり惚ぶ埴輪の目
ルノアールの裸婦にうっとりしてしまふ

けいこ
いつふみ
春江
知佐子
美代子
明
八寿子
宏
剛治

うどんつゆ残し猫にも分けてやり
橋が出来讃岐うどんの店が混み
古タンス母のぬくもり光つてる
素うどんと言えばみんなが顔を見る
旅の宿気になる二人連れがいる
古い古い言うが年寄り知恵袋
たこやきとけつねうどんの街に住み

一
ますみ
トシエ
まさと
明子
鬼遊

ロース川柳会

山崎 君子報

友情をつなぐ糸目は濃むらさき
謎追えば玉虫色の鳩が出る
孫よりカーネーションしばし母想う
雨の日は雨を見ている物思い
また一つ謎を残して命消え
風みどり友と揃いの帽子買つ
神獸鏡謎の光を磨き上げ
クラス会友の仇名はポンと出る
どうしてが続く終止符うつ日まで
友達がいるので生きて行けそうだ
発掘の銅鐸更に謎を産む
縁かな綾取りのごと友とあり
泣けるだけそつと泣かせてくれる友
はしご酒誘う友の背叩きよい

てる
ミサラ
キク子
みつ子
藍
哲子
トミエ
貴代子
澄子
いわゑ
武庫坊
年代
はつ絵
民平

花びらよそんなに急ぐ恋ですか
ばあちゃんの愚痴うんざりと猫の耳
古稀の春付けてはずしてイヤリング
お互いの思いがあつて夫婦旅
ふうふうとうどん食べれる友がいる
吊り橋を一気に渡る五月晴れ
一つ屋根違ふ空気を吸っている
塾終る母のうどんが待っている
遠い日をうっとり惚ぶ埴輪の目
ルノアールの裸婦にうっとりしてしまふ

けいこ
いつふみ
春江
知佐子
美代子
明
八寿子
宏
剛治

うどんつゆ残し猫にも分けてやり
橋が出来讃岐うどんの店が混み
古タンス母のぬくもり光つてる
素うどんと言えばみんなが顔を見る
旅の宿気になる二人連れがいる
古い古い言うが年寄り知恵袋
たこやきとけつねうどんの街に住み

一
ますみ
トシエ
まさと
明子
鬼遊

独立をしました飯も炊けました
朱雀門月は昔のままならず
絵画展開くきれいなおばあさん
欲の夕マ磨くときおき不整脈
年寄りにせんじ薬をすすめられ
人生のスパイスひまが効いてくる

川柳高知

川竹

松風報

紫香 比ろ志 年代 和歌子
白溪子 久子

千体流し心を洗う川がある
川上に住む人のあり捨て青菜
川釣りを覚えてからの日曜日
花びらも小川に流れ春は行く
心の灯消せぬまだまだ夢がある
二次会へ誘ってくれるうちが花
地球儀へ外側だけは丸く見え
一車線シルバーマークに引きずられ
囑託の気楽さ夫の庭いじり
さりげなく給料前の冷や奴
また不在集金人の独り言
集金へ居留守をつかう左前
集金は頬に傷ある方が来る
集金が美人で無理をして払い

堺川柳会

河内

月子報

有佳 テルミ 愛宏 幸雄 孝雄 松風

人生の裏を見過ぎてだまりぐせ
すんなりと素直になれたうれしい日
手品師の裏はベールのまがよい
飲み足りぬ同士集めた爛冷まし
のんびりのどの芽も母は可愛がり

春蘭 頂留子 文 柳宏子 楓

女心素直に解けぬ秋の空
セピア色写真の裏の十七歳
燃えるもの探しあぐねて遠花火
のどごしのどう言いましょか缶ビール
野も山もどこ歩いても花粉症
能面の裏にきびしい顔がある
のし付けてどきと返す借りがあ
り野茂の腕DJヤース切って買
うメッツ おめでとう裏は知らない
ことにする のど仏どうにも嘘が隠せない
のみ薬どぶへ落としてから元氣
プライドが気持の裏で戸を立て
るのんびりと鈍行もよし彼とな
ら二枚目も花火のように消えて
ゆくオーイハイ死ぬまでこれ
で行くのかな 政治家の裏口カ
ギはかけてない 妻が吹くラッ
パの裏を考える 素直さがは
つばつ消えて反抗期 すまな
いに言葉の裏を見抜かれる
病む人に言葉の裏を見抜かれ
る裏口においしいものがよく
届く 脳みそをどんどん使
って掻き混ぜる 忠告を素直
に受けた軽い靴 口裏を合
わせと鬼が寄ってくる のど
かさに童謡の出る川下り

東雲 五月 半銭 哲平 二南 紀美女 美代子 りつこ みつこ 扶美代 冬虹 ちゃ子 暁子 日出子 洋子 孝子 勇太 八千代 かりん 小雪 満州 梓 洞庵 健吾

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太報

お彼岸の長い読経で眠くなる
地下道を出て方角がわからない

富代 江美

住職が衣を脱いで涼をとる
赦す気になると眠りが深くなる
古い殻を脱いで男は自立する
フランスの輪から外れたふたり旅
北へ行く汽車の尾灯がもたの悲し
教科書を開くとすぐに眠くなる
逢っただけで良いと言われて五十年
約束を果してからはよく眠る
梅雨空に紫陽花寺へ誘われる
聞き返すお国訛りがなつかしい
人前で脱ぐのが嫌な羞恥心
ユニホーム脱いで勝利の汗を拭く
楷書より草書が似合う我が自伝
歩きながらの電話段差に躓いた
君のため一肌脱いだ日の若さ
ファックスで届くかあるらア
コール 手古摺った末の息子を介
護され 眠る子を覗いてふたり
だけのめし 親の目にネンネ
と思っ娘が嫁ぎ

一閑 鹿太 いわお 満寿蔵 鈴 正治 すみ 昌子 向西 六浦 弘治 勇次郎 夢之助 十四郎 澄子 石舟 紫香 柳宏子

城北川柳会

神夏磯典子報

旧姓の文字薄れゆく雑の箱
宇宙へのチャンス求めて殺到す
一粒の種子いにしえを語り出す
たつぷりと喋って明日会いましょ
う 粒揃いこの作品と決めかねる
ペランダの花を見ている亡母の星
運命を断ちきるように焼く手紙
よく見れば誰かに似てる犬の顔

春蘭 賢子 千恵子 とし子 美代子 秀夫 史風 順三

太陽に手紙出そうか菜種梅雨

母の愛たつぷり吸つた素直な子

車間距離あけて引つ越す子の居宅

病んで見て姑とおんなじ溜息よ

花見酒だからなりふりかまわない

安らぎを求める森が見つからぬ

毎日がチャンス毎日陽は昇る

再びの逢瀬を胸に墓まいり

プランドリネギ三日見ぬ間の葱坊主

三代目ピンチもチャンスもわからない

高給と仕事か比例しない人

朴念仁燃えるレターへ知らんぶり

妻の乱たつぷり胡椒かけてある

肩車した子の肩に背負われる

チャンスには弱いが謝るのが上手

絶対のチャンスねらっているカラス

三叉路で決断の靴投げている

つまらない男大将棋の神様も

歩の持ったプランドリチャンス狙ってる

母の日は母知らぬ母が母恋う日

微笑めばほほ笑み返す野の仏

一粒の種が夢見る千年樹

三幸川柳教室

三宅 保州報

お膳立て出来てトップが顔を出し

花冷えへ二度の出番を待つ羽織

そろそろと姑の出番だ祭りずし

今日という舞台ぶつつけ本番だ

一ランク下げれば出番きつとある

ただし

久留美

佐津乃

和歌子

トヨ子

寿美子

求芽

義江

登美子

あやめ

博遊

達子

典子

白峰

千歩

朝子

睦子

倫子

昭子

あい子

高栄

公一

助走して出番待ってるビッグバン

虚勢張るネズミが出番狂わせる

囚らざるも出番をくれた消去法

朝からお琴あなた主婦業してますか

主のないピアノが巨体持て余す

パイオリン外す一人の子が目立つ

心奥の楽器あなたと共鳴す

ふる里の山河忘れじハーモニカ

インテリアにされてピアノは石になる

サツタの音色が毛穴から沁みる

またふたたびだから仲よくお茶をのむ

夫婦だから言えぬ台詞の二つ三つ

下心ないお付き合いだから好き

単純だからおいしい餌にすぐかかる

好きだからつい見落としたりバラの刺

素手だからにんげんいつも温かい

信じてただだから悔しさ身をよぎる

他人でないだから一言多く言う

砂を吐きやっぱり貝の自閉症

金銀の砂子わたしの隠れ糞

砂漠化が始まっているすま風

進退を決めて最後の砂を吐く

風紋を風のタクトが変えたがる

病休の上司が映る砂かぶり

楼蘭の美女ら目覚めよ黄砂降る

ほたる川柳同好会

井上

自尊心守ったけれど頑固者

守備範囲老いにあわせて狭くする

秀男

敏子

利治

みね

町子

かず子

美智子

桂香

正一

章子

昭枝

百合子

登美代

さち子

嘉平

和子

千秀

忍

当代

碧

正圃

三千子

美子

鉄治

朱夏

直次報

馬洗

よしろう

あちこちのお守りどれが効いたやら

守るも無いのには鍵はかけて寝る

しきたりを守っていつか隙間風

夜も更けてボチが私を守る番

子を守るためなら鬼になれる母

次の世もついて来る気の妻が居る

持ち駒が予定通り動かない

予定にはなかった椅子に浅くかけ

予定日も視野に華燭の日を決める

子定外収入無縁の年金者

不精者スケジュールだけ超過密

阪大の合不合人格僅かの差

エアロビクス男は僅か二人です

善根を僅かずつだが積んでいる

今思えばほんの僅かな隙間風

僅かだがしこり残して和解する

ごく僅か配置の違った目鼻立ち

わかるはずなのに女房の目が違っ

分ってるつもりのままに行き違っ

わかったと言いう子に母の不安顔

京都塔の会

松川

杜的報

一徹が守る古寺の文化財

湯どうふの優しい味に亡母思っ

油照り京の蹴上は青嵐

有朋の偉業を耳に風渡る

極楽のひととき無想の無鄰菴

池泉回遊は輪廻転生かも知れぬ

インクラインの昔へ誘う道がある

清

保子

昭子

和歌子

セツ子

明光

ただし

直次

正三郎

祥風

勝

博史

善守

喜美子

敞子

久子

まみ子

正安

桂子

雪子

雪子

女

とみ子

弘道

達子

とし子

倫子

磯

元老は寂しき人や無鄰菴
無鄰菴とびつきそくに鯉が寄る
匂い立つ草も女も無鄰菴
無鄰菴象の散歩をかいま見て

あの時に戻る五月の疎水べり
朝鮮の石仏頭さわつとく

吸殻の数だけ脳が病んでいる
少し脳休ませてやる青葉風

人間の脳より勝る武者人形
脳死是非宗教論が水を差す

平等の脳に序列をつける神
脳味噌の足らん夫婦で仲がよい

頭脳線七十歳の反抗期
芋の蔓むさばり食った暗い青春

役付いて台詞むさばる目がすずし
空想の中で貴方を殺します

みよちゃんと花のアーチをくぐりたい
空想にひたるゆとりがありがたし

空想を描く私の空がある
空想と理想のはき間で揺れている

空想の好きな少女は翔びたがる
脳天をつんざくような計報聞く

空想の世界で私シンデレラ
陸子

いずも川柳会

園山多賀子報

理屈言う女が持つてる降圧剤
理屈より経験よもぎ血が止まり
水面下理屈をこねる雑魚の群
割り切れぬ理屈残して出る家裁

満江 蘭水 多賀子 茂美

正坊 シマ子 杜的

芳子 史風 豊次

諷云児 柳宏子 友照

修水 欣之 求芽

和子 波留吉 百合子

寿美子 紫香 美智子

高栄 吉之助 よ志子

典子 陸子

呆けかけた母の理屈を聞いている
へそくりが増えると謀反考える
友達を増やして母の笑い皺
やさしくなつてやさしい友が増えてきた

手荷物も増えて終りに近い旅
増え過ぎて個性をなくす蘭の花
我儘者が増えるどの枝から切ろう
塩茹での豆に晩酌また増える

こだわりを捨てたら夢が動き出す
束の間の夢に踊つたら花は散る
母と娘の夢が広がる展示場
目が覚めて夢の続きを見そこない

それなりの夢を抱いているループタイ
罪いくつ秘めて女は爪を染め
地下茎に罪をかぶせて竹伸びる

罪ほろぼしたくて途中下車をする
恍惚の恋恍惚の罪つくる
駱駝には駱駝の罪はわからない

刺のある言葉が罪をつくつてる
接待が時に罪とは胃は知らず
賞味期限切れた卵に罪はない

こっそりと罪を金庫に入れておく
別れた人が喝采を浴びている
花になるか仏になるか別れ道

突然の別れに水が淀み出す
悲しみに花一輪を添えて通夜
柳柳塔唐津支部

久保 正剣報

純子 与根一 治代

昌枝 ちかし 一葉

文子 おしえ あきら

芙佐子 房子 明子

叮紅 きみえ 草丘

篤子 青湖 圭詩朗

まこと 芳枝 久子

多喜 寿美 章峰

れいじ 義良

父の日はあるだけで良し母強し
乾盃の指名が続く傘寿坂
気付いたら百歳でしたと深い皺
ゴミよりも党の分別してみたい

サミットで金貨す話して帰り
凄い力で城の石垣崩す雨
古い二人趣味が違つて連れ添つて
面会の宿川の字に寝た記憶

私でも飼つてますの疥の虫
新品のままでウオーカー古くなり
花丸の嫁にも割りたい皿がある

弘 幸夫 晴翠 勝視 久仁於 虹江 實

四郎 高明 正劍

米寿万歳人生の勝ち名乗り
勝つ術を覚えトツプを走り出す
喜寿米寿家の宝にして栄え
花が咲き実が成り菜園よろこばす
猪も喜んでる手を植え
嬉しいね一人一人に案内状
何よりのよろこび余命畑ゆく
喜びの涙誰にもはばからず
したたかに生きる喜びを探して
仁王様の喜ぶ顔をまだ見ない
喜ばすことも上手な聞き上手

うぶみ川柳会

西村

黙光報

大好きなおぼろ昆布を座右に置く
二日酔いおぼろのまま出勤す
春おぼろこころ耕す野良仕事
おぼろ月気弱い俺に味方する
春おぼろ別れ話は止めにする
おぼろげに見えてる時が花ですよ
あの人に多分貸したと思う本
悲しみも時がおぼろにしてくれる
安定剤飲んでおぼろに落ちてゆく
何食わぬ顔して耳を立てている
深刻に耳傾ける介護法
ご破算にしたい話がたまる耳
耳底に亡母の教えが消えてない
美人ママの耳うち高いものにつき
耳打ちをしている僕のことだろう
思い出の亡父のブラシで靴磨く

菁居 節夫 貞子 房子 煎 八重美 千年枝 洋之祐 栄恵 蝸牛 一路

靴履いたままでブラシをかけて出る
ふるさとの風が丸ごとブラシする
隅々を洗うブラシがちびてきた
ぬれ衣にブラシをかけて潔く
誤字脱字脳へブラシをかけ忘れ
紅白の幕はりめぐらせて今日佳き日
カーテンの後ろで何やらもめている

サークル檸檬

小林 一夫報

後悔をびしやりと止めた砂嵐
消しゴムはもう使わない余命表
今死んでもきつと後悔しないだろう
親孝行出来ないままの花手桶
夢のつづきが見たくて回る観覧車
はじめから分かっていたら悔いはない
後悔のツケ埋められぬ孤独感
小さな痛み走って 習慣を破る
後悔を胸にしまつて立ち上がる
人形が捨てられている梅雨の川

川柳東大阪

森下

愛論報

蛇口から朝のドラマが喋りだす
つくばいの水名月を抱いている
水みたいな空気がみたい夫婦です
水を得た魚のように妻の留守
家計簿の黒字を守る地味な妻
地味なものの着てても変わらぬ美しさ
地味づくり夫と歩くときだけは
恥じつつ晒す地味にも慣れている

ユリ子 ひろ子 登美枝 螢 黙光 静生 天雀 いわゑ あずき みつ子 房子 楓楽 正坊 智恵子 希久子 雅子 一夫 太郎 湖風 賢吾 晋吾 治也 文秋 シマ子 雅文

人間失格こんなにも多い永田町
逃げ口上うまいおとこの手を離す
二番煎じの誘い言い訳考える
ラーメンにこだわりを持ち食べ比べ
ラーメンを吸り饒舌ひと休み
即席ラーメン男の寒いシルエツト
本心をぼつり雨の夜の別れ
別れても地球は離れたくはない
五時からの地味なお人の裏の顔
三面鏡地味な化粧でする懺悔

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

追伸に想いをこめたペンのあと
追うよりは追われてみたい恋のみち
また楽し長生きだけを追う暮し
余生も何にも追うものが無い
追いついても追い越せぬ母がいる
追い付いたは錯覚やはり越せぬ父
青空よなぜ人間は騙しあう
昨今は親の小言も上の空
悪人が一人もない空の青
限りなく優しいものは故郷の空
低音の男うつ病になつて
胡散臭い奴やと夫のうなり声
低音の亡父の小言が胸に生き
低音が太いずしりと響く父の声
低音で女を始末する話
肝心の話になると外される

ばっは 朝子 緑 庸佑 たもつ 信治 萬的 真柳 恭昌 愛論 大輔 秀夫 杜的 節子 澄子 一笛 靖巳 恭子 とみ子 柳宏子 石舟 比ろ志 しげお 重人 よ志子

少年よ仲間外れを恐れずに
正論を通し梯子を外される

はつらつと春は胸から踊りだす
はつらつと汗が弾ける白いシャツ

はつらつなブレー怪我など苦にならず
はつらつと少女バイクで風を切る

姑さんを手本に主婦の座を守る
泣き落しの術にかかったお人好し

母の部屋みんなゆるんだ顔でいる
氣いつけや言うてた友の計報くる

優しい母がときには鬼をふところに
影法師手の鳴る方へついで行く

フランスへ行こうかボール蹴り上げて
あやめ 風云児 晴美 泰雄 白浜子 紫香 波留吉 スミ子 茶の子 克治 和子

影法師手の鳴る方へついで行く
和子

フランスへ行こうかボール蹴り上げて
和子

川柳塔ふくべ 橋本多哥由報

骨つばに匂い袋を入れておく
甘く見て袋小路に迷い込む

つまずいた石に生き方教えられ
いつからか大笑いしたことがない

親の背が子に生きざまを教える
タンポポのように翔びたい車です

嫁庇り母の知恵袋が破れ
雑草でないとタンポポ黄信号

たんぼの黄色は愛を秘めている
大切な本音に鍵をかけておく

大の字になってみている昼の月
多哥由

川柳塔みぞくち 小西 雄々報

人影が動き山菜先取られ
康女

人影が動き山菜先取られ
康女

夕暮れに影植田へと伸びゆけり
影となり日向となって子をみつめ

木かげからそっと見守る父の愛
硝子越しもしやスリムがふき出した

影慕いアドレナリンがふき出した
無意識のとなりへいつも影がいる

末孫に亡父の面影垣間見る
呼び止めると影は逃げ腰かも知れず

父の影のこして山の木も太る
離れない影は味方と信じたい

大声で影武者唾うことがない
大原川柳社 矢内寿恵子報

春萌えて私を誘う旅心
巢立つ子へ萌える大地の応援歌

川いっばい萌えるみどりかうつされる
嫌な客愛想も儲けと腕まくり

愛想いいいるまにお客にげていき
愛想いい医者をナスがにらみつけ

見た目より愛想いいのに惚れ直し
愛想して恋のチャンスをねらってる

お天気屋の愛想笑いが気にかかる
適齢の娘を持ち親が愛想する

口八丁手八丁で愛想よし
愛想は無いが二人三脚しています

愛想のつもりが本当に來てしまし
無愛想な父が留守番引き受ける

あの愛想なるほど裏があったのか
まな裏に風のかたち草萌える

あすなろ 和子 昭子 絹子 静子 美佐子 朝代 敏子 こふゆ 喜美子 巴子 悦子 辰江 妻子 あや子 玉恵

あすなろ 和子 昭子 絹子 静子 美佐子 朝代 敏子 こふゆ 喜美子 巴子 悦子 辰江 妻子 あや子 玉恵

あすなろ 和子 昭子 絹子 静子 美佐子 朝代 敏子 こふゆ 喜美子 巴子 悦子 辰江 妻子 あや子 玉恵

あすなろ 和子 昭子 絹子 静子 美佐子 朝代 敏子 こふゆ 喜美子 巴子 悦子 辰江 妻子 あや子 玉恵

藤の花萌えて私もお辞儀する
嫁の愛想に頬をゆるめている武骨

萌え出づる命地球を割っている
川柳塔おつばこ吟社 木村あきら報

月末の財布に溜まる妻のウツ
百年の計も崩れてくる不況

ダムの底昔ロマンのあった村
木の薫る新居に余生満つる日々

一言がすぎて後へは退けぬ羽目
千羽ヅル翔び立つ碧いあおい空

楽隠居多趣味で苦勞背負い込み
内助の功越えれば妻は強くなり

外されて初めてわかる裏の顔
ダイオキシンの廃材燃やす置土産

ひとりとは言わぬが夫と旅に出る
雑草の生命雑草心得る

追いつけない花をつけてる竹トンボ
精いっぱい花をつけてる山野草

ウス着して体重計測女子の敵
雪溶けを願って今日も日露の手

学び舎の遠くに咲いた出世花
急場しのぐ気転に母の知恵生きる

つまずいた草に季節を教えられ
堤防の若草に座す老い二人

潰れないただそれだけで郵貯する
回り道やとつかんだ愛のつば

川柳岩出 児島与呂志報

川柳岩出 児島与呂志報

川柳岩出 児島与呂志報

川柳岩出 児島与呂志報

預貯金にそっぽ向かれた低金利
面白く話す笑顔に人の良さ

ゆつくりと回してみたい二十四時
これだけは手を出さまいと貯金する

今にして未練心がかけ回る
逆らわず回転ドアーに身を任す

朝霧に咲く花みたく回り道
いい気分今宵は少し回り道

年金をみんな貯金に回す幸
肩書きはないが自由で面白い

小回りの甲斐ありました棒グラフ
お茶づけで良いから一杯食べる仲

せつつ川柳万画会

延寿庵野鶴報

点滅し幽明界を螢飛ぶ
手摺みの孫の食欲止められず
食べさせる親も一緒に口を開け
姿よし顔よしそれでまだ独り
飛び魚も明石大橋見に跳ねる
食べられる内が花だと知る齡
偏食の子を叱れないお父さん
後悔が食べたあとからついでくる
ふところを飛び立つ子等に幸あれと
子供等の手から離れた竹トシボ
飛び越せた溝ふりかえつぶらな瞳
食べる夢毎日見てた飢えた日々
年金でやつと食べてる細い息
善人の顔になりきり金を借る
顔のしみうまく消えたが疑われ

保子 昌子 和子 ふみえ 悦男 正直 哲雄 重雄 たねえ 愛子 アサ 故与呂志 興次郎 美也子 昌三 満寿蔵 永壽 久美子 晴子 加寿老 真由美 好治 紫香 喜久造 勇次郎 夢之助 英雄

若づくりしても背骨は丸くなり
今はもう飛んで張り切る力なし
東京の孫に逢いたく気持ち飛ぶ
花生けて姿かたちに満足し
よく食べてバンドの長さたりません
姿なく足音だけが先帰る

委見のわれと語らう独り者
食い繋ぐ知恵も限界低金利

岸和田川柳会

長谷川呂万報

ルーキーが部長の前で大ジョッキ
新弟子が綱を夢見る大食らい
当たり外れあるルーキーに泣き笑い
ささやかな年金杖とも柱とも
冷静になると私は酔っていた
愛憎の修羅場に冷めているピエロ
冷静に辿つて越した茨道
冷静な妻の理詰め泣かされる
冷静になつてはじめて口をさる
冷静になるとなんでもない噂
寝返りをうてはナースの良い知らせ
用意した勝訴のしらせ取付けてくる
このトーン明るく知らせに違いない
落し物あつたと朗報聞く電話
朗報にただうろうろと若いパパ
わき腹をおささ最終走者の苦
土着民真つ赤な布を脇腹に
わき腹をえぐる思ひのはじをかく
メスのあと夫の脇腹痛々しい

吉昭 清澄 風子 富美子 鈴木子 孝治 東鶴 野鶴 路子 一齋 甚一 敏光 東雲 美津江 盛之 基 一弥 狸村 信博 洞庵 苑子 けい子 さよ子 洋 和歌子 昭二 弘子

脇腹にヒ口融資断われ
わき腹を何の合図か妻つつく
わき腹の子が口惜しさをバネに生き
わき腹がちくり肉肉られていなるな
負けてやれ母さんわき腹をつつく
苦情処理赤字覚悟でする幹事
赤字国債議員の腹は痛まない
セクターが泣き泣き貰う赤字線
添削の赤字なるほど句が生きる
値下げして赤字覚悟という儲け
赤い字でてつかく書いた店じまい

翠洋会

いつの世も平和であれと慮舎那仏
千の目を観音様が持っている
風呂上がり小びんふたりでくつろげり
田道間守大正生れだけが知り
吟行の足止めて見る句碑涼し
ジョーカーが表通りを通り抜け
表から討入りはせぬチビの靴
くつろいでいたのは砂の上の城
母の手を握ってほしい千手さま
母ではみよちゃんが待つランドセル
母が逝き里にくつろぐ場所がない
雨天中止しぶりのティータイム
孫の手紙ママも手伝う表書き
表向き豪華な式で未入籍
お化粧をしたら表へ出たくなる
頑固一徹守り通した墨作り

白光子 富志子 ひで 金太 ダン吉 辰郎 辰郎 蛙城 東吉 呂万 萬的 蛙報 千枝子 東雲 叡子 会美 真砂 千梢 志華子 喜美子 義 正坊 周信 千歩 絹子 英千子 孝子 恭昌

再会のお約束する蘆舎那仏
罪深きところに優し蘆舎那仏
千手観音すがれる千の手をのべし
上辺だけかざる本家の鬼瓦
表札に亡父が睨みをきかして
表情が険しい父の資金繰り
表裏知つてる友のありがたき
表向き昇進という島流し
表向き仲よく見えるベアルック
くつろいで仲良くおどる洗濯機
くつろげば猫もくつろぐ昼下がり
唐招提寺ああ蓮池も核家族

倉吉川柳会

松本よしえ報

履物の乱れに手厳しい躰
パーティーで踊るガラスの靴を履く
老いの腰うっかり羽目も外せない
道伝子が羽目を外すと大変だ
新調のスニーカー履き医者通い
道端の名無し草にも春が来る
登山靴捨てると決めて履いてみる
お付合い羽目を外して空財布
下駄履きの財布もゆるむ宿浴衣
末端のきつい意見で座が割れた
妻の留守羽目を外して怒られる
履いてみて鏡見てから決める靴
拾う缶捨てる缶には追い付かず
子沢山なんでも履いて飛んで出る
端っこが判らぬようにスイカ切る

暁子 澄子 さと美 石舟 蛙 久峰 蕉子 正雄 靖巳 日出子 希久子 鬼遊 玲子 かつみ 康志 雄々 節子 ちよ子 苦句 賀寿恵 和枝 西喜美子 御前 よしえ 喜美子 和歌子 一夫

空缶の始末で解るお人柄
密航者赤い鼻緒のつつかけ草履
スカートの端を引っぱるうちの犬
履物のない国が取る金メダル
羽目を外したあとの空しい孤独感
端女といわれたくない紅をひく
旅行先財布すらられて借りる羽目
脱ぎ捨てた子のお下がり親が履く
羽目外す事は早いと誉められた
少し羽目外して買った娘の晴着
ジーンパンに下駄も中々粋なもの
端々に父の気骨をにじませる
橋山へ登る草履を編んで置く
ピンセットでいのちの端をつままれる

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

花の闇帰らぬ友の影がある
判断の甘さが招く深い闇
この闇を抜ければ綺羅星に会える
それからの私に闇がつきまとう
小細工を闇にまぎれてしたくなる
信念を曲げると狂う独楽の芯
気疲れの弱味を見せぬ袴の芯
芯のない男の風は乱高下
座禪組む心を芯に寺を去る
一本の芯を残して枯れていく
女系家族 芯になれない父がいる
松の芯老父に明治の気骨あり
錆びついた感性みがく山の風

秋草 石花菜 民枝 次男 季芳 螢 ゆり子 幸子 智子 きみ子 天雀 康子 睦子 完司 たず子 澄子 文子 房二 諷云児 はつ絵 江美 トミエ 能子 周信 春蘭 みつ子

歯を磨く今日暴言を吐かぬため
磨り硝子愛の影絵を踊らせる
神獸鏡磨き古代の銅鏡を追う
悠久の歴史を磨く影絵
荒削りコーチみっちり磨き上げ
石ころが石ころなりに磨いてる
大器みがく鬼にも仏ともなつて
まだまだ夢追つてお仏も坂下る
まだ先が見えず銀行貸し洗る
まだまだとほどほどが組む旅業し
核にまだこだわっている国がある
未定でも残すものあるかと思う
さまざまな緑求めて行くリュック
ポックリを願う散歩のひとりごと
金貯めてからはアハハと笑わない
さくらんぼ孫はどうしているかしら
しなやかにいくさをする花の芯

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

退屈をさせぬ雑草伸びてくる
蝕んだ地球儀を縫う針がない
豪邸の庭木をそつと値踏みする
方言に悩む都会のランドセル
猫柳芽が出るまでは活けておく
お節介やいて悩みの種を蒔き
猫舌へ熱い茶いれる妻の乱
ペアルック縫い上がる頃熱も冷め
尋ね人悩んだ末の一行詩
屋上で土一升の花造り

義一 源一 比ろ志 絹子 正とし 松煙 醉虎 涼子 石舟 正坊 信子 ヒサ子 ルイ子 しげお 富喜子 いわゑ 良子 道子 嘉信 充子 ふみ かつ子 街湖 サト子 徳三 芳江

平服と書かれて悩む披露宴

言えないで半日悩むゴメンナサイ

縫うように餃子へリズミカルな指

ロボットの相談出来ぬ資金繰り

猫がぶりいつまで続く見合席

夫婦喧嘩の綻びを縫う子の寝顔

縫いものが得意な亡母の針が錆び

猫用と雑魚を買つてる見栄っぱり

お互いに猫背になった苦笑い

使えない猫の顔に税はらう

傷あとが悲しい場末のヌードショー

猫じやらし遊びあそばれ日が暮れる

縫いぐるみ想いの丈を封じ込め

菜園か芝生でもめるマイホーム

背伸びする猫につられてする欠伸

悩ませた子から母の日祝われる

花開く小さな庭が社交場

仏壇へ欠かさぬ花が庭で咲き

川柳塔打歌

米田

幸子報

邪魔者にするな爺さまドル箱だ

会いたい人の庭へボールを蹴り込んだ

蹴り込んでフランス行きを決めた足

蹴られても明治の女芯がある

あいつとは蹴って蹴られた仲だった

パソコンが軋む倒産かも知れぬ

一瞬のすきを車は許さない

恋人をスポーツカーに乗せて来る

へらへらと髪に養毛剤を振る

雅子

省子

見早子

広和

笑子

羊子

亜希子

為佐子

達也

八重子

句多留

純子

のぶ子

和可

政勝

潮華

早智

満秋

幸子報

かつみ

季芳

宗光

逸子

順子

孝恵

たけの

よしえ

和枝

お先どうぞ車線変更してあげる

お邪魔でもやってみせたい始球式

衣更えるたび古着邪魔になり

へらへらと笑って妻のごまを摺り

狭い道違法駐車が邪魔をする

へらへらと噂に尾鰭ついてくる

ベッドでも邪魔にはならぬ居て欲しい

男ならへらへらせずにアイラブユー

陰謀かへらへら鬼がお世辞いう

天気予報ハズレて傘が邪魔になる

軽トラで充分ばくのお引越

七人の敵に疲れた足音だ

人生の幕に向かって大車輪

金のある方へへらへら寄っていく

世の中の邪魔になるから隠居する

玄関に一足邪魔な靴がある

道がみな車のためにあるみたい

アパートの隣ピカピカ高級車

人生の山坂知った車椅子

エンジンの車ベツドに横たわる

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

絵手紙の切れ長な目が気分いい

気分よくテレビに耽る雨の午後

とっておきの気分を抱いている寝顔

喪が明けてわたしの気分とりもどす

気分だけよくてエンジンかかりかね

ほんのりと夢の気分誘う酒

赤い羽根みんな他人で救われる

睦子

玲坊

京子

禎元

善江

信子

セツ子

しろう

雄々

たけ代

完司

玲子

克枝

芳光

勝見

螢

弘朗

富枝

節子

幸子

恒松

友子

ひふみ

きみ子

房子

邦康

アキエ

博子

好きというひとに不幸を救われる

救われた気がするあなたの風に会い

八月のあふれる水に救われる

切れた子を救う手段を考える

寝たきりの母を救って車椅子

いたずらなカラム内緒を来てはじる

内緒ごと聞かぬふりして耳を立て

重箱の隅で内緒話は落ち着かぬ

ここだけの内緒話がすぐ飛火

おぼろ月内緒話がしたくなる

ハンカチに包んだままの内緒ごと

決断しやがて嫁ぐ日待つゆとり

やがて夏浴衣の柄をよっている

やがて止む雨だ軒下借りてゆく

嫁だとしてやがて姑になる運命

やがて来る世紀を一目見て逝こう

トロロウニだやがて山葵がきいてくる

ひらめきが大きなチャンス握ってる

チャンスだと誘う言葉にふくみ針

内輪採め逃げ出すチャンス組立てる

夕映えのシャッターチャンス逃がさない

チャンスには強い男のホームラン

逆転のチャンスを狙う不況風

川柳ねやがわ

江口

赤トンボ肩にとまらせハイキング

自販機が手招きしてるハイキング

半分は電車で済ますハイキング

飯盒のへこみが語るハイク歴

螢

早苗

日出子

みえ

米子

茂子

茂美

満江

登美子

久枝

奏子

静江

静恵

きみえ

多賀子

義良

与根一

畔

太泡

芳枝

寿美子

昌枝

町紅

度報

三郎

かすみ

文秋

小路

野仏に花いちりんをハイキング
ハイキング風と対話をしてかえる
てきばきと主婦妻母のスケジュール
きらいなものまく食べさす主婦の知恵
主婦のエプロン桜んぼ実るころ
タイムカード打つたら主婦を匂わせず
残念を抱いて靖国寡黙なり
記念日が過ぎて男は思ひ出す
記念でした簡単ないう他人
出し切らぬ汗が残念がったかて
残念だが妻には勝つたことがない
救急のたらい回しが悔まれる
解説者惜しい残念言うばかり
戦略を秘めて男の薄笑い
いやな人にもにこやかにこんには
戦略はひとりの胸で熱くなる
戦略を読んだか敵は動かない
好きだ好きだと一生懸命に言おう
戦略を考えながら寝てしまい
戦略にまた使つてるサンクラス
いい戦略トイレの中で思いつき
踊り子の脚線に酔う初夏の風
流れ出た米一粒を見逃せず
母の日に猫まで膝にじやれてる
年金の引算ばかりして暮す
戦略の仕上げ小石を投げてから

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

一風 淳朗 頂留子 光子 英壬子 三峰 博泉 たもつ 一途 波留吉 高栄 重三 権太 ルイ子 冬葉 庸佑 礫 とし子 恵子 洋 亜成 順三 亜也子 仁清 度

手もみ茶の名人好きなのは番茶
呱呱の声はつと一息お茶にする
薫風にふらりみの虫何思案
金持つとふらり出かける悪い癖
どこまでの命かふらりふらり四季
停年の夫しばらくふらりさせたい
辛抱へストレスたまる禁煙者
運命線夫と同じ空気を吸う
息を吸うそれもパウーのあと二キロ
好奇心吸つて深入り悪の道
指吸うて夢見てるらしあどけなき
黙もくと稼いでみんな子に吸われ
ひとことが言えず大きく息を吸う
鯉口を切つて大きく吸うた息
禅僧は血を吸う蚊にも情けかけ
旅慣れて安宿うまく嗅ぎつける
台風が追いかけてくる旅にいる
旅で会う女はだれも美しい
船出する三三九度の盃を干し
一人旅夢の続きを追うてみる
おいでませ誘われるまま旅に出る
死にたいが口癖ごはん三杯目
おばあちゃんいつも最後の旅をする
老後なお戦ひきずる私小説
同じ話を初耳みたいに聞いてあげ
エプロンを着けると祖母は主婦になる
石を投げると老人に当りそう
老若の和音の温い潮境
眼差しは東の間蝶も黄昏れる

酔虎 一風 三男 欣之 夕花 信博 秋子 ダン吉 勝美 柳宏子 ますみ 千里 弘直 利昭 和歌子 とみを 弘一 隆盛 扶美代 賢子 いつふみ 剛治 年人 春子 シマ子 度 洋 森子

川柳塔鹿野みか月 土橋
幸せを掬うきれいな綱を買つ
女物わたしに履ける靴がない
露しとど脚気の治る野を歩き
日が長く夏至はいつかと古老聞く
夏を待つつかのように風夏を呼ぶ
つばめ来てうれしい家にしてみらう
大家族離に差別のない燕
子も来ない過疎の家に飛ぶ燕
内職の窓へ燕が来てくれる
新築を燕夫婦に言つてない
ハンディも個性つばめの低飛行
家庭内離婚をみてた燕発つ
生きている限りあなたを守ります
限りない空想うかび眠れない
今日限りと誓つた禁酒禁煙
ワンタッチこれに限ると父笑つ
極楽に限るパスポートは要らぬ
七色に限られた日を咲き誇り
限られた予算で道が半分だ
期限切れ神に返してゆく命
この私あなたにこにこ包む母の味
風呂敷あなたにこにこ包む母の味
にこにこアンパン食べるおばあさん
にこにこを忘れたままで今日終る
どん詰りにこにこ村の灯を守る
酒飲むと本音言うからおもしろい
なんだいなそんな事かて済む本音

蟹報 幸枝 喜与志 野草 武子 弘子 初子 保子 実満 三千代 節子 宣子 忠良 勝見 智恵子 公子 睦子 隆風 富久江 蜜郎 美さ子 美恵子 かつ乃 くに子 汲香 はるお 久枝 和子

人として生きる本音は提げている
風人
残照に本音をひとつぶらさげる
きみ子
父の日に父の本音と食い違ふ
螢

かわはら川柳会 上田 俊路報

世の中のささやく声にまどわされ
秀子
病床の人のささやく身を正す
聰
春つばめ舞つてささやく世のつらさ
悦子
ささやくにのつて汚職の芽が育つ
泰良
ポケットの礫に謀反ささやかれ
洋々
うっかりと蛇口ひねつて長話
ふじ子
診察日うっかり忘れ歯が痛む
道子
輪の中にうっかり入り罌に落ち
茂登子
一言をうっかり放ち信無くす
静子
似たような他人の靴を託びて脱ぎ
俊路

岬川柳会 八十田洞庵報

天国できつとつきき暮してる
勇
うきうきと嵌めたボタンの掛け違い
みやこ
買い替えたカメラうきうき出番待つ
孝子
いく星霜いびきに馴染む元他人
とみ
デュエットが赤の他人を結ばせる
里子
うきうきと人のうわさに花咲かせ
ユミ子
病室の他人同居は息つまる
みつ子
うそじゃない君の笑顔が見たかった
ヤエ
サッカーの応援団は世界一
龍弘
母の日は夫と子供に懺悔の日
よし子
成りすぎる胡瓜近所の門に置く
悦子
花盛り庭のさつきの色に酔う
ミチエ

電話待つ心つきき初デート
信博
一張羅を着込みうきうき老いの旅
正美
他人の飯食うた男に骨がある
浪速子
お茶の間のいくさに猫は他人顔
幸子
アルバムの他人の頃をなつかしむ
令子
ガン病棟ナースのうそになごまされ
庄六
歳月は置られてきました同窓会
和美
他人には見られたくない化粧前
年子
いつもと違う他人行儀に何かある
俣子
根も葉もない噂他人が嗅ぎにくる
洞庵

川柳塔おとり 原 みさを報

証券も預金も持たぬ蛙です
雄々
ほおずきの朱ほどの希み恋すすむ
艶子
気晴らしの酒が角出し槍を出す
黙光
向日葵のように希望は燦々と
佳子
うちの子の絵はどれ見ても晴れている
千秋
何もかも希望通りになる怖さ
以和万津
世渡りの蛙の面も持つて出る
宏章
異状なしからりと晴れたレントゲン
舎人
一すじの波を立てたせるやせ蛙
ゆきの
神棚も希望が多く持つて余す
せつ子
齢は忘れて店舗改装しています
和子
蛙の子習わなくても三味をひく
孝子
新調のスーツ梅雨明け待っている
幸次郎
毎日を生きる希望に孫が居る
野草
あきらめず東大希望持ちつつけ
由多香
戦争に希望進路を変えられる
崇

困難にともし続けた希望の灯
庸二
晴れる日も曇る日もある人の常
敬之介
核のない地球が晴れる平和くる
小生
老いの身も希望がもてる窓がある
道子
晴れて今日貴男の妻になりました
伝住
晴れるのが惜しい気もする雨やどり
風花
子の希望願つて俄か神だのみ
清子
確率はまだある手術控室
みさを

とつと川柳会 武田 帆雀報

七転び傷はまだまだ浅かった
幸子
一張羅着てるばかりに転べない
行男
骨粗転んで脆さ知らされる
粗粒
丁度よい所で転んで見せちゃった
一枝
風が吹き大きな運が転げ込む
季芳
蓮華の上に転びたくなる五月晴れ
高栄
転び出た冗句が人を傷つける
忠良
笑い転げてやがて淋しくなるジョーク
帆雀
転ぶ人の隙間を抜けて来たピエロ
喬水
念入れた診察不安増すばかり
一夫
念入りにおむつを添えである捨子
東雲
念入りに医者ギキイ歯をほせる
大漁
念入りに採まれギックリ腰になり
蟹郎
念入りに口説き彼女のハート射る
圭一郎
善人に化ける念には念を入れ
鬼桜
念入りに写経を書いて棘を抜く
きみ子
熱心な誘い私に脈がある
典子
熱いコーヒーもう雑音は切り捨てる
節子

熱あがっているけどきつと振られそう
ママの熱一家のりズム狂わせる
熱っぽい目で見なさんな金は無い
膝枕に心乱れるほど熱い
熱烈に結ばれ派手な離婚劇
熱烈に孤独な心あたたためる
熱血の先生ネクタイ邪魔になる
知恵熱を下さい文殊菩薩さま

川柳藤井寺

高田美代子報

まだ女日焼け気にして春の傘
白紙には戻せぬ過去を道連れに
明石大橋はや百万の足が越え
ひとしきり溢れでる音いい湯だね
たつぷりと使っています化粧品
たつぷりとしごかれ今の椅子がある
たつぷりと賽銭上げたはずなのに
どの家もたつぷりとある粗大ゴミ
女の敵はおんなでたつぷりの火花
たつぷりと飲んで一息妻の膝
毒舌をたつぷり浴びて失語症
のし付けて返すたつぷりと返す
たつぷりの愛がしばしば邪魔になる
たつぷりと食べて心飢えている
じんじんが夢の中まで追ってくる
痛いとしんじん攻めてくるマイク
緊張感じんじんの出る番前
再会にじんじん響く古い傷
ひとり酒胸にしみ込む刻といふ

かつみ 舎人
和美子 和歌子
陸子 美恵子
静生 和枝
石花菜 石花菜
政治 治子
利武 利武
かつみ かつみ
桂子 桂子
みよ子 みよ子
悦子 悦子
敦子 敦子
和子 和子
恒雄 恒雄
大八 大八
美代子 美代子
扶美代 扶美代
夕花 夕花
三郎 三郎
志洋 志洋
史郎 史郎
修六 修六
絹歌 絹歌

写経する指がじんじん熱くなる
じんじんと痛む奥歯の不発弾
良心がじんじん疼くから懺悔
リストラの風に揺れてる父の旗
カルガモのようにガイドの旗を追う
マスコミの動きで向きを変えろ旗
一本の旗に勇気を確かめる
日の丸で今年ももめている行事
学校に残る日の丸恐怖症
くちびるを噛んで下ろした女旗
別姓で輝き出した妻の旗

堺川柳会(前月分)

河内 月子報

そこのとこ苦手ですのと逃げ腰で
飴買えず陰から見えた紙芝居
ウーマンリブ尻込みしない露天風呂
オブラートに包み苦手を飲み下ろす
苦手だったが今は笑って側にいる
お金では買えない味を食っている
私だって苦手ありますカスミ草
うっかりと知ったかぶり老人へ
べんぢやらが苦手で出世逃げました
一芸が光り苦手は見えませぬ
夢を買うつかみどころが見つからず
私の虹揺れて兄貴は花を買った
夢の虹天に喜劇を買いにゆく
目立つのが苦手黙って飲んでる
打つ手みなしみたれ景気ローリング
嘘ませて幸せ願う老婆心

花梢 花梢
和樹 和樹
婦美枝 婦美枝
映三子 映三子
昌子 昌子
正一 正一
鐘造 鐘造
智久 智久
美房 美房
アキ アキ
昭子 昭子
春蘭 春蘭
哲平 哲平
頂留子 頂留子
美代子 美代子
昭子 昭子
扶美代 扶美代
りつえ りつえ
みつこ みつこ
冬虹 冬虹
孝子 孝子
日出子 日出子
金二郎 金二郎
勇太 勇太
紀美女 紀美女
健吾 健吾
小雪 小雪

嬉しさをしっかり胸にロックする
じろじろと見られるうちが花なんよ
華やかなハンカチを買う早苗月
苦手なくこの指とまる人が好き
じろじろと見られています君と僕
向い風真つ正面に立つ苦手
克服をした苦手から咲いた花
嬉しさをしかと捉えたロゼワイン
動かない証提しっかり録画され
うっかりと喋ってしまつろくでなし
情熱で苦手を得手にする流れ
値段みて高嶺の花とあきらめる
餌つけが大の苦手で釣りに行く
昨日から何かを思い出せず居る

かりん かりん
磯子 磯子
文 文
楓 楓
アキ アキ
鐘造 鐘造
五月 五月
柳宏子 柳宏子
梓 梓
千代 千代
ちや子 ちや子
八千代 八千代
東雲 東雲
つづや つづや

柳界展望

込みは8月11日までに奈良市三条町606奈良新聞社文化事業部川柳係へ。欠席投句は8月15日までに500円を添え、奈良市北市中町71杉野睦朗へ。

★しまね文芸フェスタ'98川柳大会は8月23日、出雲市の厚生年金会館で開催。兼題は「電話」「演歌」「へちま」「汗」「いらいら」各題2句、締切13時。参加費1000円。欠席投句は8月18日までに参加費を添え出雲市松寄下町284吉岡きみえ宛

★第6回相生市もみじまつり川柳大会は11月8日午前10時半から相生市総合福祉会館で開催。事前投句は各題1句。光る「三崎規正▽返す」春城武庫坊▽答え」藤本静港子 応募料1000円。9月21日までに相生市旭1-1-3相生市教育委員会生涯学習課川柳係宛。当日出句の題は花「三宅能婦子▽采」佐藤寿美子▽駒

▽木下草風▽石「赤井花城各題2句、11時50分締切。

▽入事往来△

■6月7日、津山川柳大会に薫風主幹は病を押し、酸素ボンベ持参で出席、選者の任を果たした。

■6月28日、奈良番傘50周年大会に薫風主幹はじめ笛生、柳宏子、鬼遊、楓楽氏ほか同人多数が参加。

▽御芳志御礼△

■岡本清水氏（竹原市）から小出智子さん一周忌の供養として金一封を拝受。

■森山盛桜氏（鳥取県）から父君保男氏の死去の供養として金一封を拝受。

★豊中もくせい川柳会は、平成9年度のベスト8を次のとおり決定、7月の定例会で表彰した。

①小池しげお②玉置重人③榎本路児④田中正坊⑤藤村あや女⑥江口享子⑦満中きく子⑧住谷石舟・松本ただし

★第29回奈良新聞川柳大会は8月23日午前10時から奈良県新公会堂会議室（バス「大仏前」下車東へ3分）で開く。宿題と選者は、迷う「福田秋雄▽再起」北野真生夫▽拭く「鶴本むねお一円」宮口笛生▽紙「杉森節子▽記憶」中村福太郎▽褒める「片岡つとむ、席題」稲垣馨（各題2句・午前11時半締切）会費3000円（昼食・発表誌）出席申

▽計 報▲

■笠原吸江氏（参予・藤井寺市）は6月28日死去。通夜、告別式に薫風主幹、岳人副理事長、鬼遊相談役、同人多数が参列。89歳。

■吉本菁風氏（同人・愛知県）は7月7日、病気のため死去。67歳。

新同人紹介

出口 セツ子
薫風・直次推薦

米澤 徹子
薫風・天笑・洞庵推薦

宮木 一夫
薫風・公一・和歌子推薦

水府忌番傘本社句会

とき 8月6日（木）午後6時
ところ 三井アーバンホテル（環状線弁天町駅）
お話し 「水府を語る」 中田 たつお氏
宿題 「逢う」 石川 勝選
「天下」 田頭 良子選
「指」 梶川 雄次郎選
「大きい」 河内 天笑選
「母」 磯野 いさむ選
会費 1000円
◎締切午後7時・席題1題・各題2句

8 月 各 地 句 会 案 内

句会名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(土)午前11時から 夜 市 川 柳 大 会	堺市総合福祉会館 本号P101参照 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
富 柳 会	1日(土)午後1時から 熱・和む・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
尼 崎 いくしま	7日(金)午後1時から 土・かたち・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 湖 畔・ホテル・地 蔵	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	9日(日)午後1時から 力・切符・ストレス	近鉄カルチャーセンター JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	10日(月)午後1時から 南・はねる・多い・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほたる 川 柳 同 好 会	11日(火)午後1時から 帰る・土産・すべて	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒560-0033 豊中市螢池中町3-10-28 井上直次
八尾市民 川 柳 会	11日(火)午後6時から ちぐはぐ・踏む・墓・血	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
岸 和 田 川 柳 会	15日(土)午後1時半から レポート・録音・業師・あこがれ	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒569-0827 岸和田市上松町610-85 芳地埋村
川 柳 ねやがわ	16日(日) 正午から メニュー・派手・不服・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	17日(月)午後1時から 規格・みんな・掃く・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卵の花	20日(木) 正午から 灯台・蕎麦・こだわる・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
東大阪 市 柳 同 好 会	22日(土)午後6時から 太陽・待つ・コップ・戦	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	23日(日)午後1時から ホーム・無事・「法」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
南大阪 川 柳 会	26日(水)午後6時から 童顔・当然・等分・毒気	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
京 都 塔 の 会	28日(金)午後1時から 帆・うんざり・浄土	ハートピア京都 地下鉄九太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★サッカーのワールドカップフランス大会に日本は一勝も出来なかったが、よく戦ったと思う。実力が少し不足していただけ。監督も選手も胸を張っている。いくら勝敗が問題のスポーツの世界でも、全力を尽くして敗けたのだから、恥じることはない。改めるべき点は次回への反省材料として検討したらよい。

★前月号のこの欄に予告したように、今まで掲載されなかった方の座右の句・私の句を、今月号からまとめ掲載する。座右の句は年に二回、同じ句を載せない。季節にマッチした句、亡くなった人の句はなるべく忌日の月に合わせる。作者の男女、地域など、いろいろ配慮することも多い。まし

て、年に二十四人だけしか載せられない。古い同人の方でも未掲載が多い。平成七年九月号から十二月号に私の句六百句を記念して特集したので、それを基に未掲載の方を調べ、改めて往復葉書で座右の句・私の句をお知らせ願っている。御協力をお願いします。

★座右の句・私の句に限らず、一路集、佳句地十選などの選者も、各地域・男女柳屋など考慮しているのでもうの方は、しばらく御猶子いただきたい。

★前月号に第二十二回全日本川柳山口大会の大会賞を發表したが、「その中の全日本川柳大会賞」どの椅子も輝いている春の門”は川柳柳ささやまの会員（川柳塔誌友）川西市西脇富美さんの作品です」と川柳ささやまの代表遠山可住さんから嬉しいお便りが届いた。（み）

ひとこと

「活字」
自分の文章や句が活字になって雑誌、新聞に出た時のうれしさ、喜びは味わった人でないかわからぬ喜び、うれしさです。それだけにまた活字には責任が付いて来ます。初めての投句が新聞に掲載されてうれしくなり、句を作り続け、一、二年続けば良いと思いついて六年目になります。初めの頃は楽しかったのですが、今では
大変むずかしく、苦しみの連続です。ところがうれしいのは、電車の中、風呂の中、とか寝ころんでいる時に突然句が浮かぶことや、人間の心、物などの見方が、今までより広く深くなって来たことです。これはお金で買えない収穫です。川柳を始めて良かったと心から感謝しております。これからは自分の得心のいく句を作りたいと念じております。（酒井 一壺）

☆子供の頃の妙に鮮明に残っている記憶の一つにふるさと京都の市電がある。それも古い型のチンチン電車と呼ばれていて堀川通りを走っていたもの。レジャーの少ない当時、兄と私は、母に連れられ、この電車で北野天満宮へお参りするのを唯一の楽しみとしていた。☆運転席や乗降口にドアがなく、チェーン一本だけ、雨の日は横から吹き込むの
で合羽を着ていた運転手さん。満員時、ステップに片足かけてぶら下がる人もいり、兄の小遣いで切符を買ったことがある。終点天満宮から降りた電車に乗ろうとして財布を落したことに気付く。☆車掌さんが温情のある人で私達の話の信じてくれ、電車に乗せてもらい無事帰ることができた。あとで親には大変叱られたのは言うまでもない。ほろ苦く懐かしい思い出である。（希）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

「発表（10月号）」

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



第四回川柳塔まつり

きりとりせん

〔平成10年10月7日(水)〕

ホテル・アウイーナ大阪

NO.

〒

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

住所

姓ふりがな
雅号

TEL

懇親宴

8,000円

会席料理

不参加
参加

宿泊

ホテル
アウイーナ大阪

シングル
朝食付

8,000円

当日泊
前日泊

◎ 懇親宴・宿泊の代金のみ同封の
払込用紙で御送金ください。
◎ 句会費は当日いただきます。

事前投句「進む」

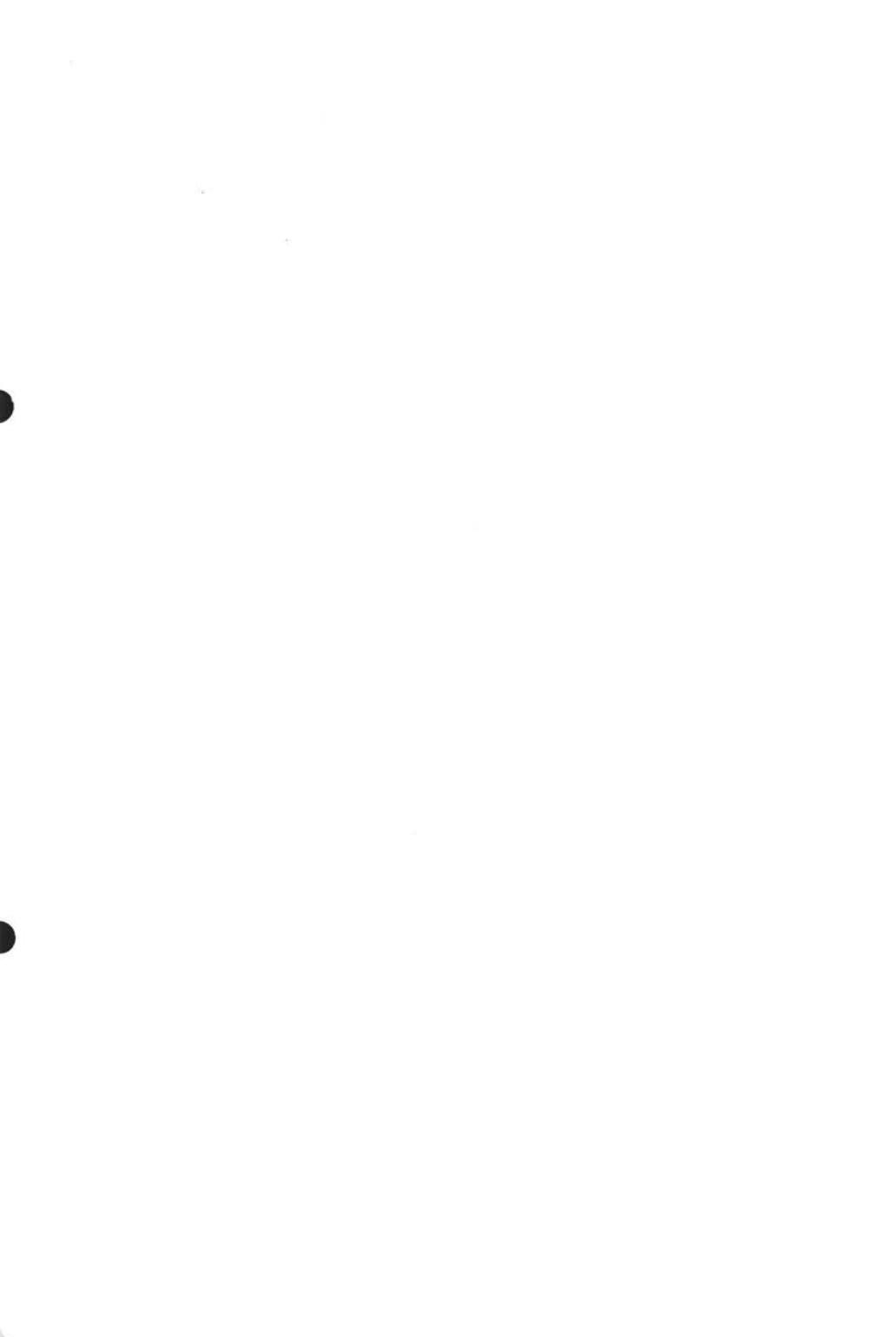
橘高薫風選

(9月10日締切)

出席者に限る)

NO.

申込締切 9月10日



作品募集

10月号発表（8月15日締切）

川柳塔（8句）	橘高薫風選
水煙抄（8句）	河内天笑選
渺湖抄（3句）	八木千代選
茴香の花（3句）	西出楓楽選
吟課題 （3句）	三宅不朽選
「しばらく」	
「ほめる」	清水利武選
「油」	最上和枝選

初歩教室「輪」（3句）吐田公一担当

11月号
課題吟「谷」「ま」「り」
「つぶやく」
初歩教室「バーゲン」

本社8月句会

とき 8月7日（金）午後5時半
ところ アウイーナ大坂 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「引く」「コーヒー」「身辺」「平等」「養う」

席題 1題 当日発表（各題2句以内）

会費 500円 投句料 400円

橘高薫風選 玉置重人選 江口度選 池森子選 粉山隆盛選

本社9月句会 7日（月）予定

兼題 「体調」「告白」「捨てる」「まぐれ」「飛ぶ」

夜市川柳募集

第3回「魚」 高田美代子選
ハガキに3句 8月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1)川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限ります。
- (2)渺湖抄・茴香の花欄および一路集（課題吟）への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花欄は女性だけ。
- (3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・氏名）を明記してください。
- (4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

定価 六百元（送料76円）

半年分 四千元（送料共）

一年分 七千九百元（同）

平成十年八月一日発行

編集兼 橘高薫

発行人 美研アト

印刷所 大和市阿倍野区三町二一〇一六

〒545-0005 ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06)561-6914番

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

□麻生路郎の幻の名著復刻

川柳とは何か

—川柳の作り方と面白い方

麻生アート発行・橋高薫風序
B6判・266頁・美装上製本
頒価2000円(〒340円)

川柳は世界に類例のない短い詩型であって、しかも日本独自のものである。しかし短いと云うことが、必ずしも作り易いと云う理由にも、つまらないと云う理由にもならないことである。

作り方については出来るだけ平易に書いた。書いてただけのことは判ってもらいたいし、判ったら大いに作って欲しいからである。句の味い方は解説本位にした。その方が判り易かろうと思つたからである。

○お申込みは川柳塔社事務所へ

川柳塔社

〒545 0005

大阪市阿倍野区三明町二一〇一六一

ウエムラ第2ビル202号室

電話 〇六一六二九一六九一四番

—麻生路郎自序から

作品募集中

(未発表作品に限る)

平成10年度 NHK学園 全国川柳大会

宿題(事前投句)と選者(各題二句)締切九月一日

①「南」坪 哲子(北海道・札幌川柳社)

②「富士山」野口 初枝(岐阜・岐阜川柳社)

③「ピアノ」木野由紀子(三重・番傘桔梗川柳会)

④「立つ」森中恵美子(大阪・番傘川柳本社)

⑤「道」八木 千代(鳥取・川柳塔社)

宿題(当日投句)と選者(各題二句締切当日午後一時五分)

①「小さい」小金沢綾子(東京・川柳きやり吟社)

②「園」松岡恵美子(埼玉・川柳かつしか吟社)

宿題事前投句の締切 平成十年九月一日(火)当日消印有効

投句料 二、〇〇〇円を作品と一緒に送ってください。

(入選作品集代を含む)

応募方法 規定用紙を使用。左記へ請求してください。

応募先 〒一八六一八〇〇一 NHK学園「全国川柳大会」事務局

☎〇四二一五七二一三一五一

大会大賞・特別賞・選者特選・秀作

平成十年十月十八日(日)午前十一時受付開始

くにたち市民芸術ホール

東京都国立市富士見台二一四八一

(会場への入場をご希望の方はご自分の住所・氏名のあて先を書いた返信用はがきを

投句作品と一緒に送ってください)

懇親パーティー 大会終了後、選者先生をまじえての

懇親パーティーを会場の近くで開き

ます。会員一人五〇〇〇円。ご出席

の方は、会費を事前投句と一緒にお

送りください)

昼食は各自でお済ませください。

NHK学園・国立市

文化庁・(株)全日本川柳協会・NHK

朝日生命・(株)生涯学習研究社

後主

賛援

朝日生命・(株)生涯学習研究社